

## 第5章 解体に伴う調査

### 第1節 発掘調査

#### 第1項 発掘調査の目的と方法

天守台石垣の解体に際し、石垣上面の発掘調査ならびに解体中の石垣についての発掘調査を実施した。石垣上面の発掘調査については、平成23年度に刊行した報告書（高松市教育委員会2012『史跡高松城跡整備報告書第6冊 史跡高松城跡（天守台）－発掘調査編－』）に詳述したほか、本書の第3章第2節にて概要を紹介しているため、参照していただきたい。

石垣解体に伴う発掘調査は、天守台石垣の背面構造を明らかにするとともに、石垣の孕みや緩み、割れといった破損原因を石垣構造の点から明らかにするために実施した。

調査の手順としては、次の工程に分類できる。①断面図作成用に東西、南北の主軸に沿って、トレンチを設定し、盛土を掘削する。掘削には重機（小型のバックホウ）を用い、一度に掘削する深度は築石2石分、およそ0.6～0.8m程度、掘削幅は重機のバケット1杯分（およそ1.0m程度）である。重機掘削後人力で断面を清掃し、作図を行う。②主軸沿いのトレンチで掘削したのと同程度の深度で、石垣全体の盛土を掘削する。③栗石を撤去する。④築石1石ずつのカルテ用データを取得する。各石材の上面に番号を書ききし、正面・上面・側面の写真を撮影する。⑤築石を撤去し、ヤードに置く。

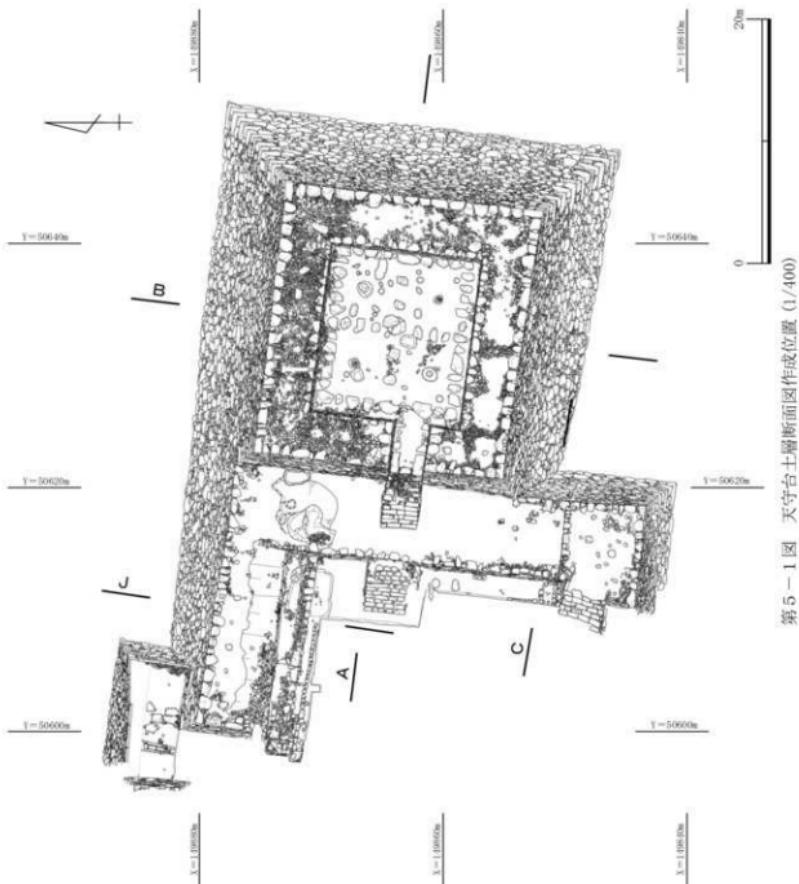
①～⑤の作業を繰り返すことで解体を進めた。なお、解体については原則北面から始めて、東面→南面→西面へと、時計回りに進めた。石垣中位よりも下位については、盛土の中心部を解体せず、安全勾配を計算した上で台形状で残した。

石垣解体が完了した後に、掘削せずに残した盛土部分を対象とし、壁面精査を行い、天守台の下部遺構の検出を行った。

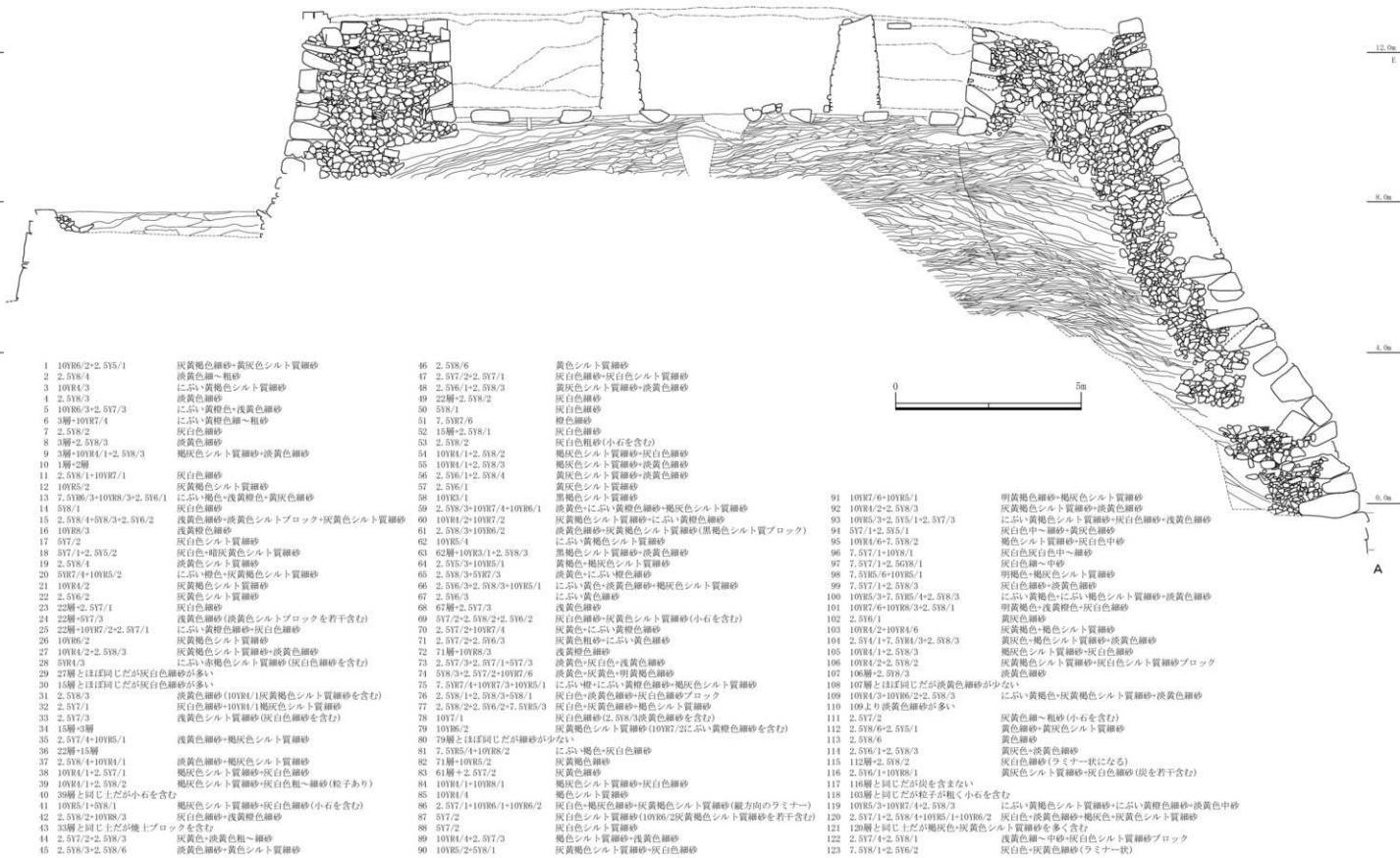
#### 第2項 石垣解体に伴う断面調査

断面観察用は、第5-1図に示した位置で実施した。天守台の中央において南北と東西に直交するように設定し、1段ごとの石垣解体に先立ってトレンチを掘削し断面図を作成した。この際、最初に解体した最上段を1段目と呼称し、以下解体順に上から1～21段目の名称を用いた。解体順に段の名称を用いたため、石垣上部にいくほど段の番号は若くなっている。第1項で記述した①から⑤までの工程を1段目から21段目までの解体に際し繰り返し実施した。第5-2図は東西方向のトレンチ断面図で、第5-3図は南北方向のトレンチ断面図であり、第5-9図は天守台前面の断面である。第5-10図は天守台前面の石垣であるF面の東西方向のトレンチ断面図であり、その位置は発掘調査の際に設定した断面Cと同じである。第5-11図は中川櫓台の南北方向のトレンチ断面図であり、その位置は発掘調査時の断面Jと同じである。

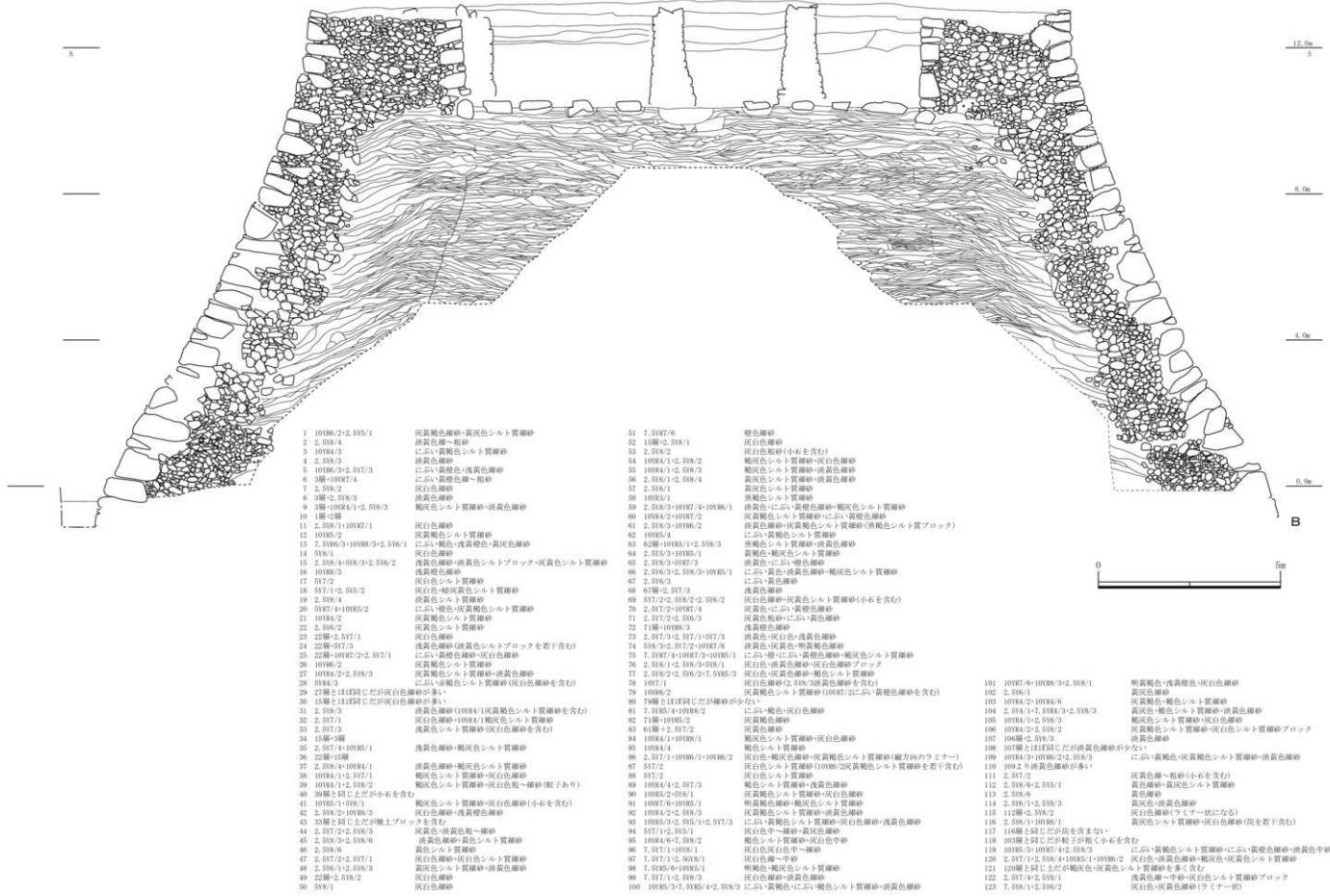
天守台の天端の標高は13.1m前後であり、根石からの石垣高は最大13.9mである。石垣の傾



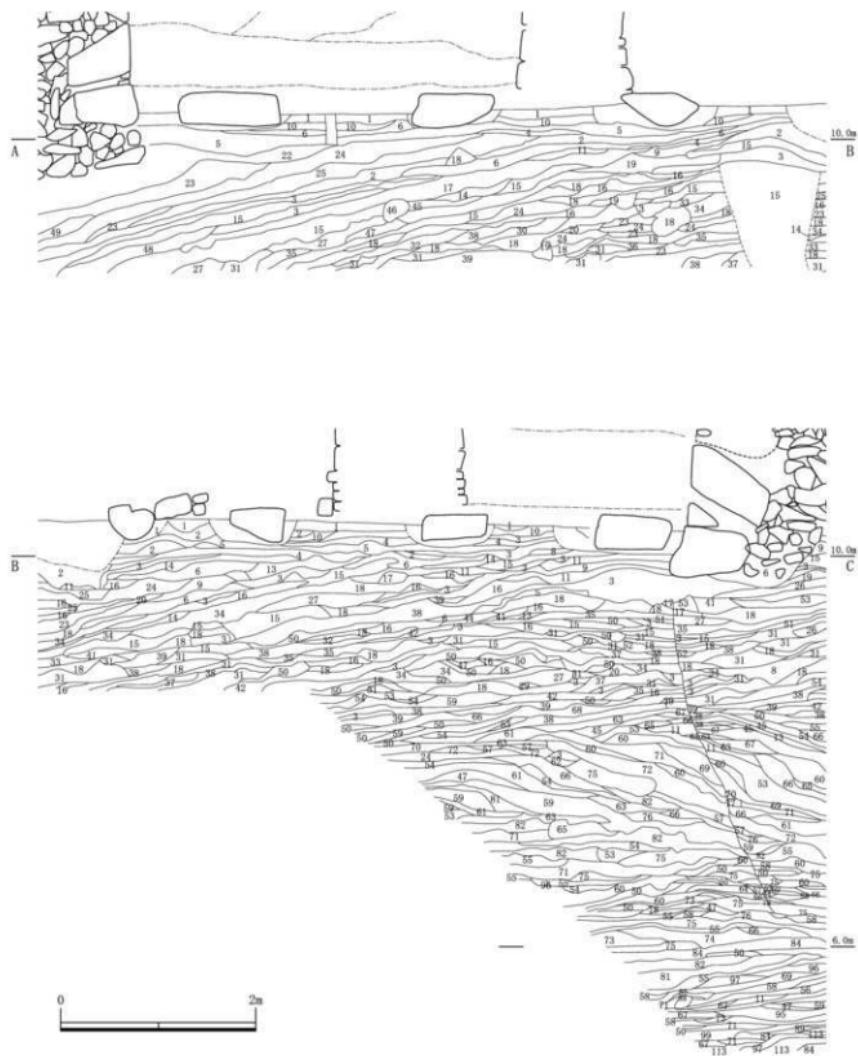
第5-1図 天守台土層断面図作成位置 (1/400)



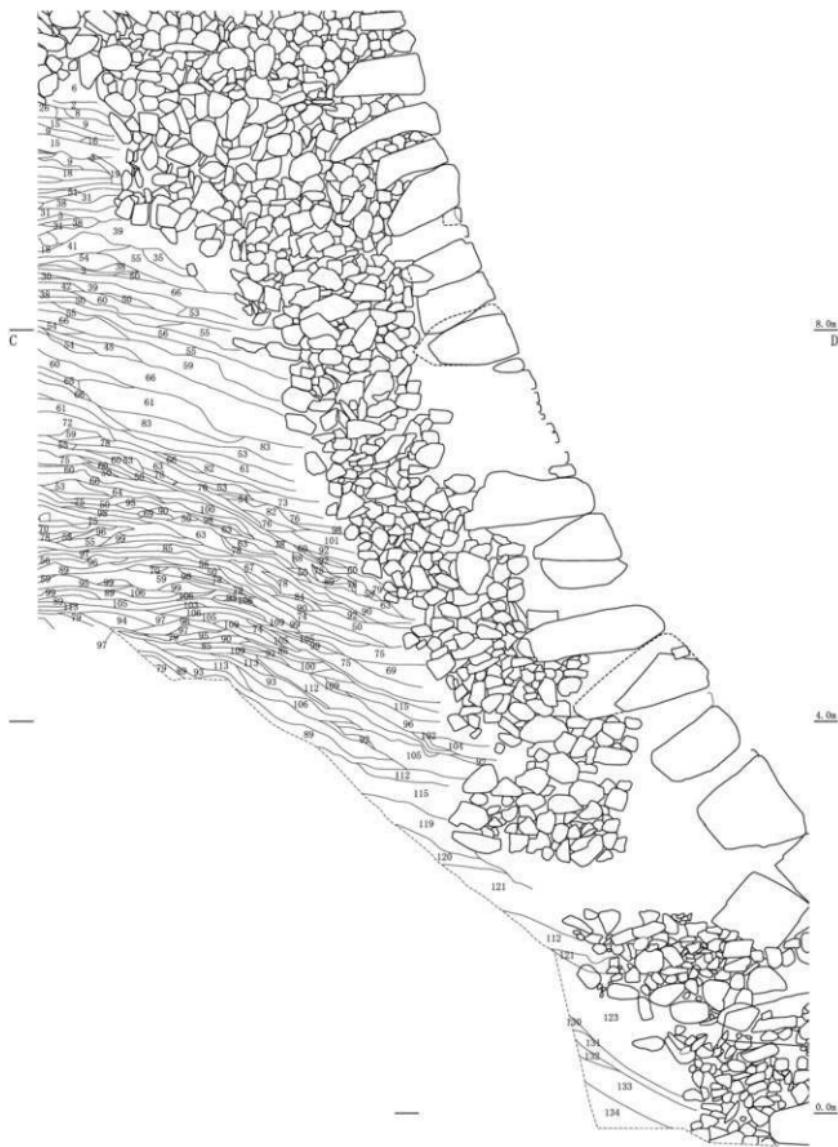
第5-2図 天守台東西断面図(1/100)



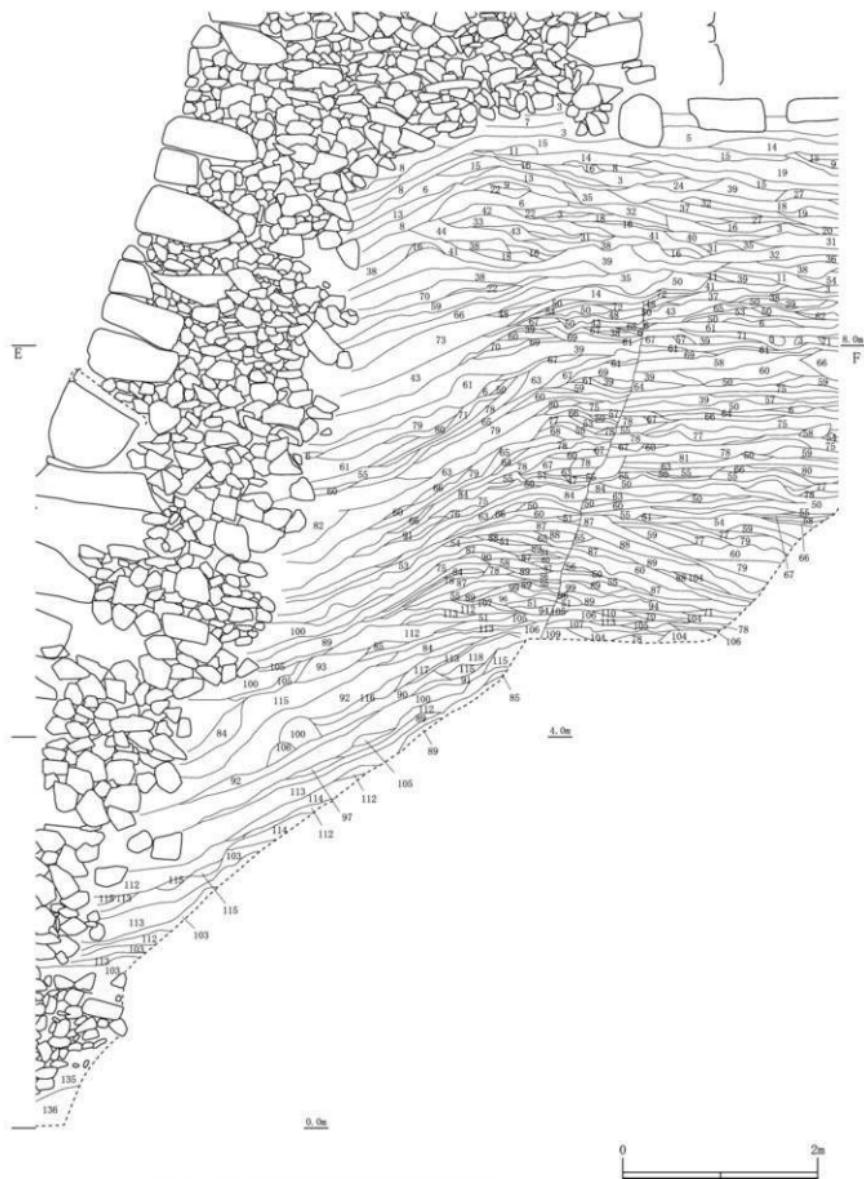
第5-3図 天守台南北断面図(1/100)



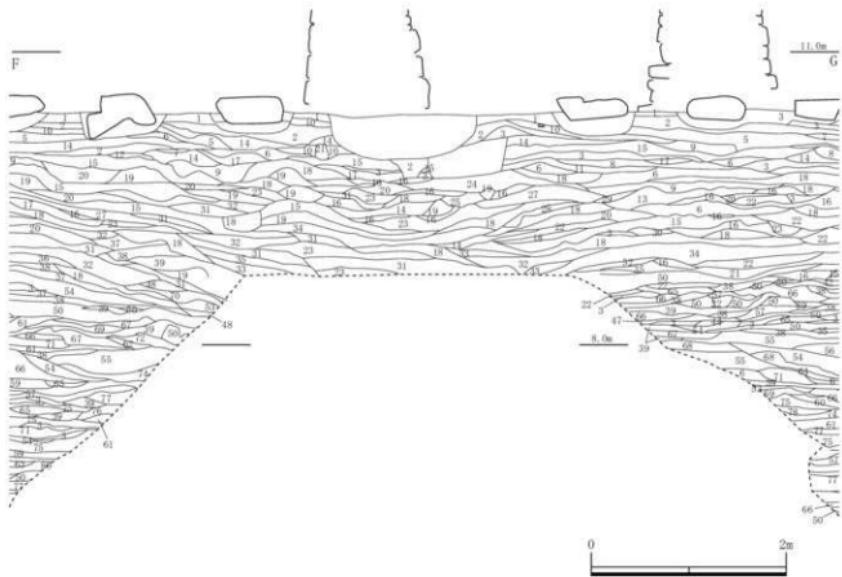
第5-4図 天守台東西断面拡大図① (1/50)



第5-5図 天守台東西断面拡大図② (1/50)



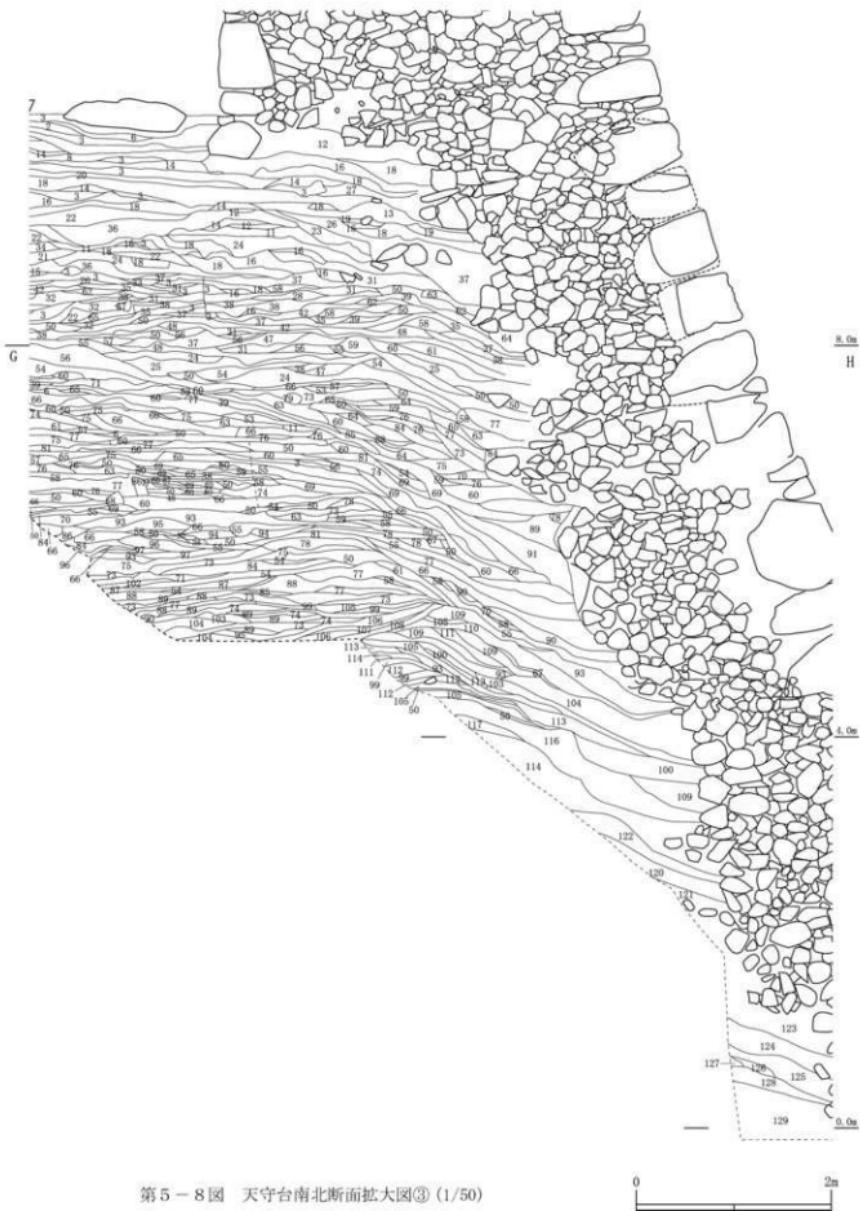
第5-6図 天守台南北断面拡大図① (1/50)



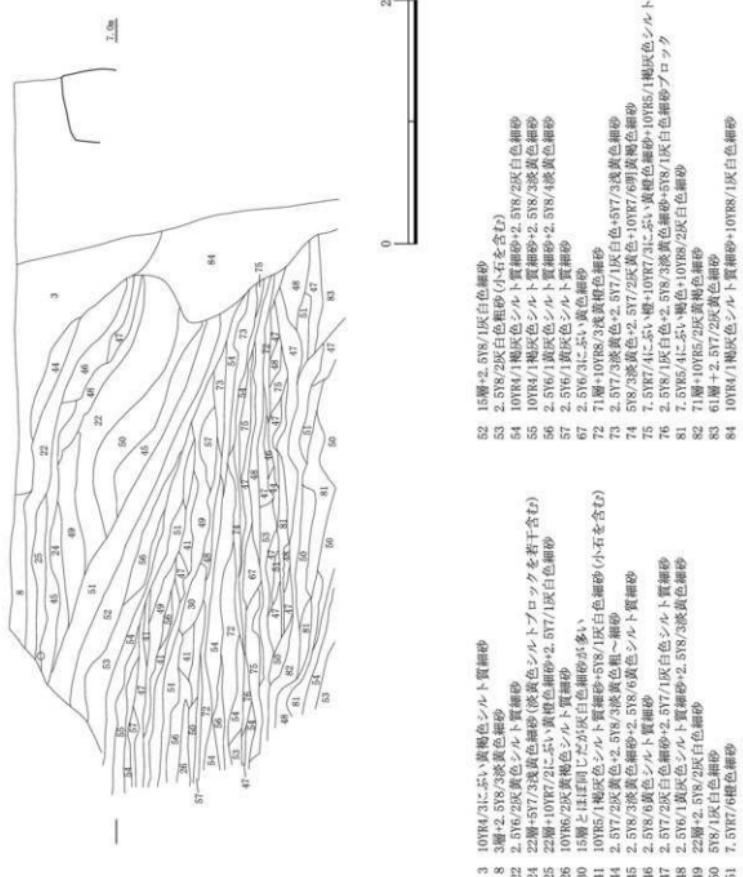
第5-7図 天守台南北断面拡大図② (1/50)

斜角は約62度であり、天端から3石は傾斜がやや急になる。天守台の構造は石垣の築石、栗石、盛土の3部分から成り立つ。石垣の概要や石積みの技法と特徴に関しては第2章と第3章において記述しているので、本項では断面調査の成果のみ報告する。天守台の築石は根石を含めて22段を数え、力学的に崩落を防止するために築石の尻側は面側より低くなるように設置されている。築石の裏側には拳大～人頭大の様々な大きさの石材を詰めて栗石としているが、最上段の栗石は玉藻廟建築に際して大きな改変を受けていた。石垣の1段目～5段目間の栗石は、天守台石垣と天守地下1階を構成する石垣であるL～R面に挟まれる部分、換言すれば天守地下1階より上の部分に充填されている。石垣の1段目～5段目間は栗石のみであり、盛土は見られない。ただし、東西トレンチのD面では盛土がO面に接する位置で4段目以下には盛土が検出された。石垣5段目以下の栗石は築石の後ろに幅0.60～2.00mの範囲で充填されている。栗石と盛土の境は断面で見る限り、一直線状ではなく、不規則的に凹凸している。1～20段目の栗石には石材の大きさや施工工程などに規則性は見出せないが、石材に大きさに関しては部分的に僅かな違いがある。すなわち、標高2m以下にあたる18段目より下の栗石は小振りな石材の割合が上段の栗石より多くなっている。上段の栗石においても大振りの石材が集中する部分と小振りの石材が混在する部分があるが、そこに明確な規則性は認められなかった。

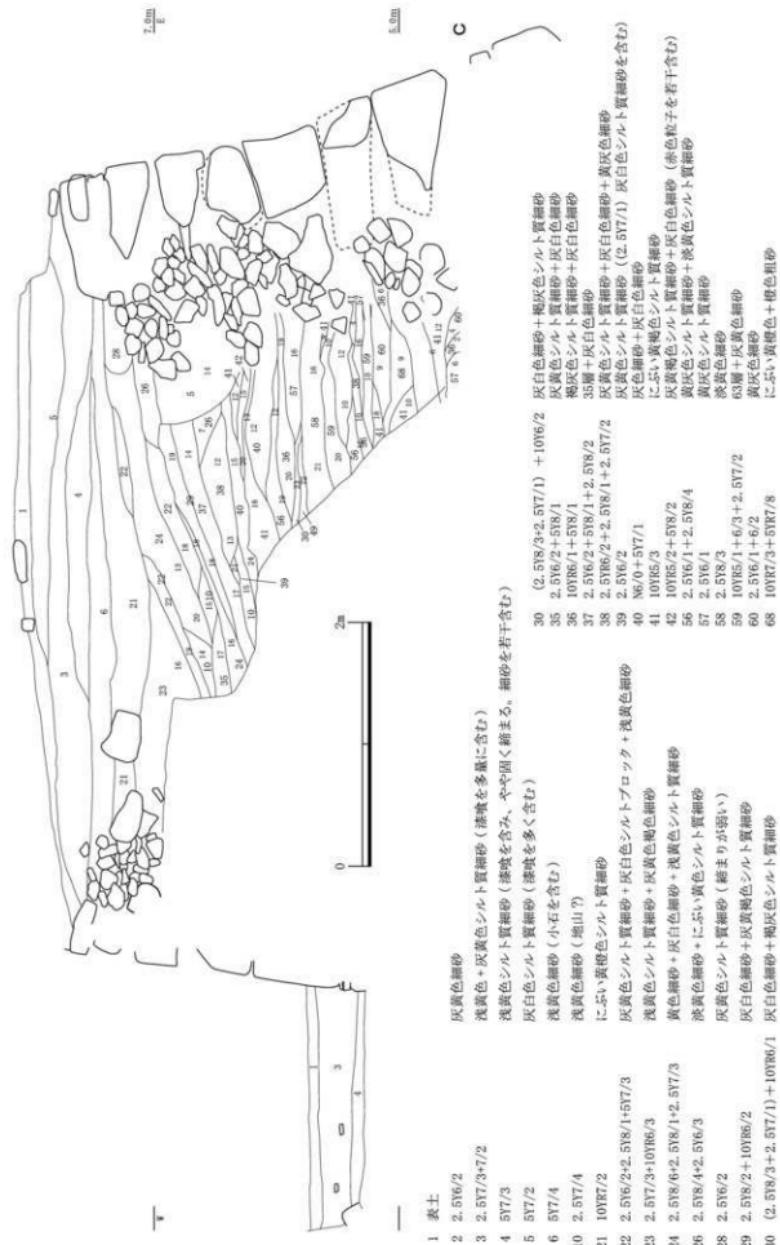
天守台内部の大部分を占める盛土は、天守台の最下位付近の標高0.40～0.90mで確認する

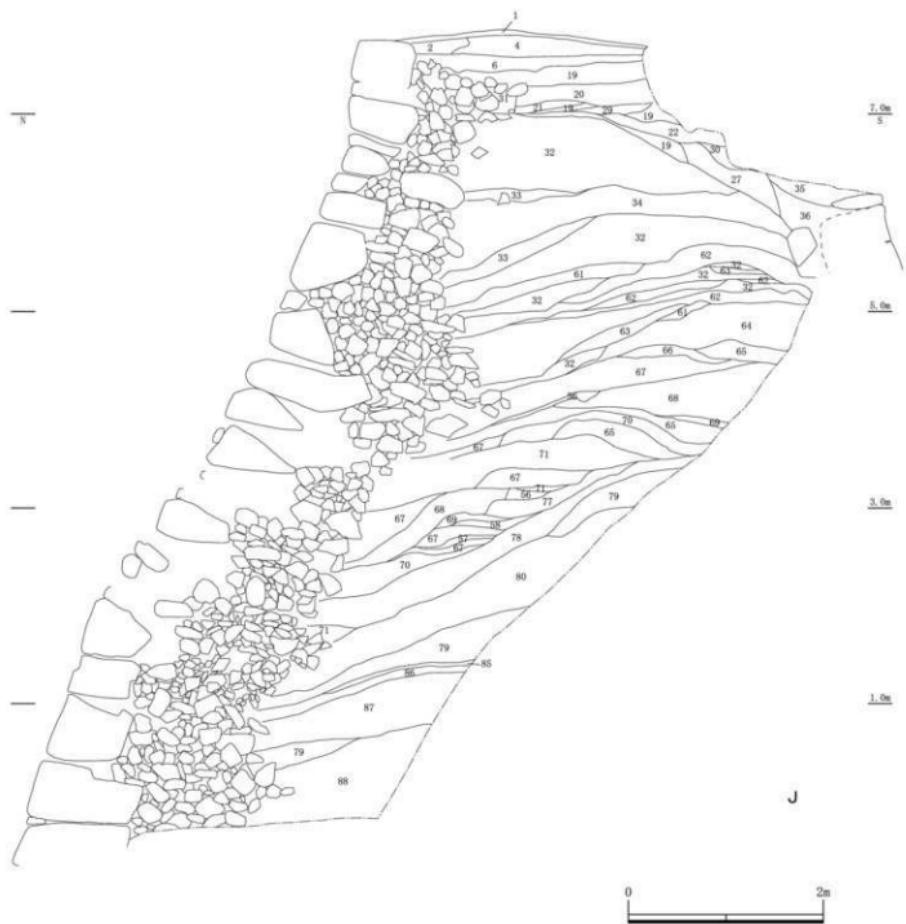


第5-8図 天守台南北断面拡大図③ (1/50)



第5—9図 天守台前面断面F付近断面図 (1/40)





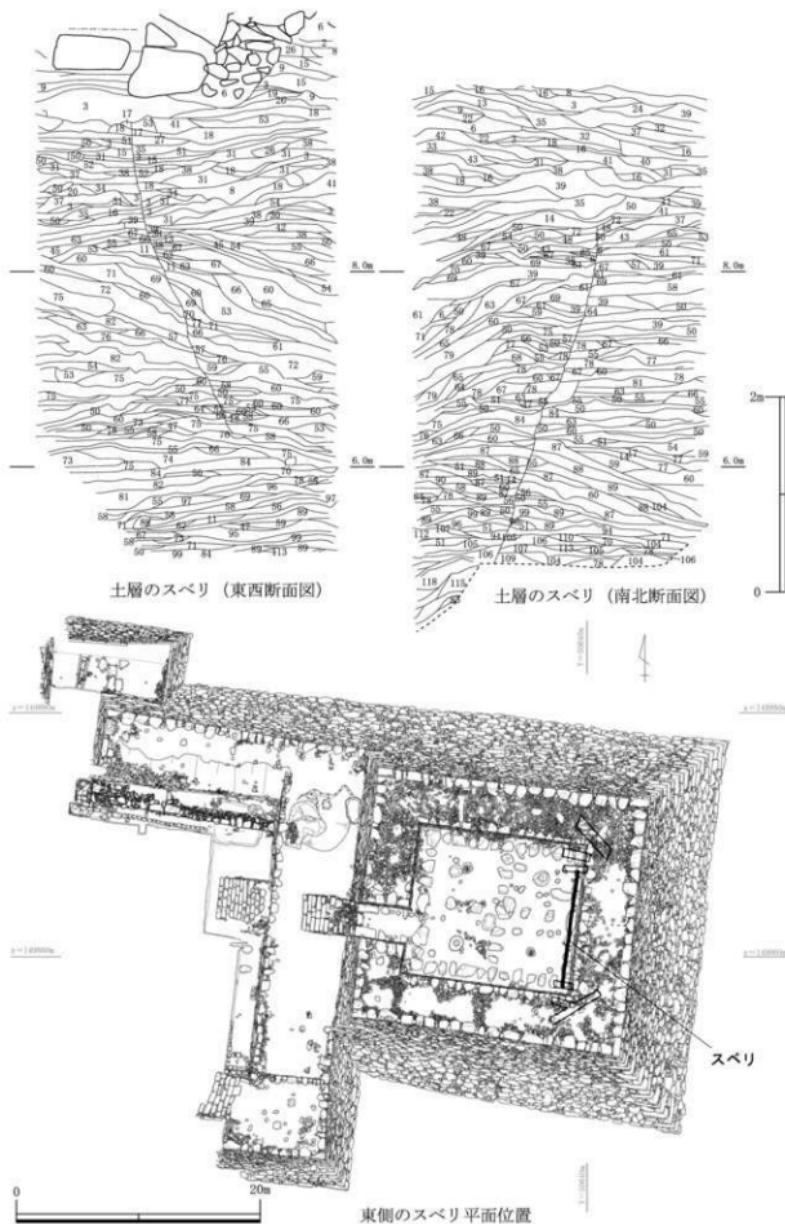
第5－11図 中川櫓台断面J断面図(1/50)

地盤層から天守地下1階の底面まで積上げられた土であり、何層もの異なる土が薄い層をなしており、一見すると版築状に積上げられたように見えるが、堅く縮まった土は全く検出されておらず<sup>a</sup>、土層断面図を作成する際に実施する山中式土壤硬度計による硬度測定数値も低い値を示した。このことから、版築等の作業は行われておらず<sup>a</sup>、盛土は土を積上げただけであると考えられる。これは第5章第4節第3項の分析結果とも合致する。

盛土の断面観察において特筆すべき点が2点ある。まず天守台の築造工程がある程度推定できたこと、もう1点は土層の縦方向のスペリを検出したことである。

ここにおいて1層ごとの土層について述べることは無意味なことであり、断面を大局的に概観することにより盛土の積上げの工程や工程方法を推定することが重要であると考える。東西方向の土層断面（第5-2図）を見ると、天守台部分は、薄い層が重なる土層は西方から東方に向かって15度前後の緩やかな傾斜をもって上がっており、D面の栗石の約2.00m手前から栗石に向かって下がる状況を示している。また、天守台前面の土層断面も西側から東側に向かって緩やかな傾斜をもって上がっていている。南北方向の土層断面（第5-3図）を見ると、天守台の中央部では非常に薄い土層が何層も重なり合い、全体としてはほぼ水平な層序であるが、C面とE面の栗石付近は東西方向のトレーナーと同様に約2.00m手前から栗石に向かって下がっている。さらに、掘削断面の観察によると中央を境に南と北に高まりが見られた。土層の厚さに関しては天守台の中央部と栗石付近の周縁部で若干異なる様相を呈する。中央部では厚さ2~20cmを測る非常に薄い土層であるが、周縁部では5~40cmを測る土層であり、総じて周縁部の盛土は厚くなっている。この様な断面観察を基に天守台の築造工程を推定すると次のようになる。まず、盛土に使用される土砂は西側の本丸から運び込まれて、南北2つの施工単位である程度の高さまで積上げられる。この時点では栗石の手前約2.00m以内には土砂を積上げない。その次に積上げられた盛土より低い位置の築石を設置し、栗石を幅2.00m以内の範囲に充填する。そして土砂を栗石と盛土との間に流し入れるという工程が考えられる。この工程を繰り返し実施することにより天守台が築造された。

土層のスペリは天守台に設定する南北方向と東西方向のトレーナーで検出された（第5-12図）。南北方向の断面では天守地下1階を構築する石垣N面の直下約1.55mの位置とP面の直下約1.20mの位置においてスペリの上端が検出された。前者を北側のスペリ、後者を南側のスペリと仮称する。北側のスペリの上端は標高8.44mで確認され、C面石垣との間隔は約5.20mである。スペリは標高5.00mまで確認され、石垣の傾斜とほぼ同じ約70度の角度で傾斜している。このスペリは北側の土層が最大14cm下方へズレている。南側のスペリは北側と比べるとやや不明瞭であり、上端は標高8.67mで確認できたが、約0.40m下がった所で一旦スペリが消え、標高7.00m付近から再び確認できた。スペリの下端は標高6.30mであり、E面石垣との間隔は約5.00mである。スペリの傾斜は約75度であり、南側の土層が最大10cm下方へズレている。東西方向の断面ではスペリの上端が天守地下1階を構築する石垣O面の直下約0.25mの位置に検出でき、東側のスペリと仮称する。東側のスペリは北側と同様に明確なズレが見られ、上端は標



第5-12図 土層のスベリ (東西・南北断面図)

高9.50mで確認され、D面石垣との間隔は約5.60mである。スペリの下端は標高6.50mまで確認され、石垣の傾斜とほぼ同じ約70度の角度で傾斜している。このスペリは東側の土層が最大14cm下方へズレている。東側のスペリに関しては上端を検出した時点でスペリの面的な広がりを確認する目的で南側と北側に6本のトレンチを掘削した。検出したスペリの全長は東西方向のトレンチから北へ約4.20m、南に約6.20mを測り、南端ではほぼ直角に曲がっていた。北側で掘削した3本のトレンチでは北側の2本のトレンチの断面に土層のズレを検出できなかつたので、スペリの北端はそのまま北方に延びるのではなく西方に曲がると考えられるが面的には確認できていない。また、南側の3本のトレンチのうち南側の2本の断面には土層のズレを検出できないので、スペリは南側へ延びない。すなわちスペリの平面は南北方向に直線的に延び、南端で西側へ屈曲している。前述するように天守台の南北方向の断面において北側と南側にスペリをやや下がった位置で確認している。天守台の西側に調査が及んでいないので確実なことは言えないが、スペリは天守地下1階を構築する石垣にほぼ沿うように「コ」の字形に延びると判断できる。このスペリの要因は大地震であると考えられ、該当する地震として、宝永4年（1707）に発生した宝永南海地震、嘉永7年（1854）に発生した安政南海地震、昭和21年（1946）に発生した昭和南海地震の3つが挙げられるが、現時点ではどの地震であるかを特定することはできない。

天守台前面の石垣であるF面の東西方向の断面C（第5-10図）では、築石・栗石・盛土という構造は天守台と同様であるが、天守台と比較すると栗石の幅が非常に狭いことがわかる。盛土は、最上段の築石より上はほぼ均一な厚さの土が水平な層序をなしているが、それから下は天守台の盛土と同じで非常に薄い土層が重なり合い、西側から東側に向かって緩やかな角度で上がっている。このことから天守台と同様に盛土の土砂は本丸方向から運び込まれたと考えられる。

中川櫓台の石垣であるC面の南北方向の断面J（第5-11図）では、築石・栗石・盛土という構造は天守台と同様である。盛土のうち、最上段の築石より上はほぼ均一な厚さの土が水平な堆積をなしている。それから下は天守台の盛土と同じで多数の土層が重なり合っているが、天守台の盛土に比べると厚い土層が多く、南側から北側に向かって緩やかな角度で上がって、栗石付近では緩やかに下がっている。このことから天守台と同様に盛土の土砂は本丸方向から運び込まれ、同様な工程で中川櫓台が築造されたと考えられる。

### 第3項 石垣解体に伴う出土遺物

#### 出土遺物

天守台・天守台前面・中川櫓台・本丸虎口の石垣解体に伴い多量の遺物が出土したが、報告する遺物は整理作業で残りが良いもの、特徴的なものを抽出したものであり、遺物の組成比を正確に反映したものではなく、特に土器に関してはその傾向が強い。石造物は出土した大部分を報告する。遺物の取り上げは、解体する石垣の段数ごとに行ったが、報告書では以下のように5つのグループに分けて報告する。なお、解体の段数は第4-1～5図を参照いただきたい。

- ① 天守台1・2段目、中川櫓台・天守台前面10・11段目、虎口17段目出土の遺物
- ② 天守地下1階の床面と同レベルまでの天守台3・4段目出土の遺物
- ③ 石垣の5～20段数を機械的に上中下に分ける。
  - ③-1 天守台5～9段目出土の遺物
  - ③-2 天守台10～15段目、天守台前面・中川櫓台12～15段目出土の遺物
  - ③-3 天守台・天守台前面・中川櫓台16～20段目、虎口18～20段目出土の遺物
- ④ 天守台・天守台前面・中川櫓台・虎口21・22段目出土の遺物
- ⑤ 石垣解体に伴う遺物であるが、出土位置が不明のものや栗石の仮置き場で見つかった遺物
  - ①は各所の天端にあたる段で、後世の改変、搅乱がおよんだグループとして抽出した。②は天守台の上部で大きく搅乱がおよんでいないグループである。③は石垣中位にあたるグループ、④は石垣の最下位にあたるグループで、③・④も大きく改変や搅乱の及んでいないものとして抽出した。⑤は層位不明のグループである。

さらに、分類した遺物は出土する位置により間詰め内出土、栗石内出土、盛土内出土、出土層不明の順序で記述する。この区分は、間詰め内出土のものは石垣表面への差込みなど、層的に搅乱されていても後世の混入が想定できる出土位置と、栗石内・盛土内は混入が想定しがたい出土位置とを弁別するために設定した。なお、挿図中の遺物番号の後にある記号は出土地点を表すものであり、○は天守台前面出土、△は中川櫓台出土、□は虎口出土、記号なしは天守台出土である。

#### 土器（第5-13～5-27図）

- 1～10は天守台1・2段目、中川櫓台・天守台前面10・11段目、虎口17段目出土（グループ①）の土器である。1は間詰め、2～5は栗石、6～9は盛土より出土し、10は出土層不明である。  
1は瀬戸美濃系磁器碗であり、疊付を除く全面が施釉され、内外面に染付がある。
- 2は漳州窯産磁器皿で、疊付を除く全面が施釉され、外面に圓線、内面に圓線と絵付がある。高台内に放射線状のカンナケズリ痕が認められる。3は肥前系磁器碗で、疊付を除く全面が施釉され、外面と見込みに染付がある。4は京信楽系陶器碗で、内外面に直線的な刷毛目が施される。5は須恵器甕で、口縁部は短く外側に折れる。体部外面は指頭圧と平行するタタキが施される。
- 6は肥前系磁器碗で、見込みに蛇の目釉剥ぎと砂目がある。外面に○に斜線と圓線、見込み

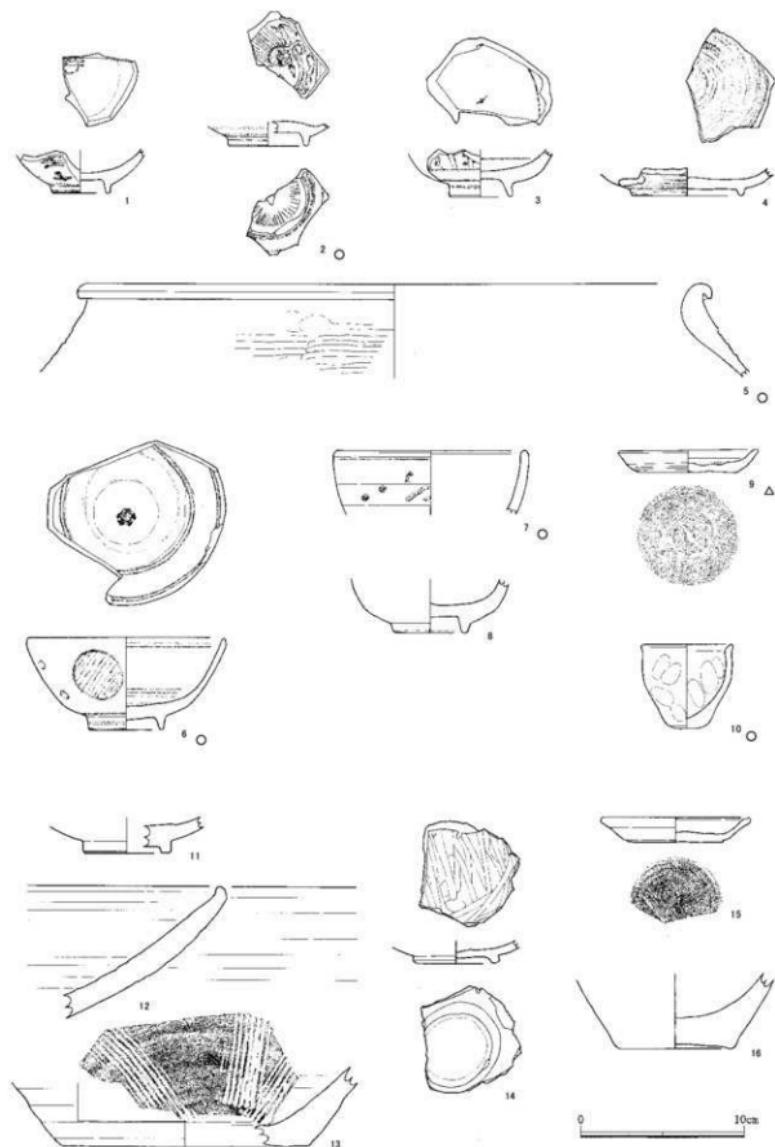
にコンニャク印版による5弁花と圈線がある。18世紀中葉と考えられる。7は肥前系陶器碗で、陶胎染付である。8は肥前系陶器碗である。9は土師質土器小皿で、底部は回転ヘラ切り後に板目である。

10は弥生土器鉢で、内外面に指頭圧が残る。

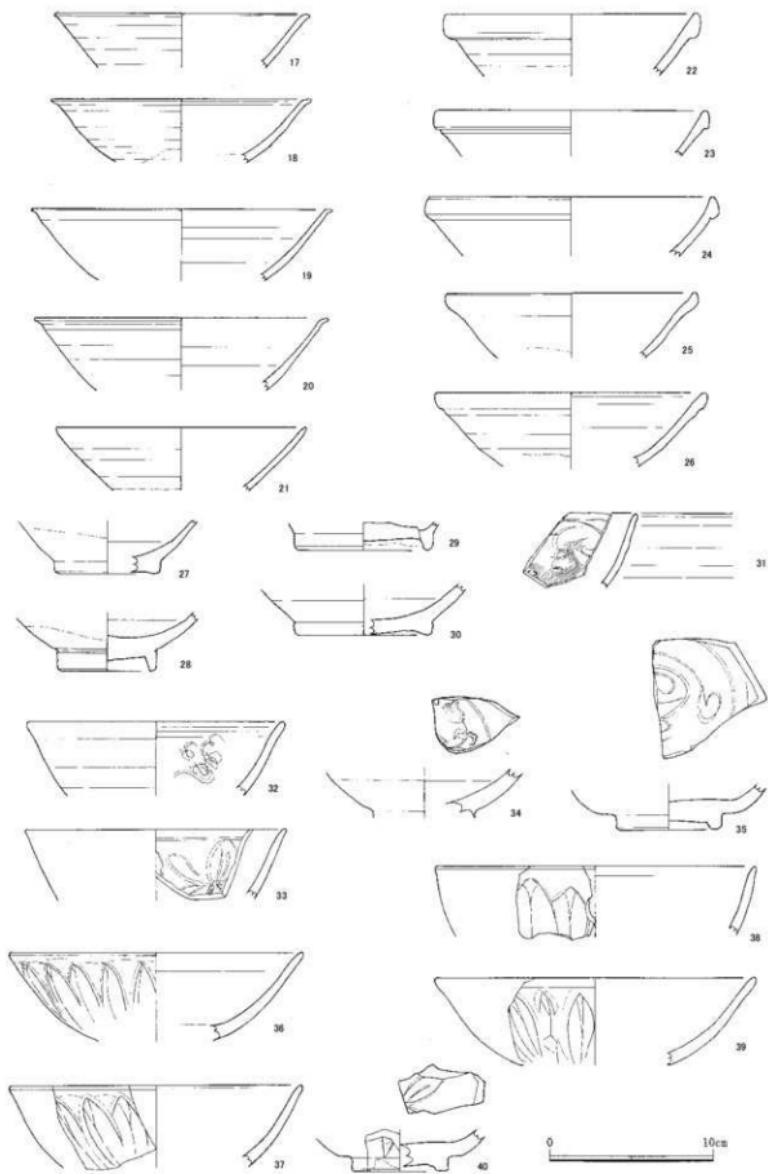
11～186は天守台5～9段目（グループ③-1）出土の土器である。出土位置別に分けると、11～16は栗石より、17～164は盛土より出土し、165～186は出土位置不明である。

11は削出高台の青磁碗で、底面と疊付は無釉である。12は備前焼陶器浅鉢で、口縁部は短く直立する。外面に重ね焼痕と植物の纖維質のような付着物が残る。13は陶器擂鉢で、外面はナデが施され、底部は未調整である。内面に鉗目が放射状に見られる。14は瓦器椀で、高台は楕円形である。外面はナデ、内面はヘラミガキが施される。15は土師質土器小皿で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。16は弥生土器の底部で、外面は摩滅する。

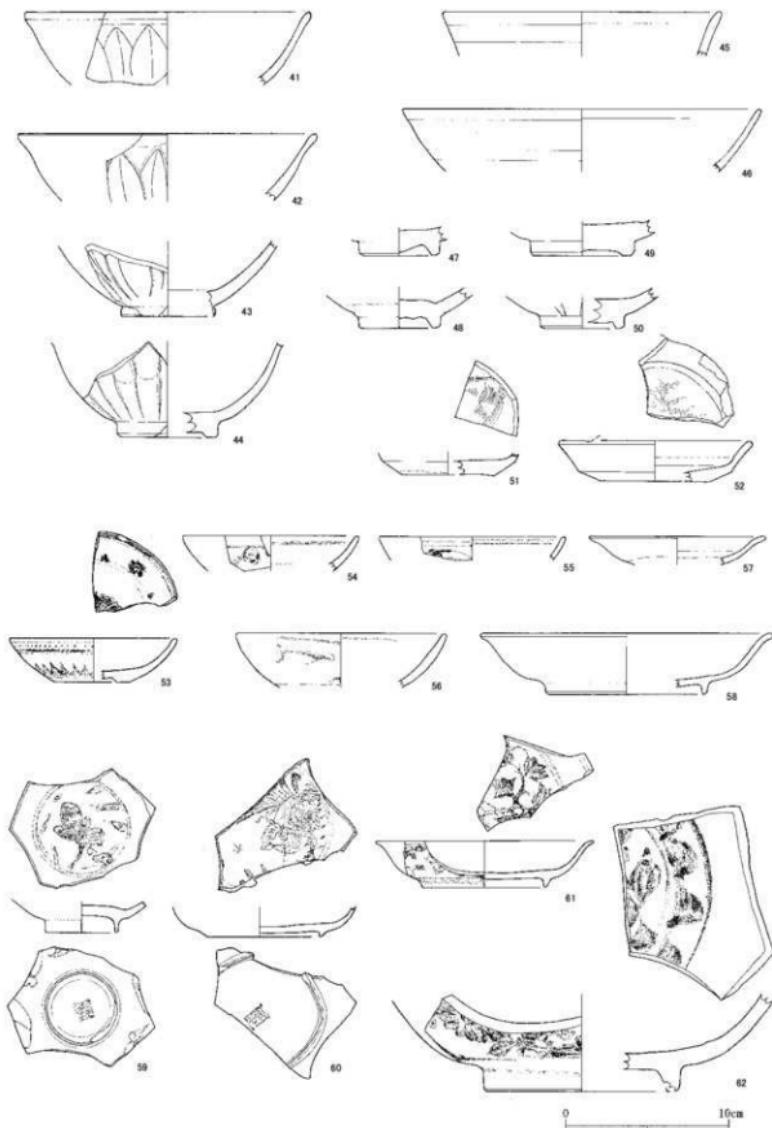
17～30は白磁碗である。17～20は口縁部が端反りする。21は直線的な体部からそのまま口縁部に至る。22～26は直線的な体部から口縁部に至り、口縁端部は玉縁であり、25・26は口縁端部の拡張が僅かである。28は高い高台を持ち、27・29・30は削出高台で、底面にケズリが残る。31～50は青磁碗である。31は内面に片彫りで雲文状の文様を施し、空白部に櫛目を埋める。32は口縁部が僅かに外反し、内面に片彫飛雲文を有する。33は直線的な体部で、内面に片彫蓮花纹を有する。34は内面に片彫りを有する。35は見込みに片彫りを有する。36～44は体部外面に鎬蓮弁が施され、40は見込みに片彫りの花弁文があり、44は不明瞭であるが二重の蓮弁であり高句麗系の可能性がある。45・46は内外面とも無文である。47～50は削出高台である。48の見込みにジグザグ状の櫛点描文を有する。51・52は青磁皿で、見込みに短い櫛目に入る。53～61は輸入磁器皿であり、53～56・59～62は青花である。53は基筒底の皿で、外面口縁部に簡素化した波濤文帯、体部に芭蕉葉文、見込みに捺花が描かれる。小野正敏氏の分類の皿C群Iである。54は体部下半を欠損し、外面に草花文と圈線、内面に圈線が描かれる。55は外面に唐草文と圈線、内面に圈線が描かれる。青花と胎土から景德鎮窯と考えられる。56は外面に簡素化された唐草文が描かれる。57・58は口縁部が端反りし、58の高台はヘラケズリにより斜めに面取りされる。59は高い高台で饅頭心の底部である。体部外面に陰刻が認められ、見込みに圈線と草花文が描かれ、高台内に銘款が描かれる。小野分類碗E群である。60は低い高台で、高台内に放射線状のカンナケズリ痕が認められる。見込みに獸文と草文が描かれ、高台内には「福」の銘款が描かれる。景德鎮窯と考えられる。61は口縁部が端反りし、高台は丸い。見込みに牡丹が描かれる。景德鎮窯と考えられる。62は輸入磁器鉢であり、体部外面と見込みに草花文が描かれる。63～68は陶器碗である。63・64は天目で、63は口縁部が外反気味に直立する。65は高台と高台内にケズリが施され、66は高台内に砂粒が付着する。67は瀬戸美濃系で、底部にトチンの一部が付着する。68は内外面に黒褐色の圈線に白化粧土を塗布する。69～71は陶器皿であり、69は削出高台であり、70は瀬戸美濃系で、口縁部が少し外反し、削出高台である。71は瀬戸美濃系で、口縁部はやや強く屈折し折縁である。72・73は陶器鉢であり、72は備前焼で、



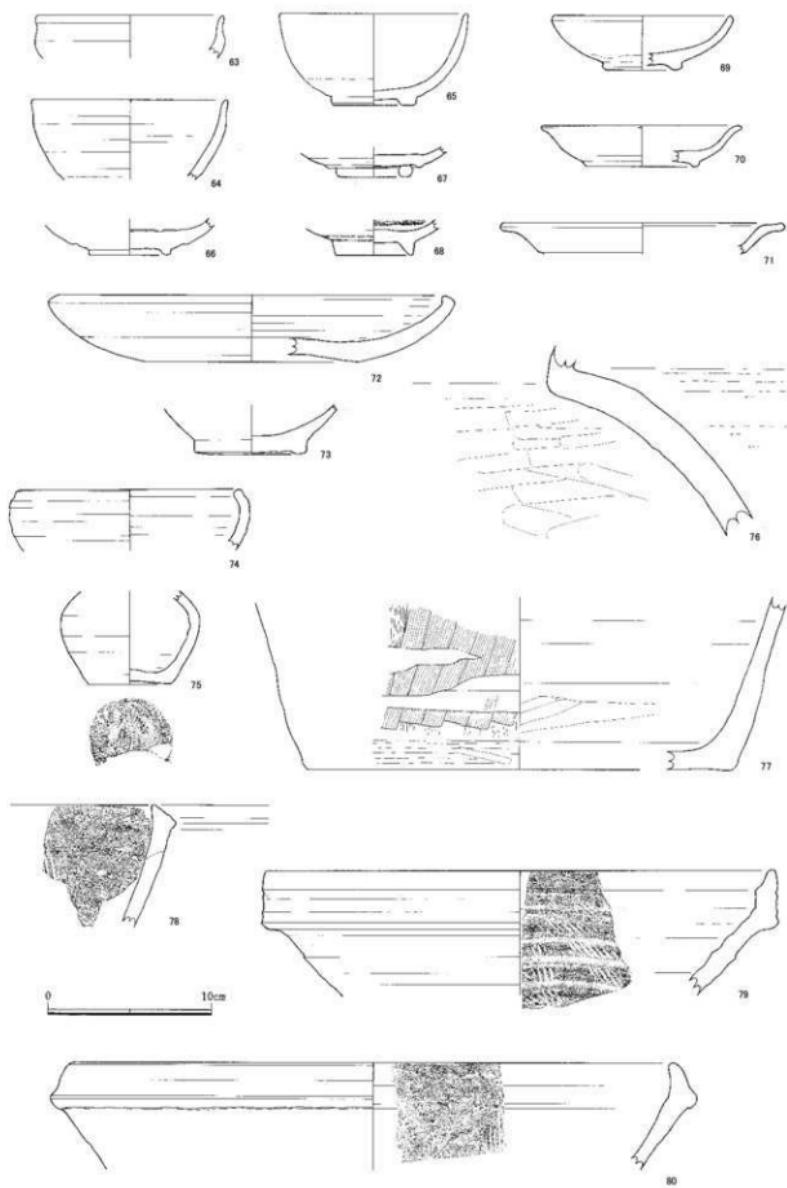
第5-13図 石垣解体に伴う出土土器実測図(1)



第5-14図 石垣解体に伴う出土土器実測図（2）

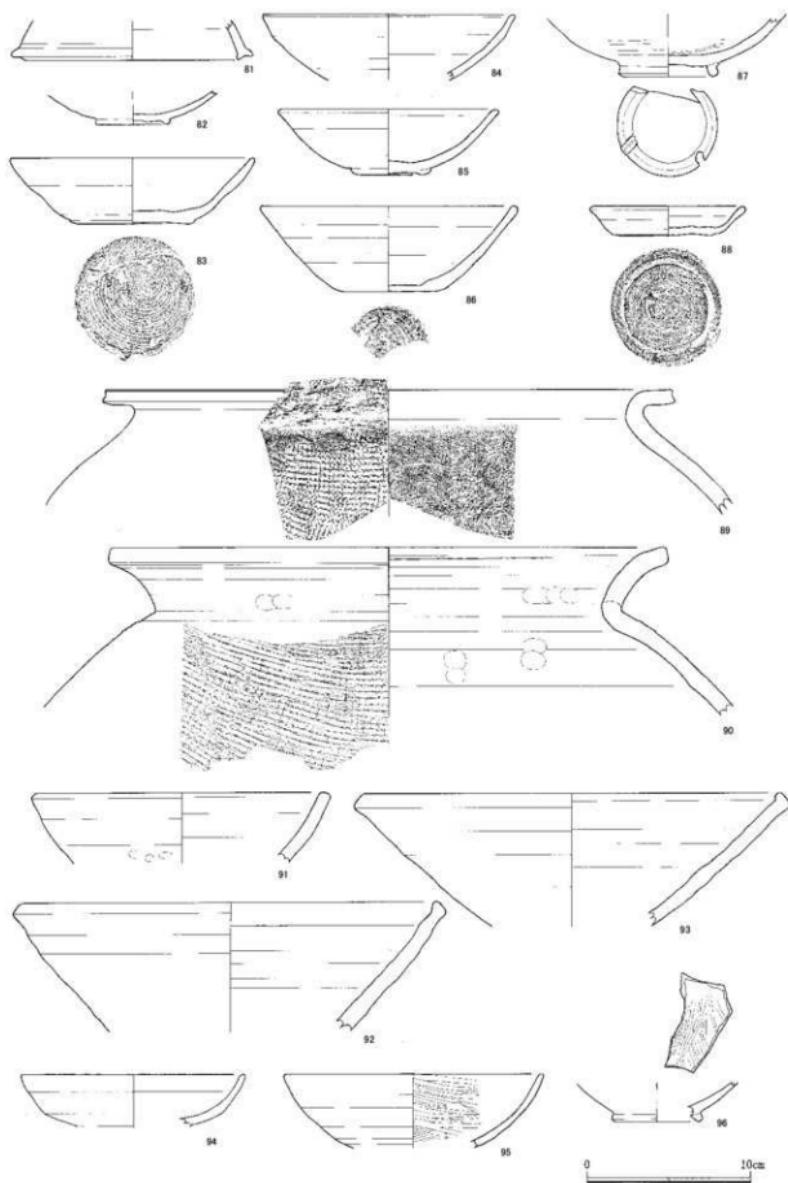


第5-15図 石垣解体に伴う出土土器実測図(3)

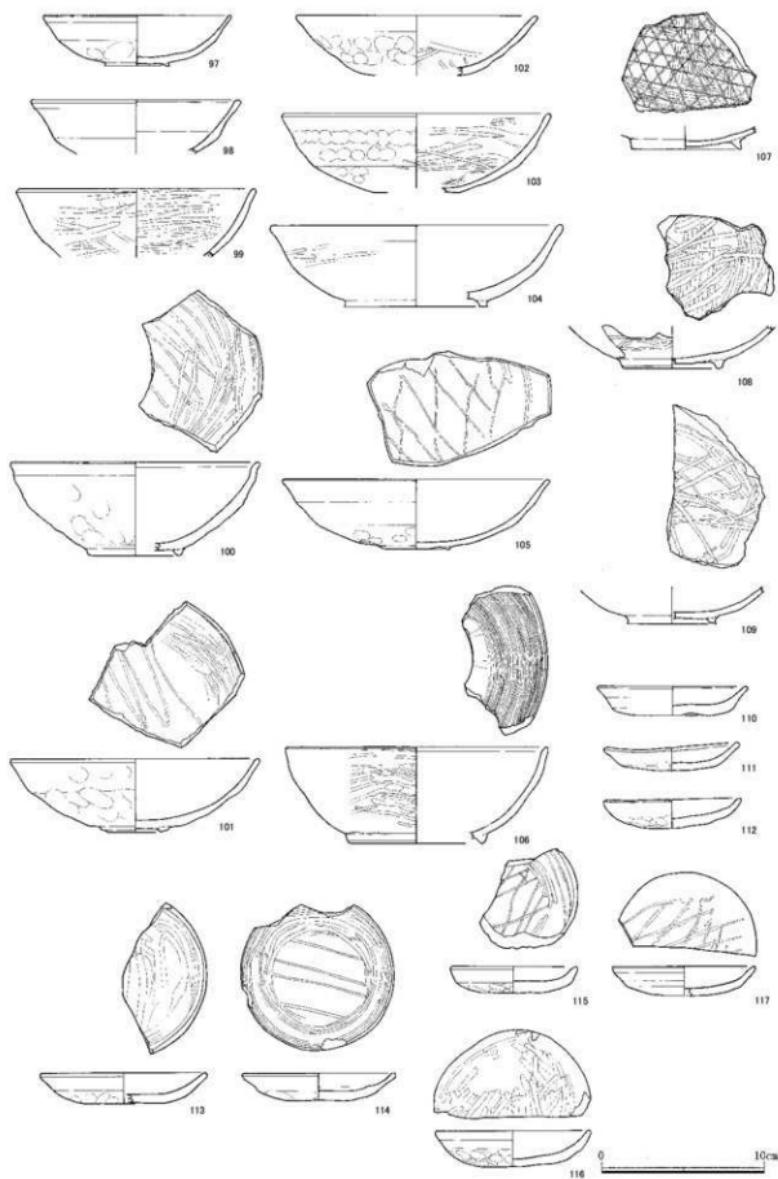


第5-16図 石垣解体に伴う出土土器実測図(4)

口縁端部は短く直立し、底部は上げ底である。74・75は陶器壺であり、74の口縁部は外面に稜を持ち内傾する。75は備前焼で、底部は回転糸切り、内面に鉄分を含む塗料か漆が付着する。76・77は陶器甕で、76は備前焼であり、外面に横方向の板ナデ、内面に横方向のナデが施される。77は甕の底部であり、外面に縦方向のハケの後に指ナデ・ナデ、底部にハケが施される。78～80は陶器擂鉢である。78は口縁短部が平坦面となり、79・80は口縁部が上下に拡張し浅い凹線が巡る。81は須恵質土器杯蓋で、短いかえりが付き、口縁部内面に黒斑が付く。82～87は須恵質土器碗である。82は低い高台が付き、体部外表面はナデ、内面と底面は板ナデが施される。83は内外面に回転ナデが施され、底部の切り離しは回転糸切りである。84は内外面ナデ、口縁部に重ね焼き痕を残す。85は低い貼付高台であり、口縁部は回転ナデ、体部内外面はナデが施され、口縁部に重ね焼きの黒斑がある。86は口径 15.8cm、底径 5.2cm を測り、内外面は回転ナデ、底部の切り離しは回転糸切りである。口縁部に重ね焼き痕を残す。87は断面が丸く高い貼付高台に押圧が 1ヶ所あり、体部外表面は回転ナデの後にヘラミガキ、内面はヘラミガキ・ナデが施される。体部に重ね焼きの黒斑がある。88は須恵器皿で、内外面は回転ナデによる僅かな凹凸があり、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。89・90は須恵質土器甕であり、89は口縁部が強く屈曲し水平に延び、口縁端部は僅かに凹む。体部外表面は格子状タタキ、内面はナデ・ヘラナデ・青海波状タタキが施される。90は口縁部がやや鋭角に屈曲し、口縁端部は平坦になる。体部外表面は格子状タタキ、内面は指頭圧・粗いナデが施される。91～93は須恵質土器こね鉢であり、92・93は直線的な体部からそのまま口縁部に到り、口縁端部は上方に少し拡張する。口縁部は回転ナデ、体部はナデが施される。94～96は黒色土器A類碗である。94は高台以下を欠損し、内外面はナデ、内面に重ね焼き痕が残る。95は半球状の体部をなし、外表面は板ナデ、内面は丁寧なヘラミガキが施される。96は断面方形の貼付高台であり、外表面は回転ヘラケズリ、内面は丁寧なヘラミガキが施される。97～109は瓦器碗である。97は貼付高台の作りが雑で、平面が橢円形を呈し非常に扁平である。体部外表面下半の指押さえ以外はナデである。98は体部外表面に僅かな凹凸があり、内外面はナデが施される。99は半球形の体部であり、外表面は指押さえ後にヘラミガキ、内面は丁寧なヘラミガキが施される。100は半球状の体部に僅かに外反する口縁部が付く。貼付高台は直径が小さい。外表面は指押さえ・ナデ、内面はヘラミガキと斜め方向の暗文が施される。101は直径が小さく扁平な貼付高台であり、外表面は指押さえ・ナデ、内面はヘラミガキ・暗文が施される。102は体部外表面に指押さえ、内面にナデの後に暗文が施される。燐しによる炭素が消失したと考えられる。103は体部外表面に指押さえによる僅かな凹凸があり、内面はヘラミガキが施される。104は断面方形の貼付高台を有し、器厚はやや厚い。内外面はヘラミガキが施される。105は直径 4.0cm で非常に低い貼付高台を有し、外表面は指押さえ・ナデ、内面にナデ・ヘラミガキ・斜格子の暗文が施される。106は半球状の体部に丸い高台が付き、外表面は指押さえ後にヘラミガキ、内面は丁寧なヘラミガキが施される。107は高い高台が付き、内面はヘラミガキ後の細かな斜格子状の暗文が施される。108は断面逆台形の貼付高台で、外表面はヘラミガキ、内面に丁寧なヘラミガキが施される。109は断面逆台形の貼付高台で、外表面はナデ、内面にヘラミガキが施される。

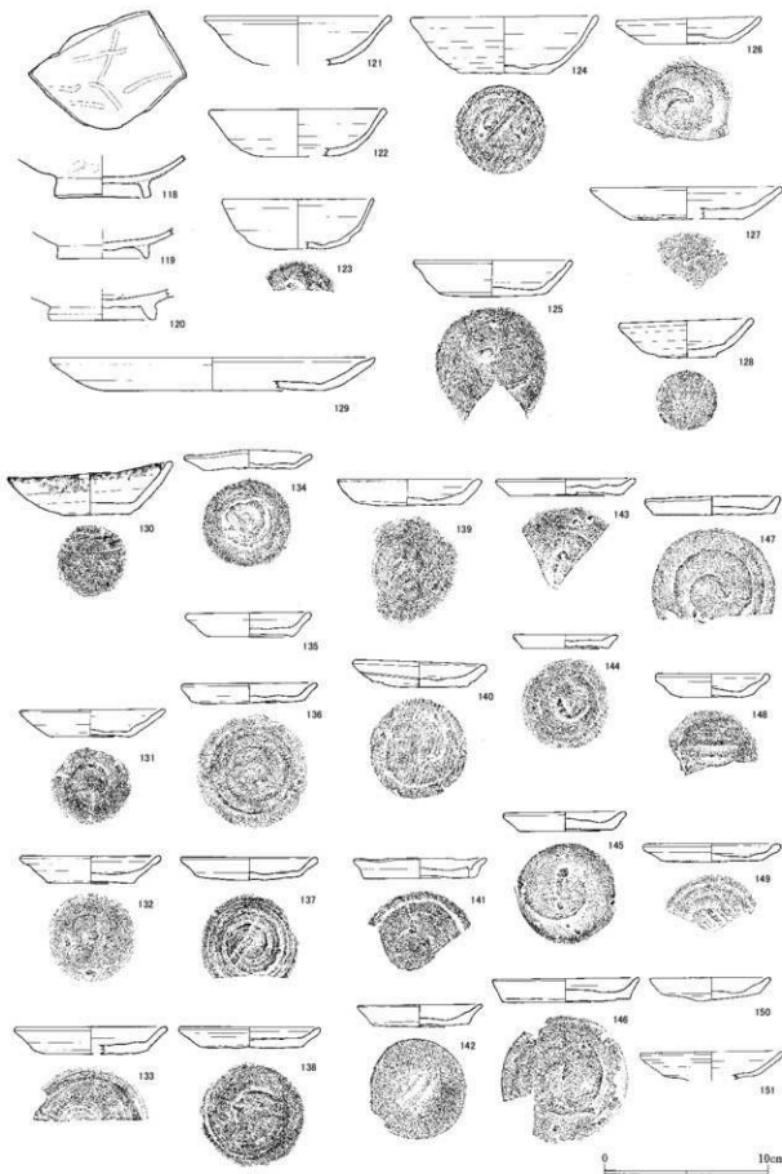


第5-17図 石垣解体に伴う出土土器実測図(5)



第5－18図 石垣解体に伴う出土土器実測図（6）

110～117は瓦器小皿である。110は口縁部の器厚が薄くなり、体部外面下半と底部は指押えが施される。111は歪な器形で、口縁部付近のナデ以外はナデ・指押えが施される。112は僅かに歪な器形で、体部外面下半と底部は指押えが施される。113は口縁端部がやや角張り、体部外面下半と底部は指押え、内面はナデ・ヘラミガキが施される。114は体部から口縁部の器厚が薄く、体部外面下半指押え、内面にヘラミガキと4本の平行する暗文が施される。115は外面に僅かな稜線を有し、体部外面下半と底部は指押え、内面はヘラミガキとやや崩れた斜格子状の暗文が施される。116は体部外面下半と底部に指押え、内面にナデ・ヘラミガキが施される。117は体部外面下半と底部に指押え、内面にナデと斜格子状の暗文が施される。118～120は土師質土器椀で、118は吉備系で、断面方形の高い貼付高台を有し、外面に指押え、内面に丁寧なヘラミガキが施され、内面に重ね焼き痕が残る。119の内面には重ね焼き痕が残り、吉備系である。121～129は土師質土器杯で、内外面に回転ナデによる僅かな凹凸がある。121・122は底部と体部の境が不明瞭で、122の内外面は回転ナデによる僅かな凹凸があり、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。123は器厚が非常に薄く、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。124は口径11.8cm、器高3.5cmを測り、平底の底部は回転ヘラ切り後に板目がある。125の底部は回転ヘラ切り後にナデが施される。126の底部は回転ヘラ切りである。127は平底からほぼ直線的に体部が延び、底部は切り離し後にナデ・板ナデ、その後に布目がある。128の底部は静止糸切り後にナデである。129は口径20.0cm、器高2.0cmを測り、口縁部が僅かに屈曲する。底部の指押え以外が回転ナデである。外面に黒斑、内面に火捺が見られる。130は非常に歪な器形をなし、底部は静止ヘラ切りである。口縁部内外面に煤が付着しており灯明皿として使用されていた。131～151は土師質土器小皿である。底部の切り離し方法は、132～136・139・143・144・147は回転ヘラ切り、131・141・146・148は回転ヘラ切り後にナデ、137・138・140・142・145・149は回転ヘラ切り後に板目である。131・134は少し歪な器形で、140は外面にヘラの先端が当たってできたと考えられる溝が巡り、141は内面に細い溝が巡る。150は歪な器形で、底部は外面に指押え後に板ナデ、内面に指押え、口縁部はナデが施される。外面に煤が付着しており灯明皿とも考えられる。151は器厚が薄く、底面の中心が盛り上がる。152は土師質土器脚部で、内外面に回転ナデによる僅かな凹凸がある。153・154は土師質土器甕である。153は直立する体部から口縁部が鈍角に屈曲し、外面は指押えと縦方向の粗いハケ、口縁部内面は横方向の粗いハケ、体部内面は斜め方向の粗いハケが施される。154はやや短い口縁部で、外面は指押え、口縁部内面はヨコナデ、体部内面はナデが施され、外面に煤が付着する。155は土師質土器鍋で、内傾する体部から口縁部が緩やかに屈曲し、内外面に指押えがある。156～159は土師質土器足釜である。156は口縁部の下にある頸は横方向に延びる。口縁部はヨコナデ、体部外面上半は指押え、下半は格子状タタキが部分的に見える。157は頸が口縁部直下に短く延び、頸に指押え、体部外面はナデ・指押え、内面は指ナデ・ヘラナデが施される。体部に脚部の接合部が僅かに残存する。頸より下に煤が付着する。158は口縁部の下側に付く頸が斜め方向に延び、体部に脚部の接合部が僅かに残存する。頸より下に煤が付着する。体部外面は指押え、内面はナデが施される。159は口径44.8cmを測り、



第5-19図 石垣解体に伴う出土土器実測図(7)

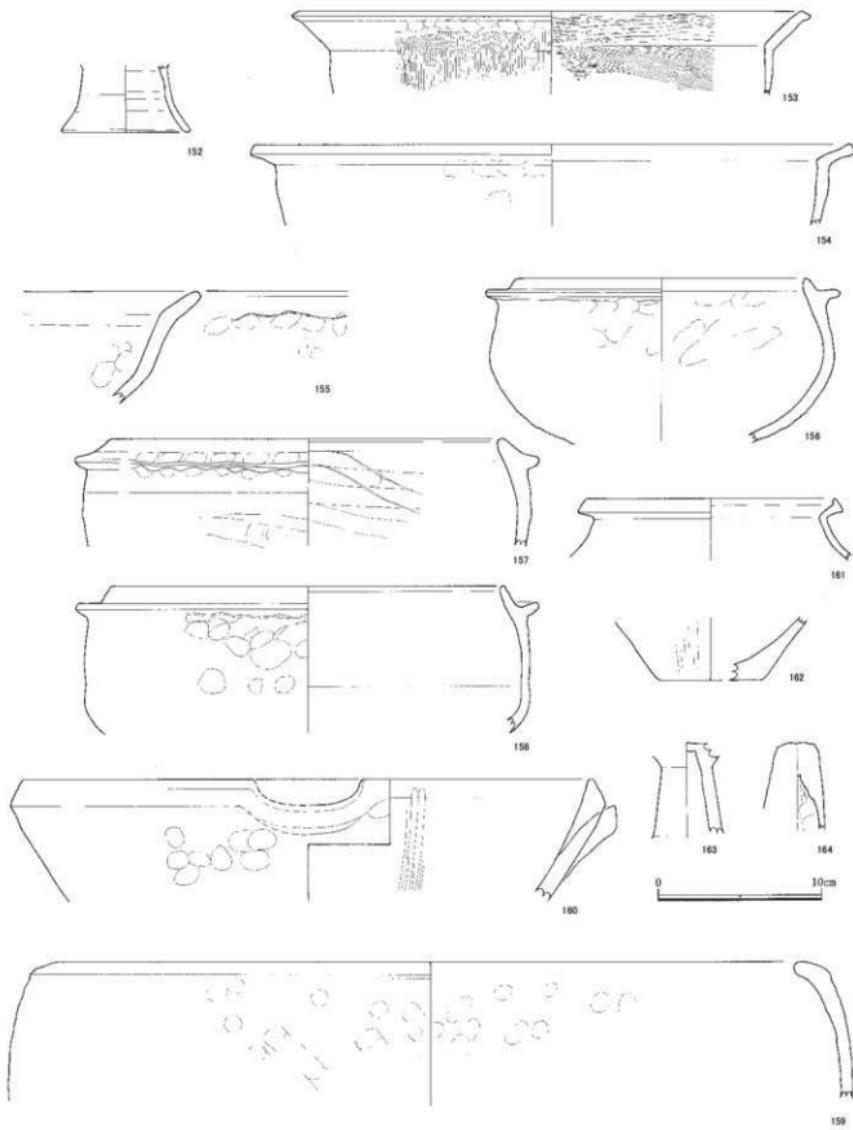
内傾する口縁部は若干拡張する。内外面はナデ・指押えが施される。160は土師質土器擂鉢で、片口を残存する。161・162は弥生土器甕である。161の口縁部は「く」の字状に曲がり、端部が上方に拡張する。口縁部はヨコナデ、体部はナデが施され、胎土に角閃石を含む。162は平底で、体部外面に縦方向のヘラミガキが施され、胎土に角閃石を含む。163・164は弥生土器高杯である。163は内外面にナデが施され、胎土に角閃石を含む。164は外面が摩滅、内面は絞り目・板ナデが施される。

165は玉縁口縁部の白磁碗である。166～168は青磁碗であり、166は逆台形の削出高台である。167は龍泉窯系磁器で、直線的な体部から口縁部に至り、口縁端部は輪花であるが破片のためその数は不明である。体部内面は二叉片刀によって分割しその中に飛雲文を入れる。168は直線的な体部から口縁部に至り、体部外面に蓮弁文を有する。169は輸入磁器皿で、口縁部が僅かに外反する。疊付は無釉で、外面に草花文が描かれる。170は端反りの陶器皿で、口縁部は指で折り曲げて輪花をする。171は陶器鉢で、口縁部は折り返し、内外面に施釉する。172は須恵器椀で、内外面に回転ナデによる凹凸がある。底部は平底で回転糸切りである。173・174は須恵器小皿で、173の底部は回転ヘラ切り、174は底部に回転ヘラ切り後に板目がある。175は須恵質土器鉢である。176は瓦質土器鉢で、直線的な体部から口縁部に至る。177は瓦質土器擂鉢で、直線的な体部から口縁部に至り、口縁端部はやや尖り気味に丸くなる。178～181は瓦器椀である。178は断面逆台形の高台が付き、体部外面は指押え、内面はヘラミガキが施される。179は径が小さく矮小な高台が付き、体部外面はナデ・指押え、内面は回転ナデ・ナデが施される。180は外面に指押え・ヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。181は外面に回転ナデ・指押え、内面にヘラミガキが施される。182は瓦器小皿で、体部外面に僅かな稜を持ち、体部外面と底部は指押え、内面はヘラミガキが施される。183は土師質土器杯で、器高が高い。内外面に回転ナデによる凹凸があり、底部は回転ヘラ切りである。184・185は土師質土器小皿である。184は口径11.8cmを測り、内外面に回転ナデによる凹凸がある。底部は回転ヘラ切りである。185は口径8.6cmであり、底部は回転ヘラ切り後にナデが施される。186は土師質土器羽釜で、外面に菊の印刻がある。

187～247は、天守台10～15段目、天守台前面・中川櫓台12～15段目（グループ③-2）出土の土器である。出土位置別に分けると、187は栗石出土、188～228は盛土出土、229～247は出土位置不明の土器である。

187は土師質土器小皿で、底部は回転ヘラ切りの後に板目がある。

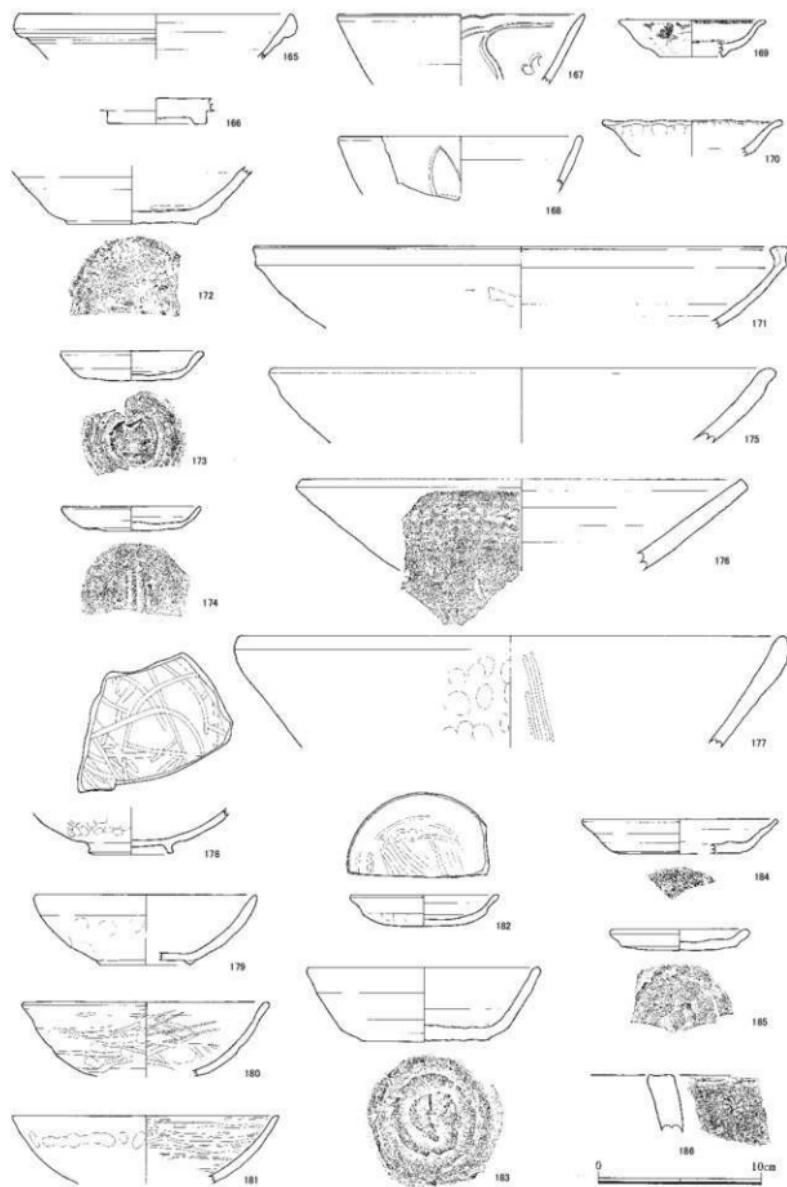
188～190は白磁碗である。188は玉縁口縁であり、内面に貫入が見られる。189は直線的な体部から口縁部に至る直口である。190の高台内はケズリが施され、見込みに蛇の目釉剥ぎがある。191・192は白磁皿で、191は口縁部が短く直線的であり、口縁端部は口禿げである。192は口縁部が外反し、口縁端部は先が2つずつに分かれた5弁の花形に造られる。193～198は青磁碗である。193・194は内面を二叉片刀により分割し、その中に飛雲文を入れる。龍泉窯系である。195は外面に鎧蓮弁文を有する。196は端反り口縁である。197・198は削出高台で、見込みにヘラ描きで草花文を施す。199～201は青磁皿である。199は見込みに櫛点描文を有する。200は



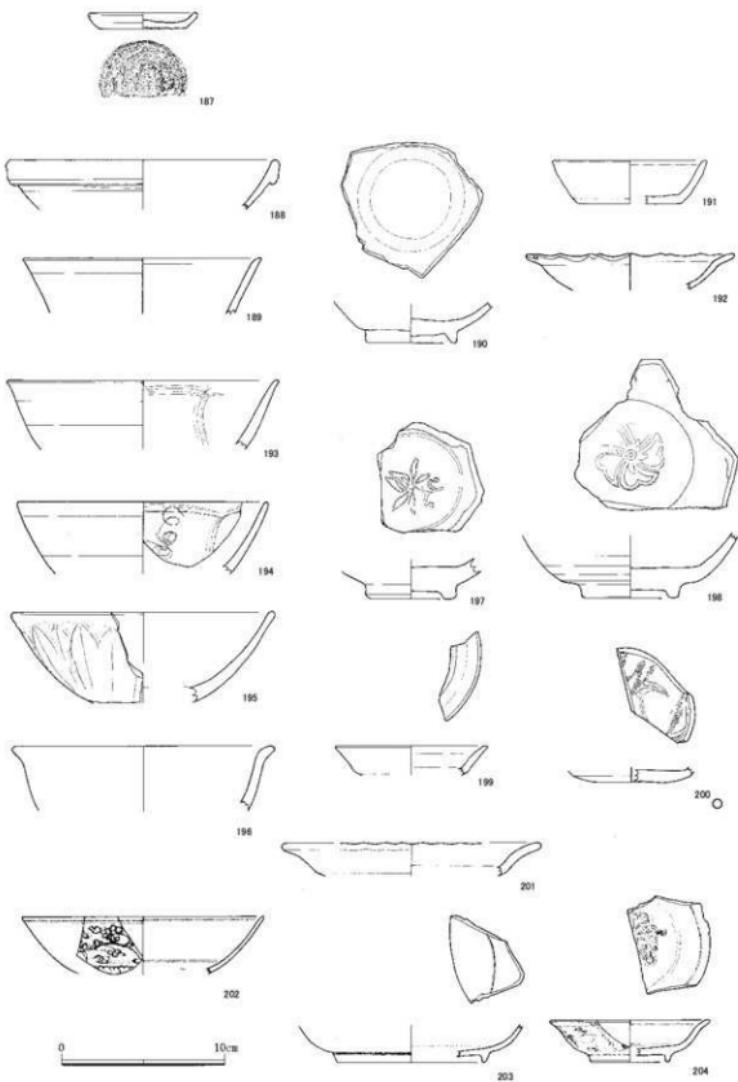
第5-20図 石垣解体に伴う出土土器実測図(8)

やや上げ底気味の底部外面は軸を搔き取り、内面にヘラ状の施文具による文様とジグザグ状の櫛点描文を有する。201は口縁部が少し外反し、口縁端部は輪花である。202は輸入磁器碗で、薄い器厚の碗で、外面に唐草文が描かれる。景德鎮と思われる。203・204は輸入磁器皿で、203は薄い器厚で、内外面に圈線がある。204は口縁部がやや外反し、疊付は無軸である。外面には草花文、見込みには十字花文が描かれる。景德鎮と思われる。205は唐津系陶器碗で、直線的な体部で僅かに外反する口縁部に至る。底部は回転糸切りの後に削って高台とし、疊付と高台内の中央には回転糸切りが残る。体部との境に段を有する。体部外面の下半は無軸である。見込みには胎土目の重ね焼き痕がある。206は陶器鉢で、やや高い貼付高台を有する。外面は回転ナデ、内面はヘラミガキ、底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。207は陶器碗で、削出高台である。208は備前系陶器浅鉢で、口縁部は短く直立し、体部下半と底部はケズリが施される。209は備前系陶器鉢で、直立する体部からそのまま口縁部に至る。体部下半は指ナデが施される。210は備前系陶器甕で、口縁部は直立気味である。肩部内外面は指頭圧が施され、内面に輪積み痕があり、口縁部外面に自然軸がかかる。211は輸入陶器水注あるいは双耳壺であり、口縁部は「く」字形に外反し頸部と体部の境は不明瞭である。外面に3本の細い沈線が巡り、内外面に施釉する。212～214は備前系陶器擂鉢であり、口縁部が上下に拡張し僅かな凹線を巡らす。215は歪な器形の須恵質土器小皿で、底部は回転ヘラ切りの後にナデ・板目が施される。216・217は須恵質土器こね鉢で、直線的な体部からそのまま口縁部に至る。218は須恵質土器壺で、体部は急傾斜で立ち上がる。体部外面は回転ナデの後に指ナデ、底部はケズリが施され、外面に自然軸がかかる。219は瓦器小皿で、外面下半は指押え、内面はヘラミガキが施される。220は土師質土器椀で、貼付高台は断面逆三角形で、内面に重ね焼き痕が残る。221～224は土師質土器小皿である。221は歪な器形で、内面は指ナデ、底部は切り離し後にナデ・板目が施される。222は厚い底部から体部が短く延びる。底部の切り離しは回転ヘラ切りであり、体部外面にヘラ先端による鋭い溝が巡る。223は体部外面に回転ナデ、内面に回転ナデ・指ナデを施し、底部は回転ヘラ切りの後にナデ・板目が施される。224の体部は薄い器厚であり、底部は静止ヘラ切りにより切り離される。225は土師質土器擂鉢である。226は土師質土器甕で、口縁部は直立する体部から緩やかに屈曲し、外面に煤が付着する。体部外面は指押え・ハケ、内面は指ナデが施される。227は土師質土器鍋で、口縁端部は下方に僅かに拡張する。口縁端部と口縁部内面は横方向の粗いハケ、体部内外面は指押えが施される。228は土師質土器甕で、口縁部が僅かに外反し内面に横方向の粗いハケを施す。外面は指押え・斜め方向のハケ、格子目状タタキが施される。

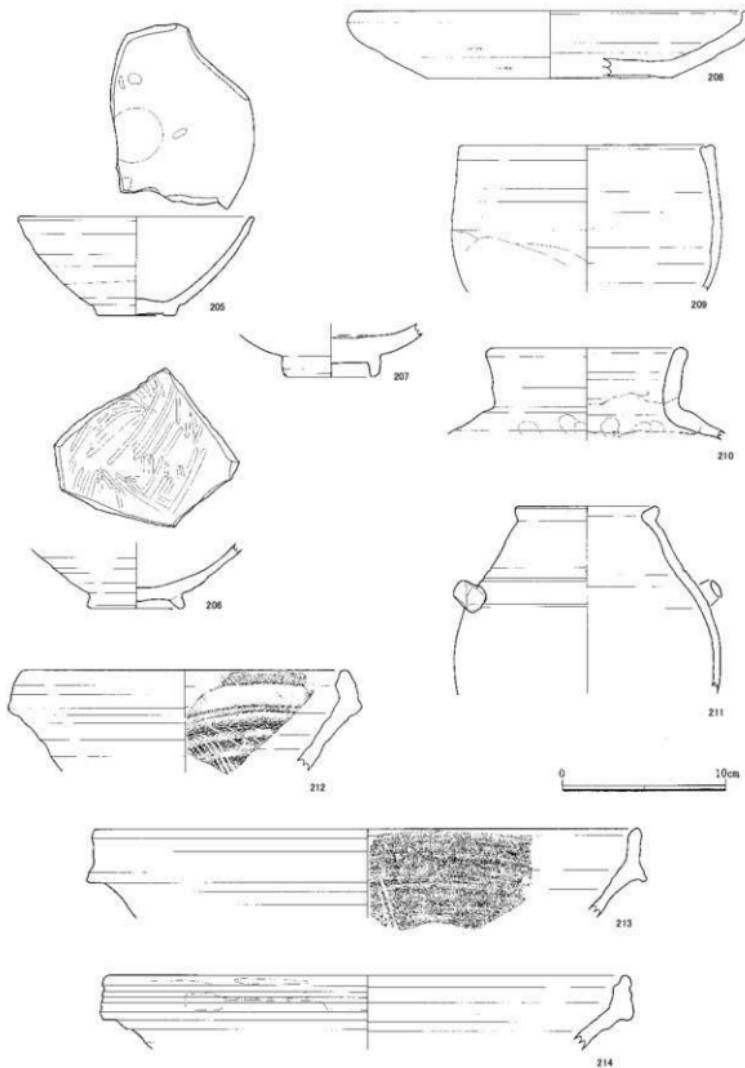
229は白磁碗で、断面逆台形の削出高台である。230・231は青磁碗で、230の疊付は丸く、高台内はケズリである。231は削出高台である。見込みに非常に浅い陰刻が四角形に彫られる。232～235は輸入磁器皿である。232の体部は外反気味である。外面の文様は不明、口縁部内面と見込みに圈線がある。景德鎮窯系である。233は高台を持つ端反り皿で、小野分類皿B1群である。口縁部内外面に圈線、体部外面に唐草文が描かれる。234は基筒底で、小野分類皿C群である。外面には芭蕉葉文、見込みに捻花が描かれる。235は薄い器厚で逆台形の高台であり、高



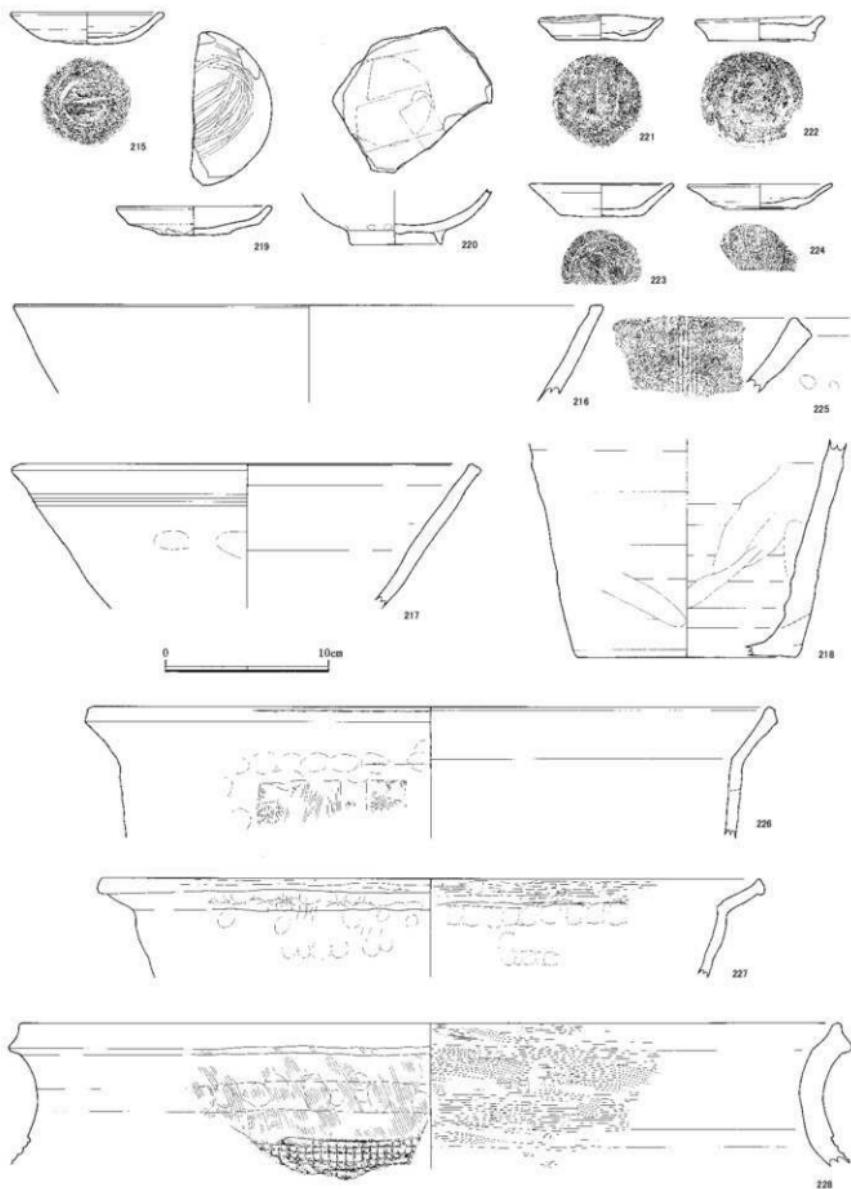
第5-21図 石垣解体に伴う出土土器実測図(9)



第5-22図 石垣解体に伴う出土土器実測図(10)



第5-23図 石垣解体に伴う出土土器実測図(11)



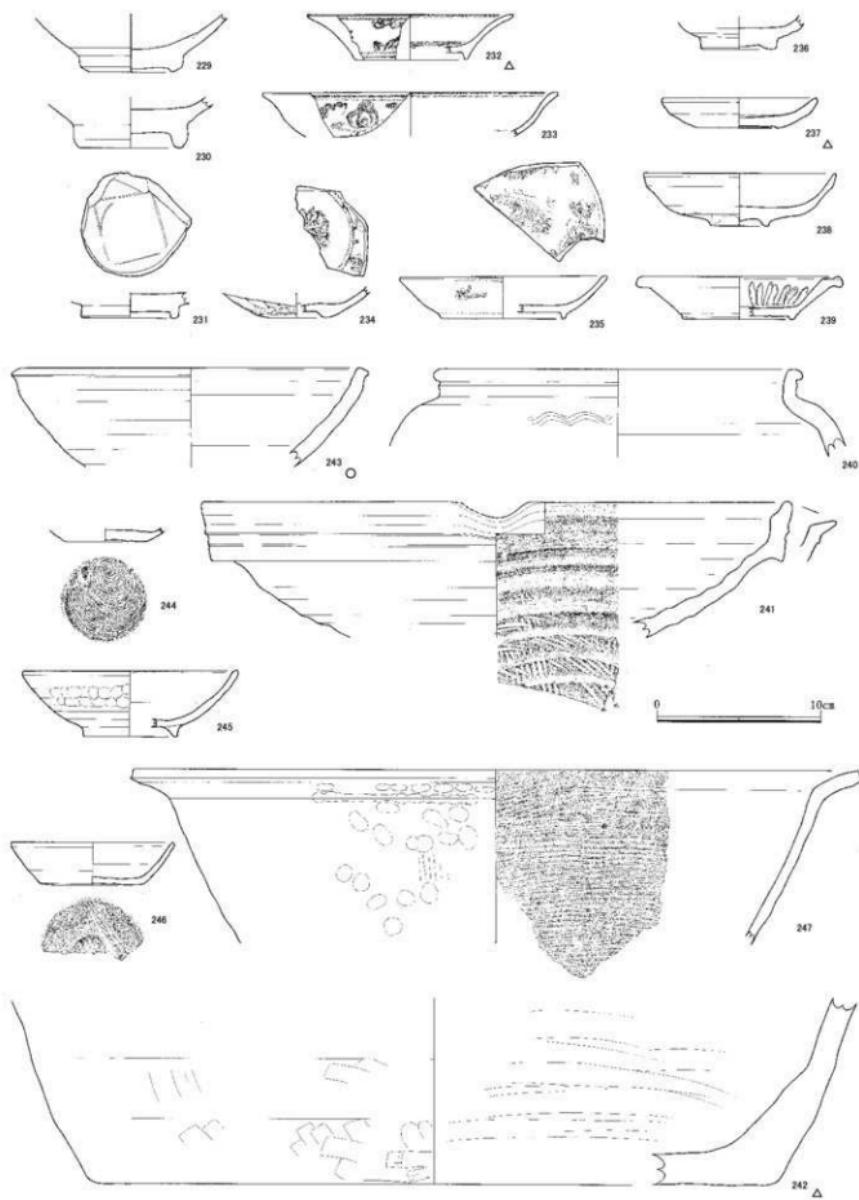
第5-24図 石垣解体に伴う出土土器実測図(12)

台内にカンナケズリ痕が残る。内外面は草花文が描かれる。236は陶器碗で、蛇の目高台である。237は瀬戸美濃系陶器皿で、いわゆる幕筒底をなし、全面施釉されるが見込みに釉ハギが行われ、体部内外面に貫入が見られる。高台内に焼台の痕跡が残る。238は肥前系陶器皿で、体部下半はヘラケズリが施される。239は瀬戸美濃系陶器皿で、疊付と高台内は無釉である。折縁ソギ皿である。240は陶器壺で、口縁部は短く直立する。体部の肩に櫛描きの波状文が巡る。241は備前焼陶器擂鉢で、片口を有する。口縁端部は上下に拡張し、外面に凹凸を有し、口縁端部の下側に重ね焼き痕が残る。242は備前焼陶器壺で、体部と平底の底部はナデ、体部最下位はナデ・ケズリが施される。243は須恵質土器鉢で、内湾気味の体部に口縁端部が外側に僅かに拡張する。244は須恵質土器杯で、底部は回転糸切りにより切り離される。245は瓦器碗で、やや高い貼付高台が付く。内外面はナデで外面の一部に指押えが施される。246は土師質土器杯で、底部は切り離し後にナデ・板目が施される。口縁部に重ね焼きによる変色がある。247は土師質土器鍋で、口縁部は体部から緩やかに傾斜する。外面は指押え・ナデ・粗いハケ、内面は横方向の粗いハケが施される。

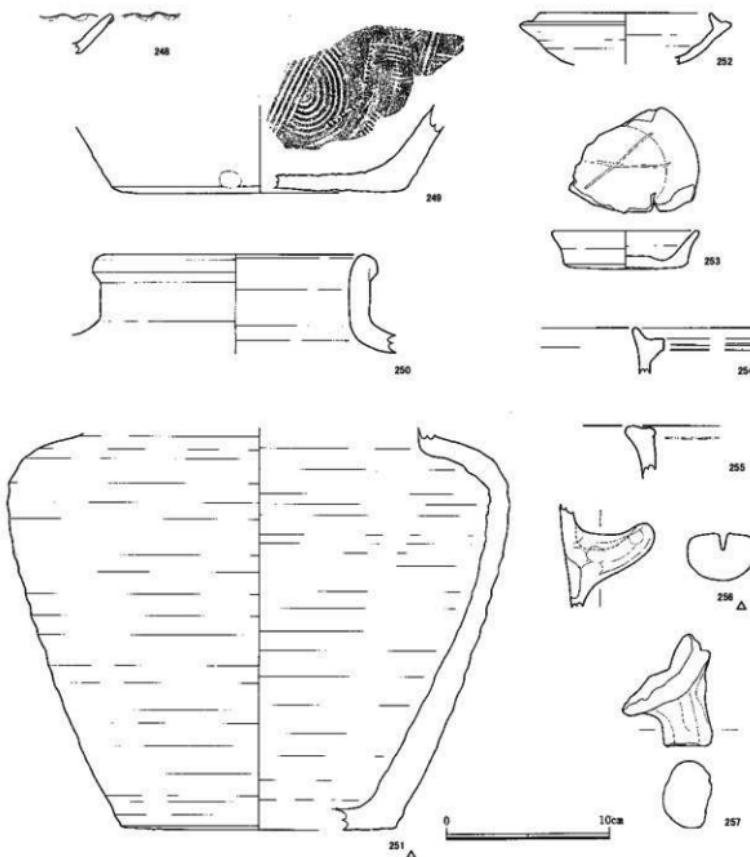
248～278は天守台・天守台前面・中川橹台の16～20段目、虎口の18～20段目(グループ③-3)より出土した土器である。出土位置別に分けると、248～257が盛土出土、258～278は出土位置不明である。

248は瀬戸美濃系陶器皿で、口縁端部は輪花である。249は陶器擂鉢で、外面は回転ナデ、底部は未調整である。内面には御目があるが長期間使用されていたらしく表面は非常に滑らかである。250は備前焼陶器壺で、口縁部は直立し端部は丸く収まる。全面は施釉だが口縁端部と体部外面に自然釉がかかる。251は備前焼陶器壺で、平底から急傾斜で体部が立ち上がり、肩は大きく張る。体部内外面は回転ナデによる凹凸があり、底部はヘラケズリが施され、肩外面に自然釉がかかる。252は須恵器杯身で、かえしはやや長い。253は土師質土器小皿で、内面に×状のヘラ記号があり、底部は回転ヘラ切り後にナデが施される。254は土師質土器羽釜で、口縁端部直下に断面逆台形の鈙が付く。255は土師質土器足釜で、口縁端部直下に小さな鈙が付く。鈙より下に煤が付着する。256は土師質土器鍋の取手で、上面にV字の溝がある。257は土師質土器焜炉の脚である。

258・259は白磁碗で、258は口縁端部が僅かに外反し、259は口縁部が外反する。260は白磁の端反り皿である。261は白磁皿で、口縁部が僅かに外反する。262は輸入青磁碗で、体部外面に鍋蓮弁文がある。龍泉窯系と考えられる。263は輸入陶器碗で、外面に草花文が描かれる。264は瀬戸美濃系の陶器天目である。265～267は備前焼陶器壺である。265は肩の張る体部から口縁部は直立し、口縁端部は丸い玉縁状である。体部外面に2条の沈線が巡る。266の口縁部は内湾し、口縁端部と内面の一部に自然釉がかかる。267の体部に斜格子状のヘラ記号がある。268は備前焼陶器擂鉢で、体部最下位はヘラケズリ、底部は未調整である。269は須恵質土器杯で、口縁部は僅かに外反し、体部下面は指押えが施される。270は須恵質土器こね鉢で、直線的な体部からそのまま口縁部に至る。271は瓦器小皿で、体部は非常に緩やかな傾斜で延び、体部



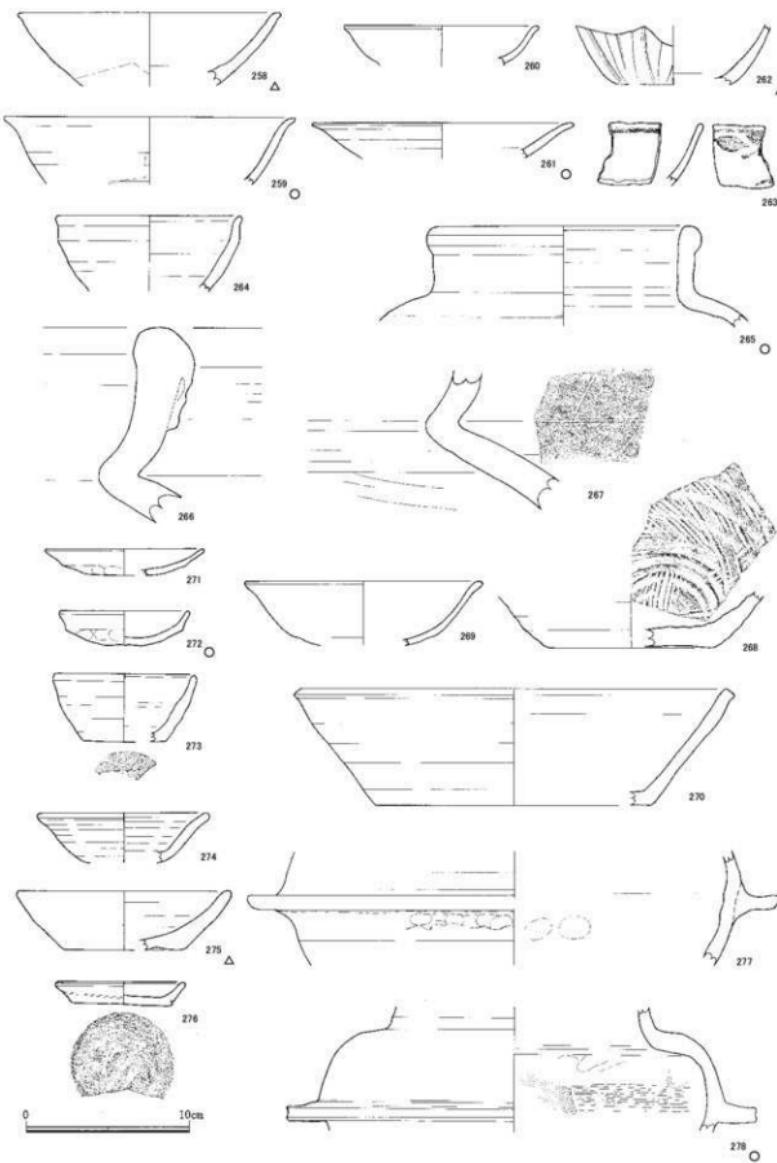
第5-25図 石垣解体に伴う出土土器実測図(13)



第5-26図 石垣解体に伴う出土土器実測図(14)

外面下半は指押えが施される。272は土師質土器小皿で、外面に稜を有し、底部は指押えが施される。273～275は土師質土器杯で、内外面は回転ナデである。273は急傾斜で立ち上がり、底部は静止糸切りである。274の体部は緩やかな傾斜で立ち上がり、275は厚い器厚であり、底部は板目である。276は土師質土器小皿で、体部は直線的で、底部は切り離し後にナデ・板目が施され、外面にヘラの先端による鋭い沈線が巡る。277は土師質土器足釜で、鐸は口縁端部よりかなり下に付く。278は瓦質茶釜で、体部中央に幅広い鐸を有し、口縁部は直立する。外面は回転ナデ、体部内面は横方向の粗いハケ・ナデが施される。

279～281は土製品と同図版に組むが土器として報告する。279は天守台9・10段目から出土するイイダコ壺であり、外面はナデ、内面は絞り目が残り、ナデが施される。280は天守台6段目盛土より出土するカマドで、外面に縦方向の粗いハケ、内面は横方向の粗いハケが施される。



第5-27図 石垣解体に伴う出土土器実測図(15)

281は天守台9段目盛土より出土するカマドであり、内面に指頭圧、外面に指頭圧・粗いハケが施される。

### 土器の小結

天守台石垣解体に伴い出土した土器のうち、281点を図化した。出土地点に傾りはなく、全域にわたって出土した。その内訳は、石垣1・2段目が10点、5~9段目が179点、10~15段目が56点、16~20段目は31点である。これらの土器は栗石と盛土から出土したが、大部分の土器は盛土からの出土である。土器の種別は白磁、青磁、輸入陶磁器、国産陶磁器、土師質土器、須恵質土器、瓦器、黒色土器、土師器、須恵器、弥生土器である。

白磁は碗、皿であり、石垣の上段から下段までの全域から出土したが、5~9段目の盛土からの出土が多い。碗は器厚が薄く口縁端部が丸く收まるもの（17~21・189・258・259）と器厚が厚く口縁端部が玉縁状のもの（22~26・165・188）に分類できる。前者には口縁端部が端反りするものとしないものに細分される。皿は191・192・260・261である。191はいわゆる「口禿げの白磁」であり、192は5弁の花形の口縁端部である。

青磁は碗、皿であり、石垣の上段から下段までの全域から出土したが、5~15段目の盛土からの出土が多い。青磁はほとんど龍泉窯系のものであり、14世紀のものであると考えられる。碗の器形は、体部からそのまま口縁部に至るものがほとんどであるが、口縁部が外反するもの（196）もある。体部外面に片刃彫の鎬蓮弁をもつ碗（36~44・168・195）ともたない碗（31~33・167・193・194・196~198）がある。44は鎬蓮弁が二重になっており高句麗系の系譜を引く可能性がある。内面の文様として、二叉片刀により分割しその間に飛雲文をいれる32・193・194と雲文状（31）、片彫蓮花文（33）がある。見込みには片彫りの飛雲文（35）とヘラによる草花文（34・197・198）がある。皿の見込みには短い櫛目が入る。

輸入磁器は碗、皿、鉢であり、石垣の上段から下段までの全域から出土したが、5~15段目の盛土からの出土が多い。碗と皿は非常に薄い器厚である。外面の文様は波涛文帶と芭蕉葉文（53）、草花文（54・61）、唐草文（55~56・202・204）がある。見込みの文様は捻花（53）、草花文（59）、獸文と草文（60）、牡丹（61）、十字花文（204）がある。高台内に銘隸が描かれるものもある（59・60）。これらの磁器は景德鎮窯と考えられるものが多い。211は産地不明だが輸入陶器の水注あるいは双耳壺である。

国産陶磁器は肥前系、瀬戸美濃系、備前系であるが、肥前系の出土は非常に少ない。全域から出土したが、主に石垣中段から下段にかけて出土した。70、71、237、折縁ソギ皿である239等の瀬戸美濃系磁器や238等の肥前系磁器は古い時期の要素を有し16世紀末~17世紀初頭のものと考えられる。肥前系陶器は天正年間に焼き始められるが、大々的に発展したのは豊臣秀吉の朝鮮出兵以後であり、石垣解体に伴う土器に肥前系土器が少ないことも16世紀末~17世紀初頭の様相を示している。なお、6は18世紀中葉の肥前系磁器碗であるが、石垣1段目からの出土であり混入したものと考えられる。

瓦器は椀と小皿であり、全域から出土したが、特に5~9段目の盛土より多量に出土した。瓦

器楕は口径13cmを境に二つのグループに分かれるが、13cm未満の楕は少ない。器形では100・106のように半球状をなすものと器高の浅いものがある。高台は低いものが多く形骸化している。大部分の楕は在地の西村型土器楕である。皿は口径8~10cmで、底部と体部の境が不明瞭な器形と僅かな稜を有する器形がある。

土師質土器は楕、杯、小皿、鍋、足釜などである。全城から出土したが、瓦器と同様に5~9段目の盛土より多量に出土した。楕には吉備系楕(118・119)が僅かであるが含まれる。杯は器高の低いものとやや高いものがあり、底部の切り離しは回転ヘラ切りであるが、128・130・273は静止糸切りである。273は高松城跡(西の丸町地区)の様相1に該当すると考えられる。小皿は口径6.5~9cmの範囲に入っており、底部は回転ヘラ切りにより切り離され、中央に板目が残るものもある。口縁部の形態により、外傾度が強く長い口縁部をもつI(131~133)、外傾度が強いがIよりやや短い口縁部をもつII(134~138)、器形はIIと同じだが器厚の厚いIII(139・140)、直立気味の口縁部をもつIV(141・142)、外傾する短い口縁部をもつV(143~147)、器形はIIと同じだが凹凸のあるVI(148・149)、底部と口縁部の境が不明瞭であるVII(150・151)に分類できる。高松平野の中世後期の土師質土器小皿は回転ヘラ切りが主体であることから、これらの小皿は中世土器の系譜を引くと考えられる。

石垣解体に伴い出土する土器に関して注目すべき点は次の事が挙げられる。

- ① 14~16世紀の輸入陶磁器や白磁・青磁が多量に出土する。
- ② 土師質土器や瓦器などに中世土器の系譜を引く土器が多い。
- ③ 国産陶磁器は16世紀末~17世紀初頭の様相を示している。

①、②は、高松城築城以前には周辺に集落や寺院等が所在しており、築城に際し集落や寺院等が撤去されたことを示している。最近の発掘調査の成果により、中世の状況が従来考えられていた「さびれた漁村」ではなく、「経済基盤の整った港町」であることが次第に明らかになっている。周辺では港湾施設や区画溝を有する建物跡、寺院跡等が検出され、今回の石垣解体に伴う調査においても第5章第5項で後述するように天守台の最下層に中世の集落が存在していた。築城に際し集落や寺院等を撤去し、堀として掘削された土砂は天守台の盛土に使用され、その土砂の中に当時使われていた土器が含まれたと考えられる。都市機能を持つ港町を廃し、高松城が築城されたのである。

③は石垣の構築時期を示していると考えられる。17世紀初頭の土器があるということは、現在の天守台石垣が天正16年(1588)の築城当時のものではなく17世紀初頭に築造されたということの一つの根拠になるだろう。さらに、17世紀初頭より新しい時期の土器が出土していないことから、天守台石垣はその後の改修を受けていないと考えられる。

#### 参考文献

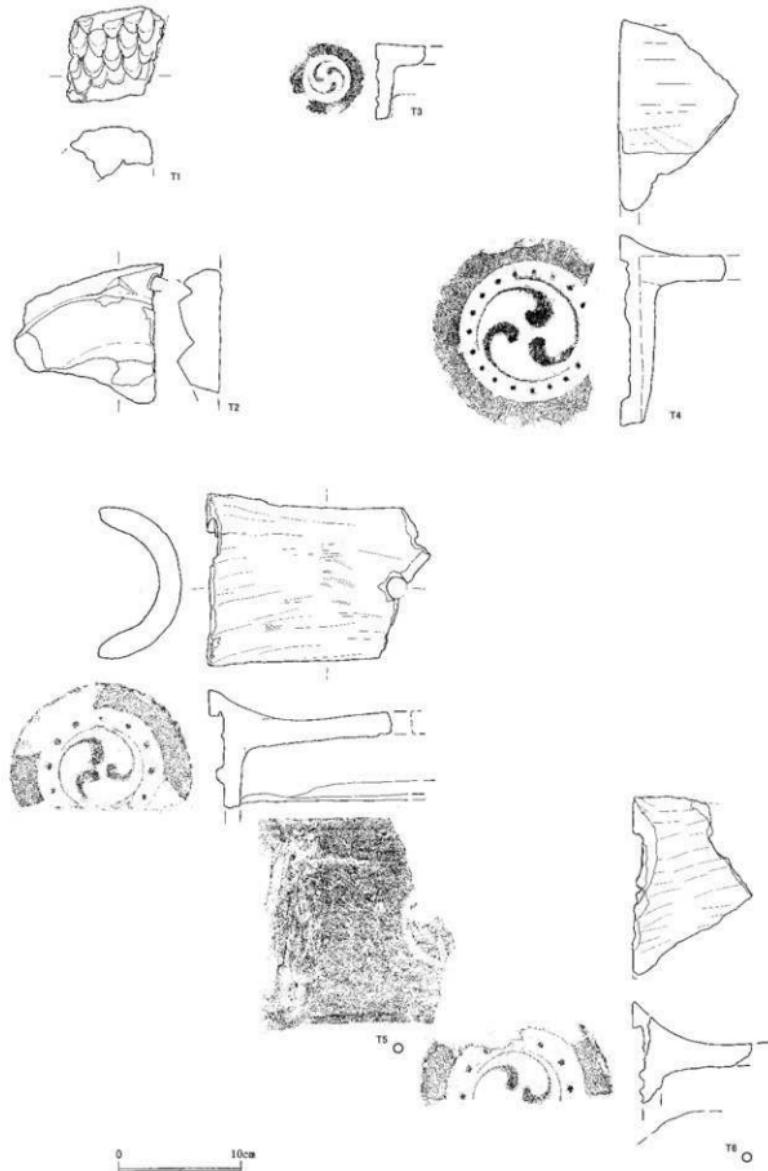
- 森田勉 1982 「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』  
 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 No.2』  
 小野正敏 1982 「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』  
 香川県教育委員会 2003 『高松城跡(西の丸町地区) III』

## 瓦(第5-28~5-46図)

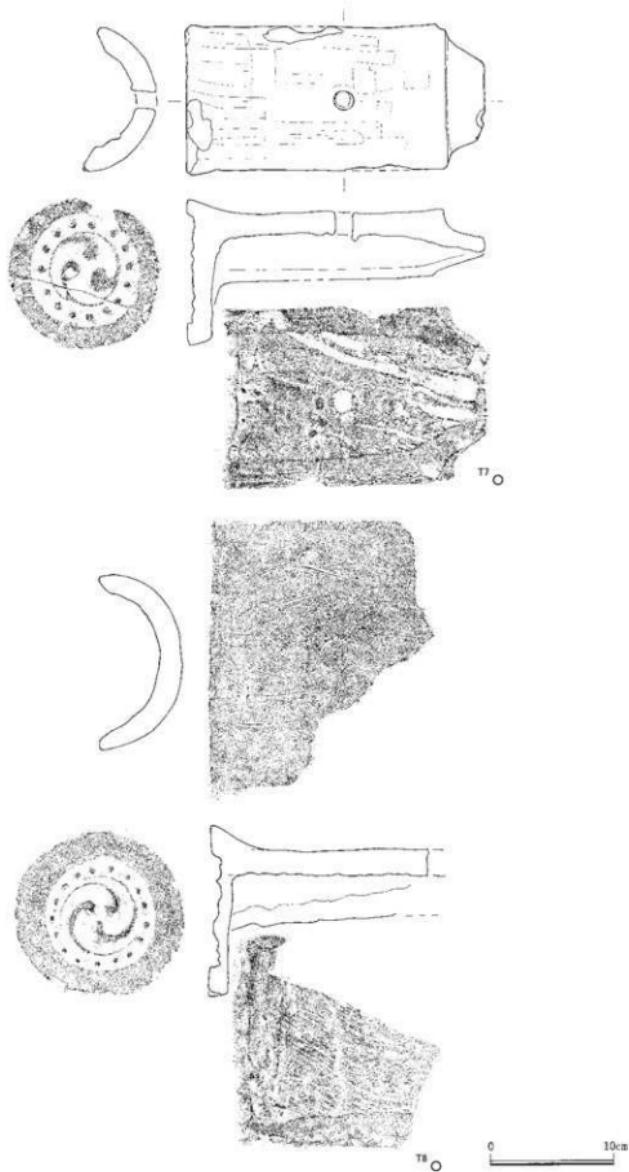
瓦は土器と同様の取り上げ区分に準じて報告することとする。T 1~45は天守台の1・2段目、天守台前面と中川櫓台の10・11段目、虎口の17段目(グループ①)の解体に伴う出土遺物であり、T 1~4は間詰出土、T 5~27は栗石出土、T 28~44は盛土出土、T 45は出土層不明である。T 46~65は天守台の5~9段目(グループ③-1)の解体に伴う出土遺物であり、T 46~51は栗石出土、T 52~63は盛土出土、T 64・65は出土層不明である。T 66~70は天守台の10~15段目、天守台前面と中川櫓台の12~15段目(グループ③-2)の解体に伴う出土遺物であり、出土層不明である。T 71~80は天守台と天守台前面、中川櫓台の16~20段目、虎口の18~20段目の解体(グループ③-3)に伴う出土遺物であり、T 71・72は栗石出土、T 73~80は出土層不明である。T 81~87は天守台と天守台前面と中川櫓台と虎口の21~22段目の解体(グループ④)に伴う出土遺物であり、T 81・82は虎口出土、T 83~87は栗石出土である。

T 1はE面間詰より出土した鰐の破片であり、鋭利な工具を用いて鱗を表現する。T 2はG面間詰より出土した鬼瓦のヒレ部分であり、方形の孔を有する。表面は丁寧なナデ、裏面は不定方向のナデが施される。T 3はE面間詰より出土した軒桟瓦の小丸瓦当で、左巻き三巴文である。T 4は1段目栗石より出土した右巻き三巴文の軒丸瓦である。巴頭部は鉤状をなし、巴尾部は長いが繋がらない。珠文は19個である。凹面は布目が残る。

T 5~18は天守台前面の栗石より出土した右巻き三巴文の軒丸瓦である。T 5・6・8・9は巴頭部が鉤状をなし、巴尾部は長く、基部が強く巻き込み、巴尾部同士は繋がらない。T 5・8・9の凹面はコビキA・布目が残る。佐藤分類IV類34である。T 7は巴頭部が丸く、巴尾部が細長く、繋がっており囲線状をなす。珠文は15個である。凹面はコビキB・布目が残る。佐藤分類II類12である。T 10は巴頭部が鉤状をなし、巴尾部は長いが平坦な断面である。凹面は布目が残る。佐藤分類IV類35に近似する。T 11・17は巴頭部が鉤状をなし、巴尾部は長い。珠文の径は小さい。凹面はコビキB・布目が残る。佐藤分類IV類34に近似する。T 12は巴頭部が鉤状をなし、巴尾部は長い。珠文は20個で間隔が狭い。佐藤分類IV類40である。T 13は巴頭部が小さく丸く、腹面側が明確に括れる。巴尾部は基部と先端の幅が大差なく細長い。佐藤分類IV類55に近似する。T 14~16は巴頭部がやや大振り、巴尾部は基部がやや幅広で先端に向かって先細りする。凹面はコビキB・布目が残る。T 14は佐藤分類IV類133、T 15・16は佐藤分類IV類124に近似する。T 18は巴頭部が大振りで、巴尾部はやや長めで基部が太い。佐藤分類IV類161に近似する。T 19・20は天守台前面の栗石より出土した軒平瓦である。T 20は中心飾りが陽刻線で輪郭を表す三葉であり、唐草文は長く延び、先端が上向きに1転し、外側に3つの花蕾がある子葉と下側に2条平行する波状の子葉を配置する。佐藤分類V類11である。T 21は天守台前面の栗石より出土した右巻き三巴文の鳥食瓦で、巴頭部はやや大振りで、巴尾部は基部がやや幅広で先端に向かって先細りする。佐藤分類IV類87である。T 22~25は天守台前面の栗石より出土した玉縁丸瓦である。T 22は凸面に縦方向の板ナデが施され、凹面はコビキA・布目・抜取紐痕が残る。T 23~25は凸面に縦方向のヘラミガキが施され、凹面はコビキB・布目が残



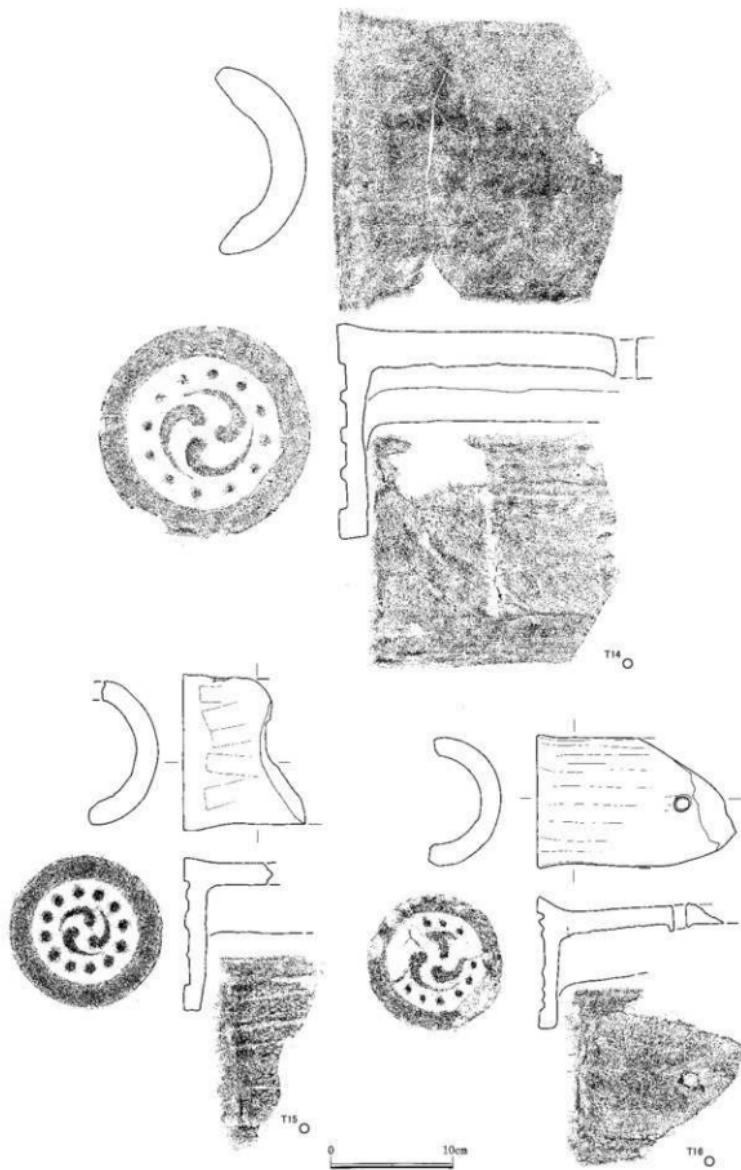
第5-28図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(1)



第5-29図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(2)



第5-30図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(3)



第5-31図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(4)

る。T 26・27は天守台前面の栗石より出土した鬼瓦のヒレ付近である。T 27は「風」字を呈する鬼瓦で孔を有する。

T 28～31は天守台前面の盛土より出土した軒平瓦である。T 28は直線的な三葉を中心飾りとし、下側から唐草文が延び2転する。凸面はナデ、凹面は板ナデが施される。T 29は太く丸い中心葉と先端が外側に丸まる側葉と珠文状の結束点を中心飾りとし、唐草文は結束点から横方向に延びる軸線状の蔓から上に3転し、先端は丸く收まる。佐藤分類V類8・9である。T 30は瓦当面内区に珠文を配置する。T 31は陽刻線で輪郭と弧線を表す逆宝珠文を中心飾りとし、横方向に延びる軸線状の蔓から上に3転ないし4転する。T 32・34は天守台前面の盛土より出土した玉縁丸瓦で、凸面はナデ・ヘラミガキが施され、凹面にはコビキB・布目・抜取紐痕が残る。T 35は天守台前面の盛土より出土する玉縁丸瓦で、凸面はナデが施され、凹面にはコビキB・筵目・抜取紐痕が残る。T 35は天守台前面の盛土より出土した鬼瓦のヒレ部破片で、上下関係がわからぬのでこの配置の図面とする。上面に突起があり、「○」の刻印がある。断面は「コ」字形を呈し、2方向からの方形の孔がある。表面はナデ、内面はヘラケズリが施される。T 36～38は天守台前面の盛土より出土した風字形を呈する鬼瓦の破片である。T 36は断面「コ」字径を呈し、上面に突起がある。表面は横方向のナデ、内面は様々な方向のヘラケズリ・ナデが施される。

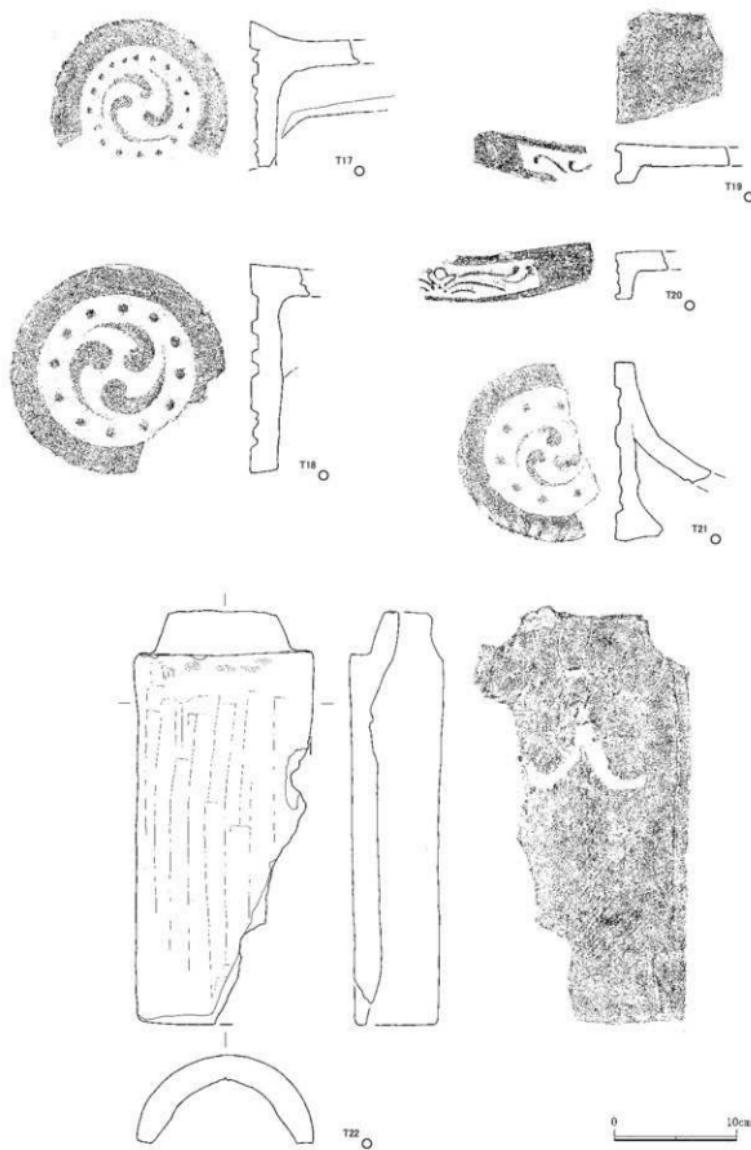
T 39は天守台前面より出土した右巻き三巴文の軒丸瓦で、巴頭部はやや大きく丸く、腹面側が明確に括れる。巴尾部は基部がやや幅広で先端に向かって先細りする。凸面は板ナデ、凹面はコビキB・板ナデである。T 40は天守台前面より出土する右巻き三巴文の鳥衾瓦で、巴頭部は鉤状をなし、巴尾部は基部と先端の幅が大差なく細長い。凸面は板ナデ。T 41・42は天守台前面より出土した軒平瓦で、T 41は細長く軸線を伴わない花弁を中心飾りとし、唐草文は繋がつて3転し、子葉も繋がる。T 42は陽刻線で輪郭と弧線を表す宝珠文を中心飾りとし、唐草文は3転（下・上・下）する。T 43は風字形を呈する鬼瓦で、中央に配置する「葵紋」の一部である。裏面には接合する為の凹凸がある。

T 44は中川櫓台の盛土より出土した丸瓦で、凸面は板ナデ、凹面は布目・抜取紐痕が残る。

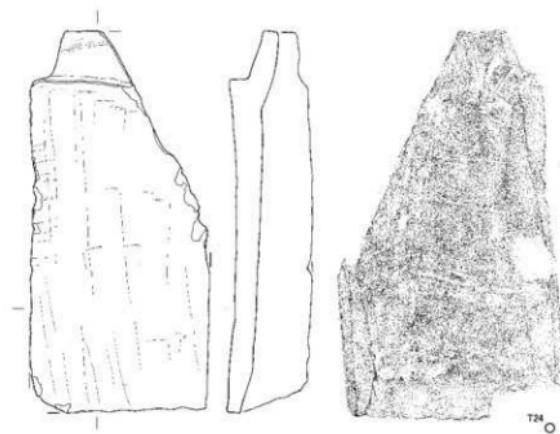
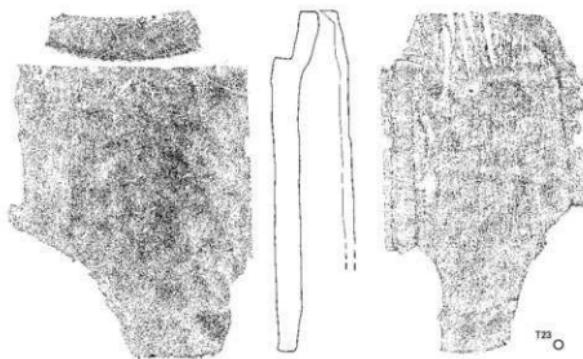
T 45は虎口より出土した軒平瓦で、唐草文は短く、2転（上・下）する。

T 46・47は栗石より出土した軒丸瓦である。T 46は左巻き三巴文で、内区と外区との間に圓線があり、巴尾部が相互に繋がる。凸面は板ナデ、凹面は布目。佐藤分類I類1である。T 47は右巻き三巴文で、巴頭部は鉤形を呈し近接する。巴尾部は非常に細長く、先端が繋がり圓線状をなす。T 48・49は栗石より出土した軒平瓦で、結束点から延びる太い劍頭形の三葉を中心飾りとし、結束点から両側に子葉を伴う軸線状の蔓が延び、その上側に平行して唐草文が3転する。佐藤分類V類10である。T 50は栗石より出土した丸瓦で、凸面は繩目タタキの後にナデが施され、凹面は布目・抜取紐痕が残る。T 51は栗石より出土した平瓦で、凹面には「□□ 道源禪門 逆修（送形カ）」の3行の文字が彫り込まれる。

T 52～56は盛土より出土した軒丸瓦である。T 52は左巻き三巴文で、内区と外区との間に

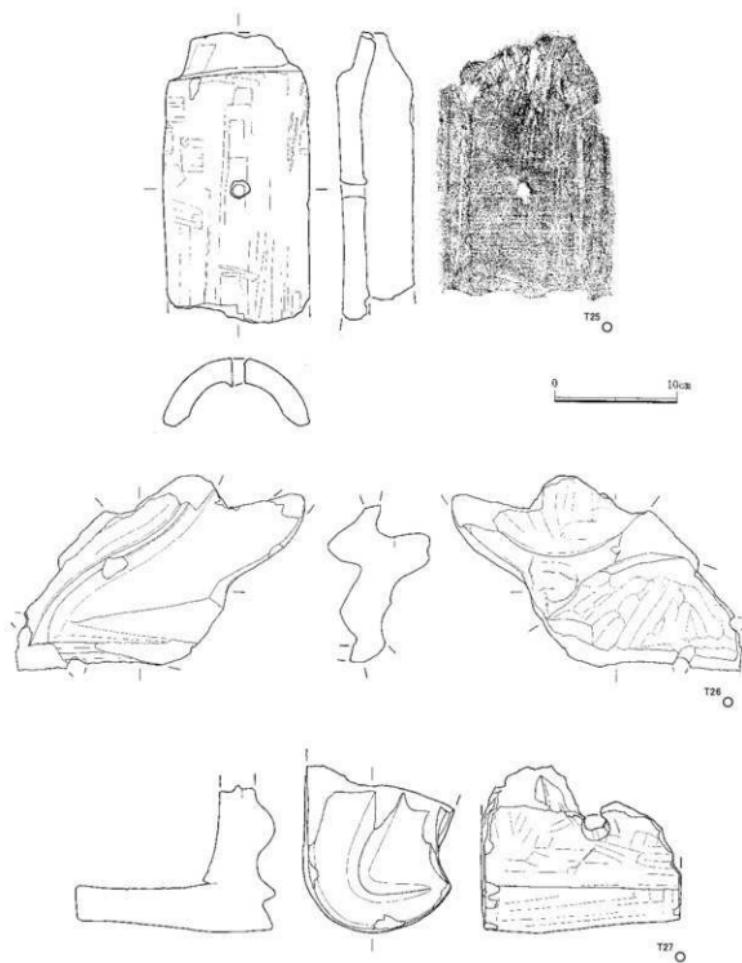


第5-32図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(5)

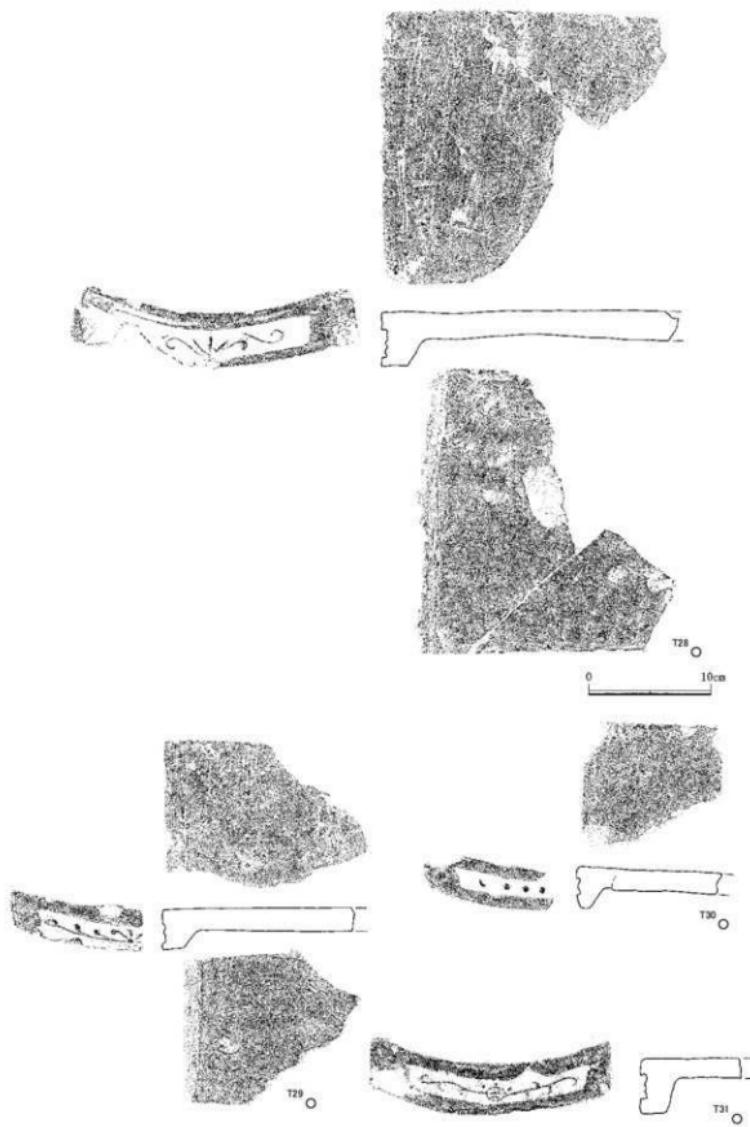


0 10cm

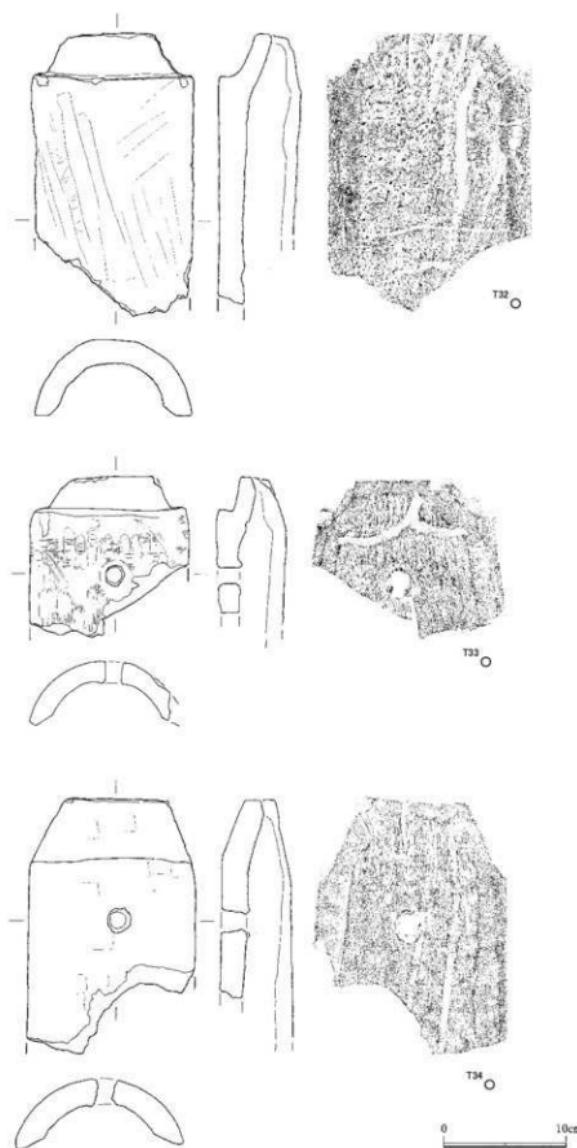
第5-33図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(6)



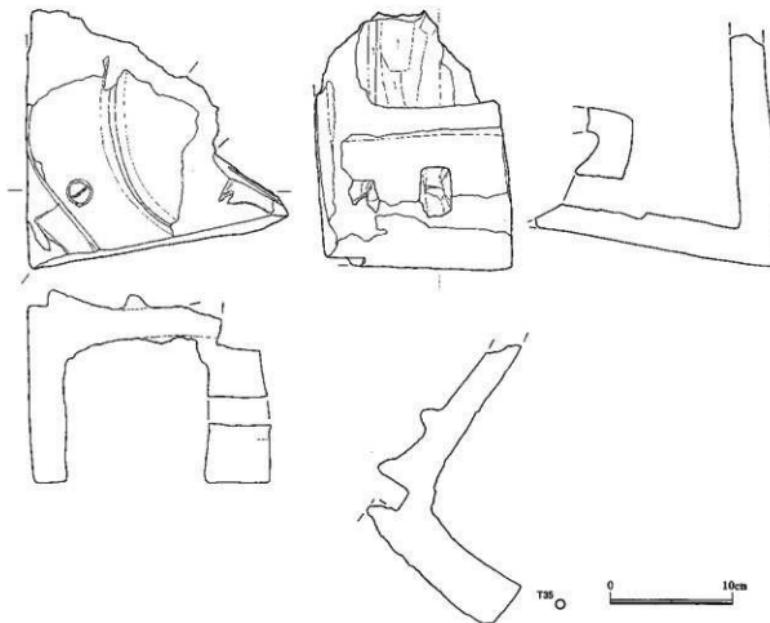
第5-34図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(7)



第5-35図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(8)



第5-36図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(9)



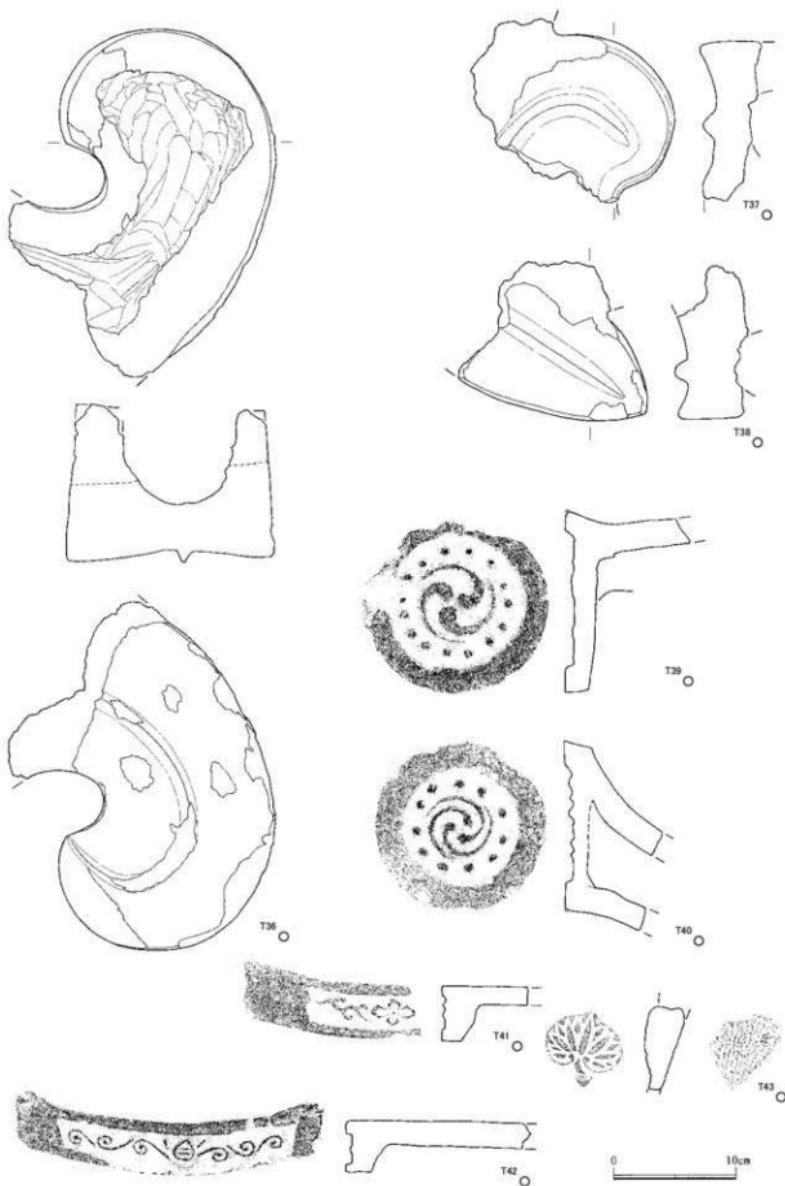
第5-37図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(10)

圓線があり、巴尾部が相互に繋がる。佐藤分類I類1である。T 53～56は右巻き三巴文である。T 53は巴尾部が非常に細長く、先端が繋がり圓線状をなす。T 54～56は小さく丸い巴頭部で、巴尾部は細長く、T 55の凹面にはコビキB・タタキ、T 56の凹面には布目が残る。T 57～59は盛土より出土した軒平瓦である。T 57は2本の唐草文が中心飾りの下側から平行して長く延びる。T 58・59は唐草文が2転する。T 60は盛土より出土した玉縁丸瓦で、凸面は布目の後にヘラナデが施され、凹面は布目・抜取紐痕が残る。T 61は盛土より出土した土塀瓦で、凸面はナデ、凹面はコビキAの後に板ナデが施される。T 62・63は盛土より出土した鯱の一部である。

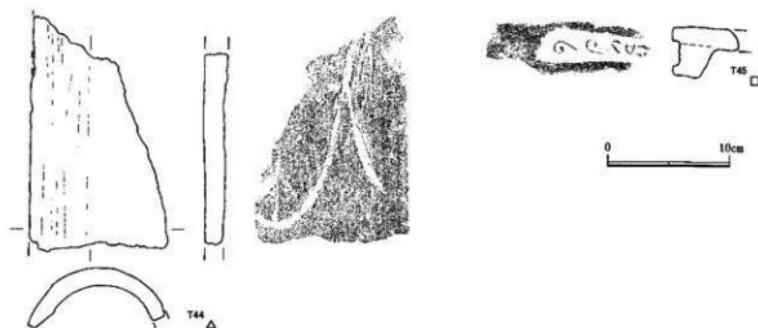
T 64は軒平瓦。T 65は輪違い瓦で、凸面はナデが施され、凹面はコビキB・布目が残る。

T 66は左巻き三巴文、T 67・68は右巻き三巴文軒丸瓦である。T 66・67は内区と外区を画する圓線があり、隣接する巴尾部は繋がらず、圓線に突き当たって終わる。T 68の巴頭部は丸く、巴尾部は基部と先端の幅が大差なく細長い。T 69は軒平瓦で、瓦当面に珠文を配し、凸面はナデ、凹面はナデが施される。T 70は鬼瓦のヒレ部の一部であり、上面にハート型の陰刻がある。外面はナデ、内面はヘラケズリが施される。

T 71は栗石より出土した左巻き三巴文の軒丸瓦で、内区と外区を画する圓線があり、隣接する巴尾部は細長く延びるが繋がらない。佐藤分類III類26である。T 72は釘孔のある平瓦で、凸面はナデ、凹面は板ナデが施される。



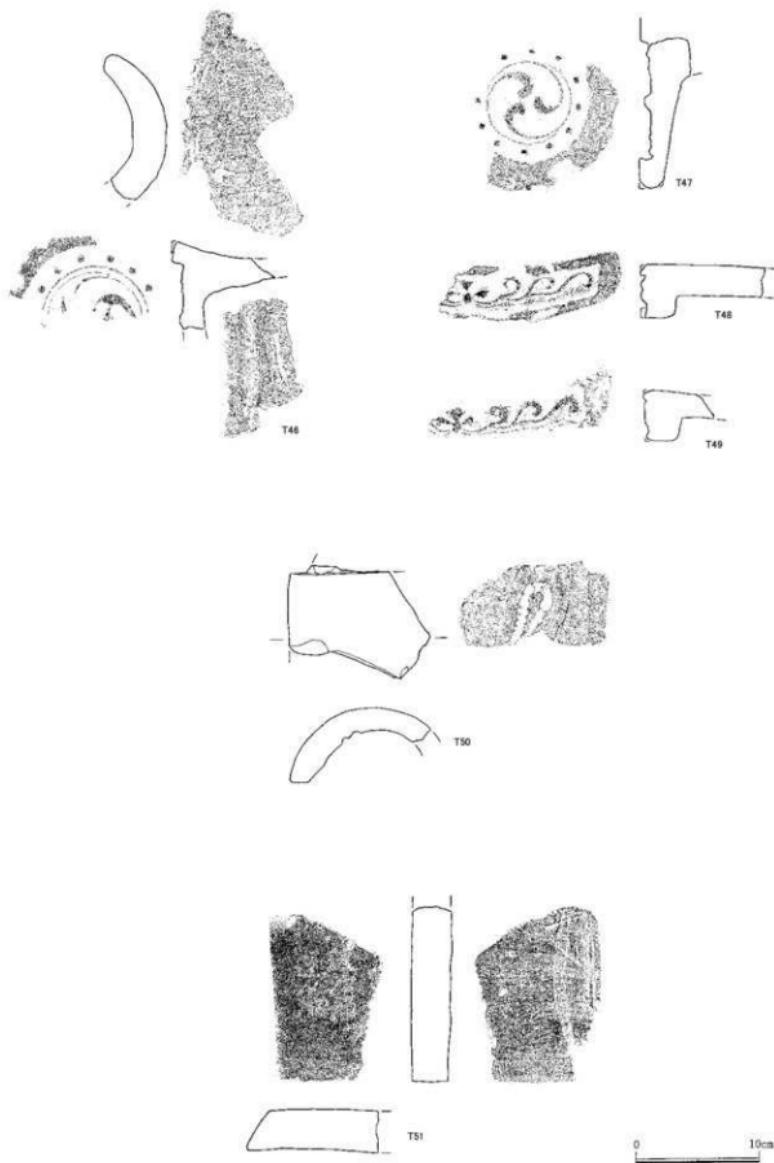
第5-38図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(11)



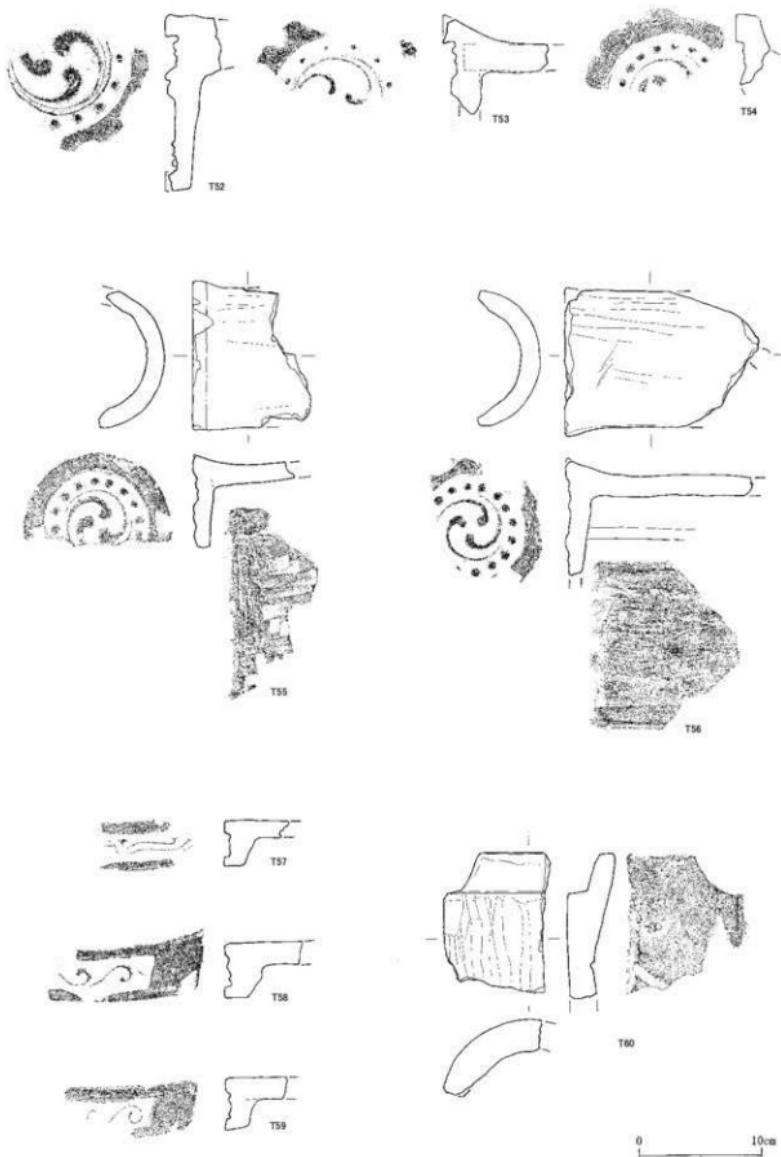
第5-39図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(12)

T 73は右巻き三巴文の軒丸瓦で、隣接する巴尾部は繋がる。T 74～77は軒平瓦で、T 74・75は唐草文の先端が下に2転し、T 76は大きく満巻く。T 77は陽刻線による三葉の花弁を中心飾りとし、唐草文は複雑な構成である。T 78は玉縁丸瓦で、凸面は縦方向のナデが施され、凹面はコビキA・布目が残る。T 79は平瓦で、凸・凹面にナデ、側面にハケが施される。T 80は鬼瓦の中央に配される鬼面の鼻である。

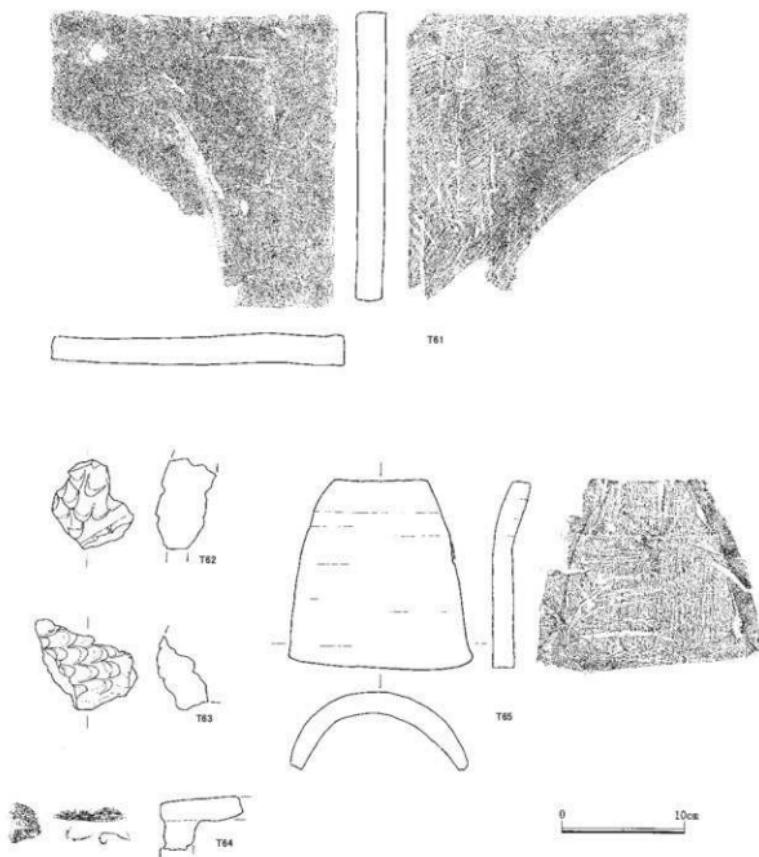
T 81は虎口より出土した右巻き三巴文軒丸瓦である。T 82は虎口より出土した玉縁丸瓦で、全面に牡蠣の殻が付着することから海水の影響を受ける場所にあったと考えられる。凸・凹面は板ナデが施される。T 83は天守台栗石より出土した軒平瓦で、上向三葉文を中心飾りとし、唐草文は2転(下・上)する。凸・凹面はナデ後に板ナデが施される。T 84は天守台栗石より出土した玉縁丸瓦で、凸面はナデ、凹面にはコビキB・布目が残る。T 85・86は中川櫓台の栗石より出土した玉縁丸瓦である。T 85は凸面にナデ、凹面にはコビキA・布目が残り、T 86は凸面に板ナデ、凹面には布目・板ナデ・抜取紐痕が残る。T 87は天守台栗石より出土した玉縁丸瓦で、凸面はミガキが施され、凹面は布目・タタキが残る。



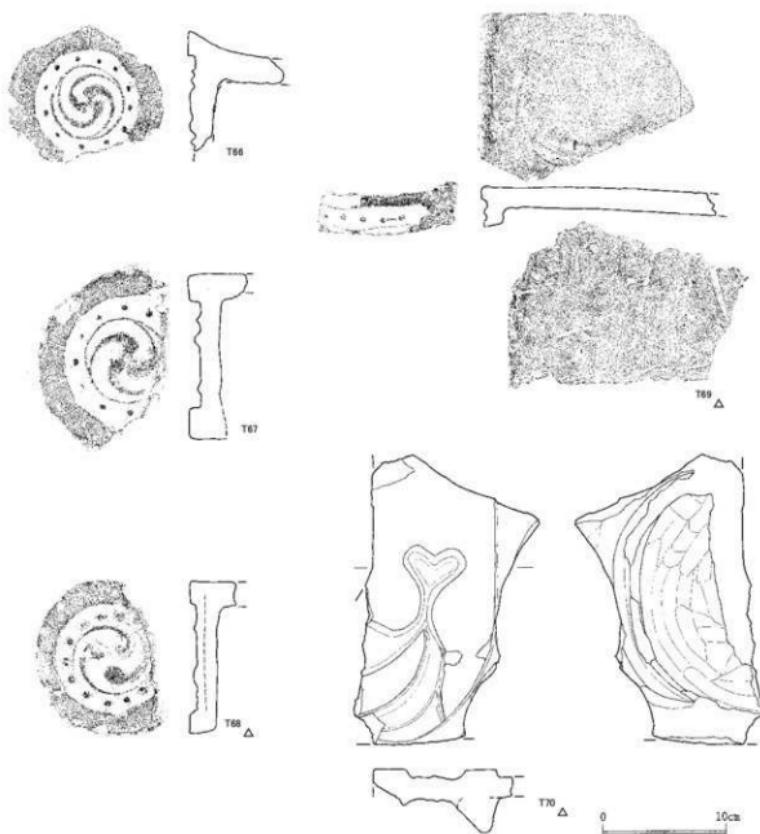
第5-40図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(13)



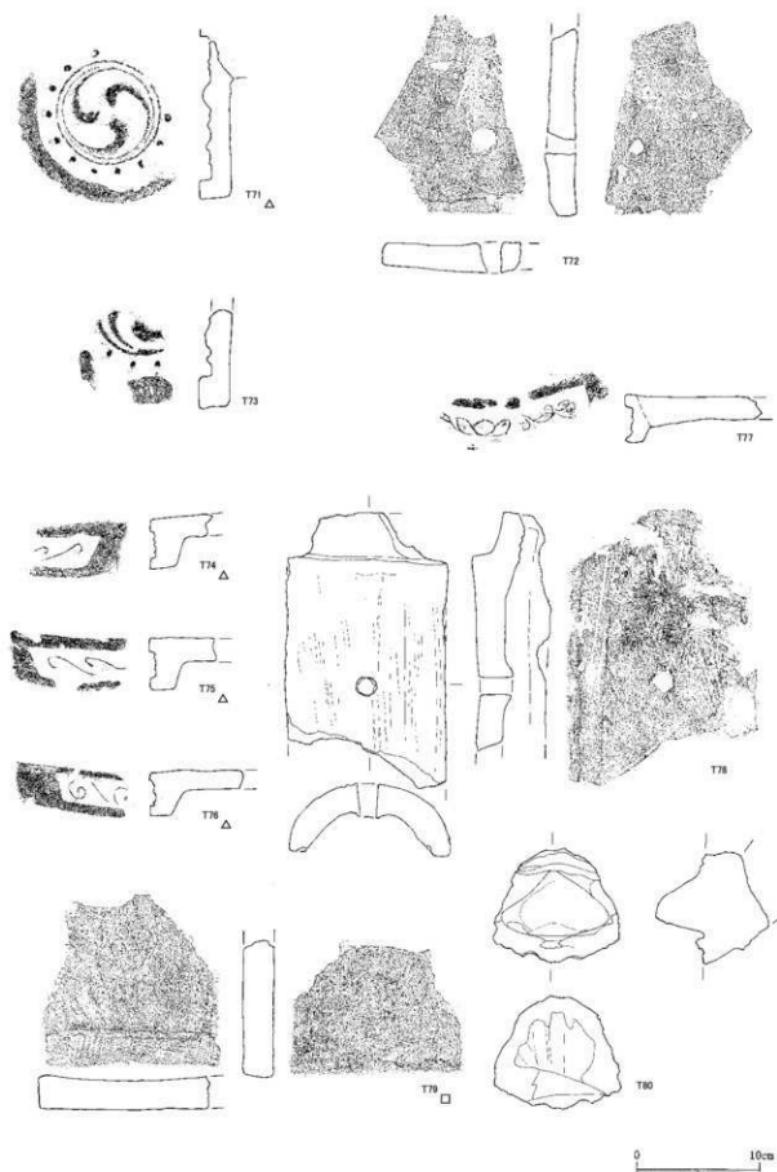
第5-41図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(14)



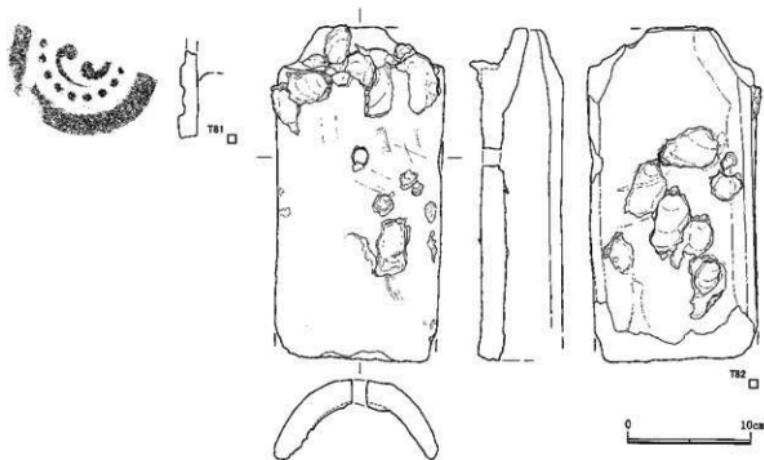
第5-42図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(15)



第5-43図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(16)



第5-44図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(17)



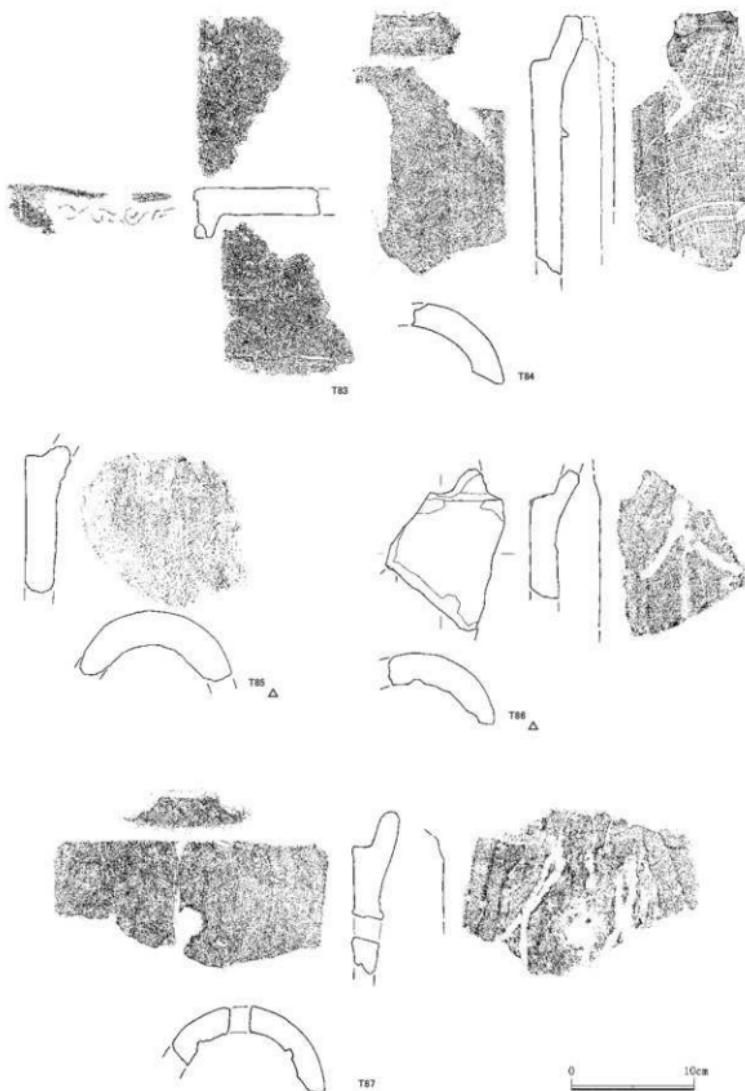
第5-45図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(18)

### 瓦の小結

石垣解体に伴う調査において出土する瓦は図化できたのが87点であり、ほぼ全域の栗石と盛土から出土している。瓦の種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦などである。軒丸瓦の瓦当文様は三巴文であり、巴頭部が丸く、巴尾部が細長く伸び、繋がって圓線状をなすものもある。珠文は径が小さく、数が多い。軒平瓦の瓦当面は、瓦当幅が狭く、中心飾りから唐草文が長く伸びる。これらの瓦は古い時期の特徴を持っており、高松城跡（西の丸地区）IIの様相1・2の範疇に入ると考えられる。さらに、T30・69のように中世の瓦である連珠文軒平瓦が出土しており、天正16年（1588）の高松城築城以前の瓦も含まれる。今回の天守台石垣解体に伴う発掘調査では、積直しの痕跡は検出しており、石垣が積直しされた可能性は低いと考えられる。石垣内部から古い様相の瓦が出土することは、石垣が積直しされてない根拠の一つとなる。また、中世の瓦の出土から高松城築城に際して周辺に所在する集落や寺院が撤去されたと考えられる。

### 参考文献

香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター 2003『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）II』



第5-46図 石垣解体に伴う出土瓦実測図(19)

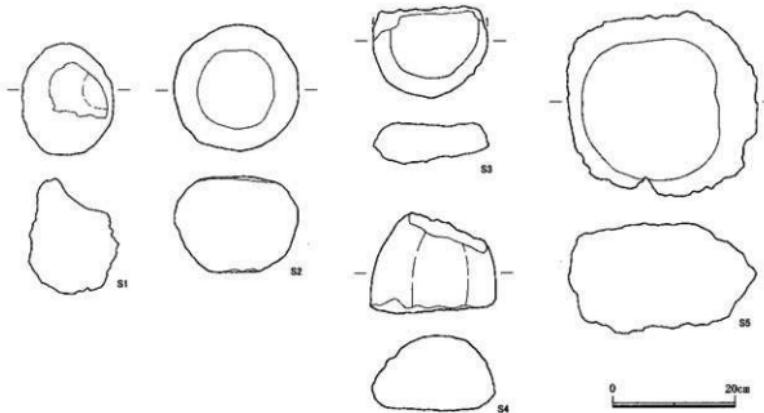
## 石造物（第5-47～5-101図）

石造物も土器・瓦と同様の取り上げ区分に準じて報告することとする。S 1～4は天守台の1・2段目、天守台前面と中川櫓台の10・11段目、虎口の17段目（グループ①）の解体に伴う出土遺物である。S 5は天守台3・4段目の解体（グループ②）に伴う出土遺物である。S 6～18は天守台の5～9段目の解体（グループ③-1）に伴う出土遺物である。S 19～116は天守台の10～15段目、天守台前面と中川櫓台の12～15段目の解体（グループ③-2）に伴う出土遺物である。S 117～305は天守台と天守台前面と中川櫓台の16～20段目、虎口の18～20段目の解体（グループ③-3）に伴う出土遺物である。S 306～363は天守台と天守台前面、中川櫓台、虎口の21～22段目の解体（グループ④）に伴う出土遺物である。S 364～422は天守台石垣の解体に伴う出土遺物であるが、出土位置が不明なものや解体した栗石の仮置き場に運搬後発見したもの（グループ⑤）である。

S 1～3は五輪塔水輪である。S 1は遺存状態が悪いが上面に大きな窪みがあり、石材は凝灰岩である。S 2は完形で上下面ともに平坦で、石材は凝灰岩である。S 3は平坦な上面のみ残存し、石材は凝灰岩である。S 4は花崗岩製の不明石造物で、表面は滑らかである。

S 5は凝灰岩製の五輪塔地輪である。

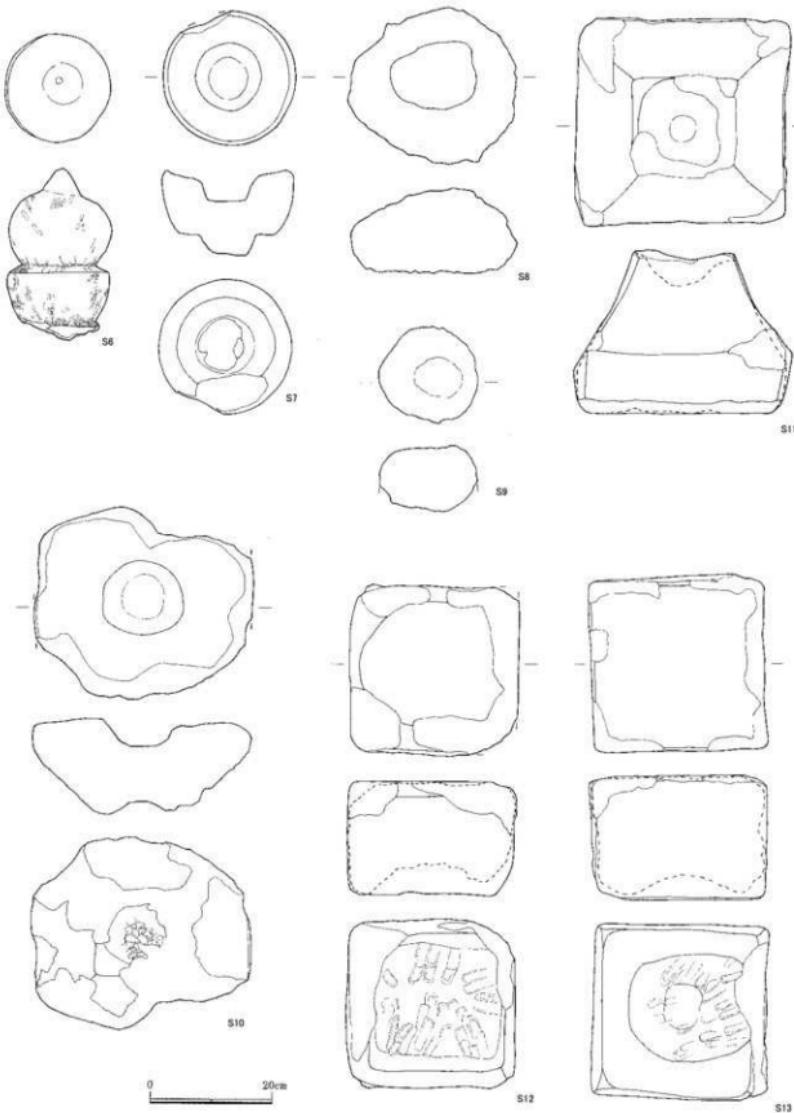
S 6は五輪塔空・風・火輪で、石材は淡いピンク色がかかる中国型花崗岩である。前面に加工痕が見られるが、特に2箇所の括れ部には細かな加工痕が残る。S 7は豊島産凝灰岩製の五輪塔風輪で、上面に円形の窪み、下面に円形の突起がある。S 8・9は凝灰岩製の五輪塔水輪で遺存状態が非常に悪い。S 10・11は五輪塔火輪で、S 10は上面に加工痕の残る窪みがあり下面に円形の窪みがあり、石材は火山産凝灰岩である。S 11は上面に円形の窪みがあり、石材は凝灰岩である。S 12～16は凝灰岩製の五輪塔地輪である。S 13はD面の間詰め石（石材番号D-6～7）であり、S 12～16は栗石より出土し、上面は平坦で下面は大きく抉られ加工痕が残る。



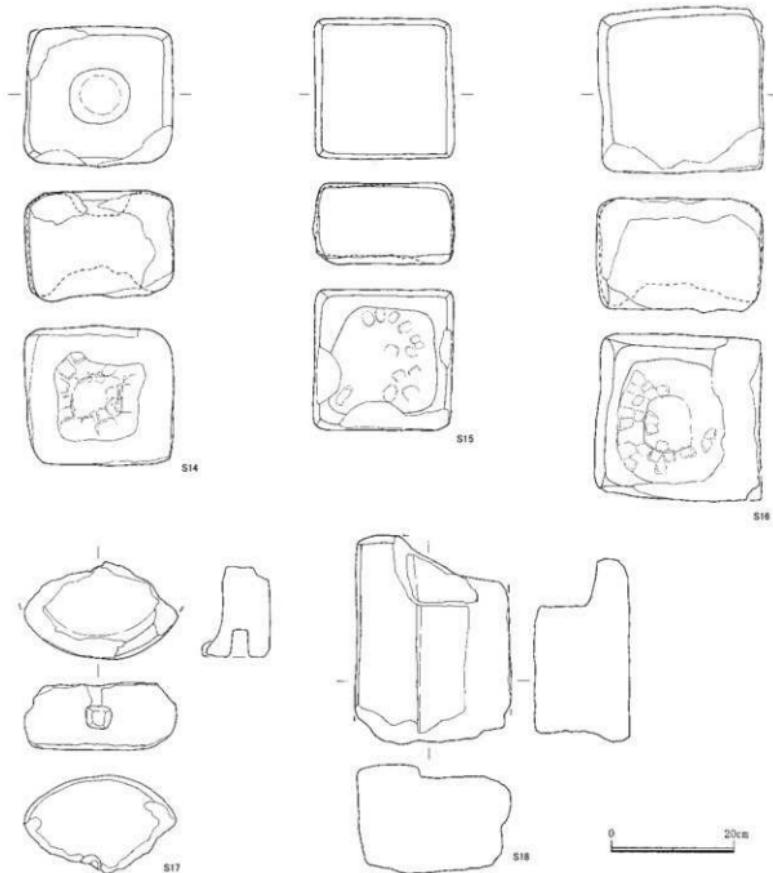
第5-47図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(1)

S 14 は上面に円形の深い抉りがあり、下面には幅の広い加工痕が残る深い抉りがある。S 17 は豊島産凝灰岩製の石臼の上石である。S 18 はG面出土の凝灰岩製加工石材である。

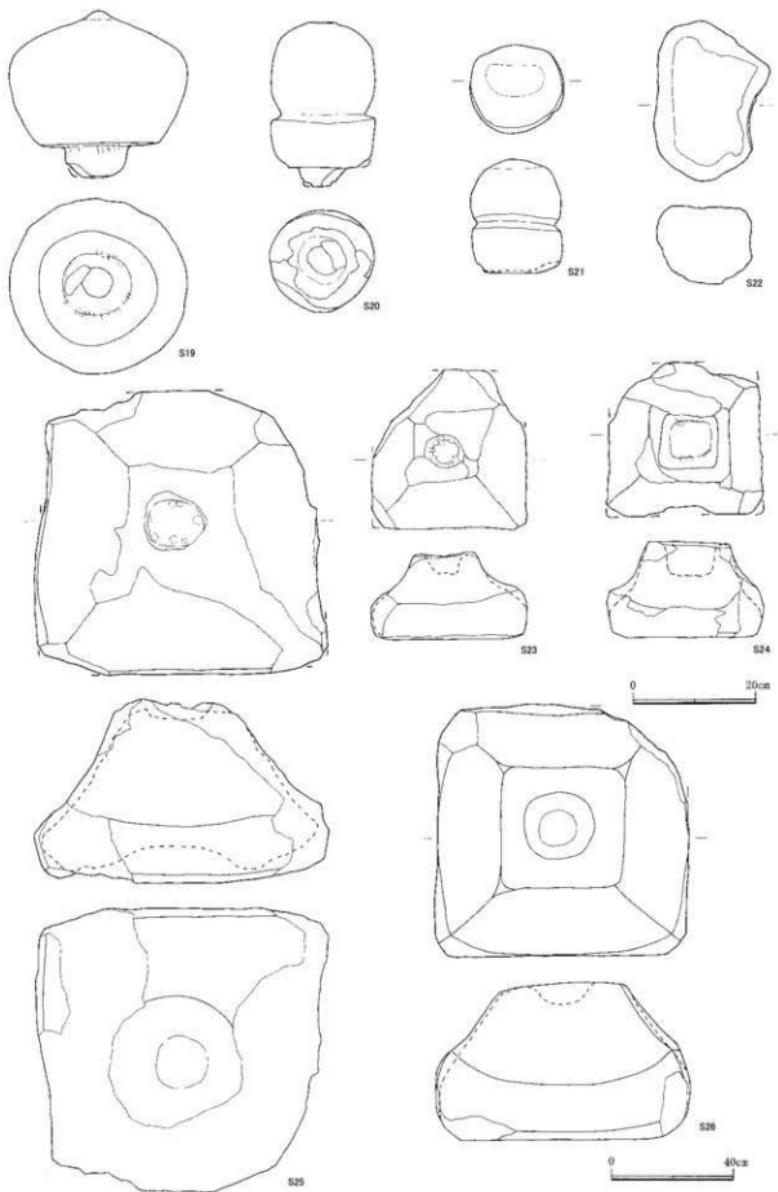
S 19 は凝灰岩製の五輪塔空輪で、下面に円形の突起があり加工痕が見える。S 20・21 は五輪塔空・風輪である。S 20 は下面に円形の突起が付き、石材は凝灰岩である。S 21 は豊島産凝灰岩である。S 22 は豊島産凝灰岩製の五輪塔風輪である。S 23～38 は五輪塔火輪である。S 23 は上面に円形で深い抉りがある。石材は豊島産凝灰岩。S 24 は上面に方形で深い抉りがある。石材は凝灰岩。S 25 は天霧系凝灰岩製の火輪で、一辺約 48cm を測る大型の火輪であり、上下面に抉りがある。S 26 は凝灰岩製の火輪で、一辺約 41cm を測る大型の火輪であり、上面に抉りがある。S 27～29 は上面に方形で深い抉りがあり、石材は豊島産凝灰岩である。S 30 は花崗岩製で、上下面に円形の抉りがあり加工痕が残る。S 31～33・36・37 は上面に円形で深い抉りがあり、石材は凝灰岩である。S 34・35 は上面に円形で深い抉りがあり、石材は豊島産凝灰岩である。S 38 は中央にやや丸い方形の孔が貫通し、石材は凝灰岩である。S 39～64 は五輪塔水輪である。S 39・40・42・44・49・54・55 は上下面が平坦である。石材は S 39・44・54・55 が凝灰岩、S 40 が火山系凝灰岩、S 49 が花崗岩、S 42 が豊島産凝灰岩である。S 41・43・47・48 は上面が僅かに窪む。石材は S 41・43・47 が凝灰岩、S 48 が豊島産凝灰岩である。S 45・46・50～53・57～61・64 は上下面が僅かに窪む。S 45・53・57 は上面に加工痕が残る。S 61 は上下面に加工痕が残る。S 64 は下面に加工痕が残る。石材は S 45・46・51・58・64 が豊島産凝灰岩、S 52・57・59～61 が凝灰岩、S 50・53 が花崗岩である。S 56・62・63 は上下面が大きく窪む。石材は S 56 が豊島産凝灰岩、S 62・63 は凝灰岩である。S 65～76・78～85 は五輪塔地輪である。S 65～67 は上面が平坦である。S 68 は上面が僅かに抉れる。S 69・70・73・75・79・84 は上面が平坦で下面が僅かに抉れる。S 69・84 は上面に五輪塔水輪の痕跡が残る。S 79 は下面に幅広い加工痕が残る。S 71 はE面の間詰め石(E-13-43)に使用されたものであり、上面にコンクリートが付着する。S 72・74・76・78・80～85 は上面が平坦で、下面が深く抉れる。S 72 は下面に加工痕が残る。S 76・78 は上面に五輪塔水輪の痕跡が残り、下面に幅広い加工痕が残る。S 80 は上面に五輪塔水輪の痕跡が残っており、下面に小さな加工痕が残る。S 81～83 は上面に五輪塔水輪の痕跡が残り、下面に方形の加工痕が残る。S 77 は水輪と一体化した地輪であり、平面形は不整な方形を呈し、下面が僅かに抉れる。S 86 は五輪塔火・水・地輪であり、E面の間詰め石(E-13-49)である。石材は S 65～70・72～76・78～85 が凝灰岩、S 71・77 は花崗岩、S 86 は豊島産凝灰岩である。S 87～90 は宝篋印塔である。S 87～89 は笠であり、S 87・88 は凝灰岩製で、段が摩滅し隅飾突起を欠損する。S 89 は花崗岩製で隅飾突起の一部を欠損するがほぼ完形である。S 90 は凝灰岩製の台石であり、反花座には「ハ」字状の沈線がある。下面には大きな加工痕が残る。S 91～100 は石臼の上臼である。S 92・95・97・98 は供給孔が残存する。S 93 は側面に横打込穴が残存する。S 94・99 は供給孔と横打込穴が残存する。S 96 は供給孔と横打込孔と芯棒受けが残存する。S 100 はほぼ完形の上石である。石材は S 3・99 が凝灰岩、S 92・93・95～97・100 が豊島産凝灰岩、S 94 は砂岩で、S 98 は花崗岩である。



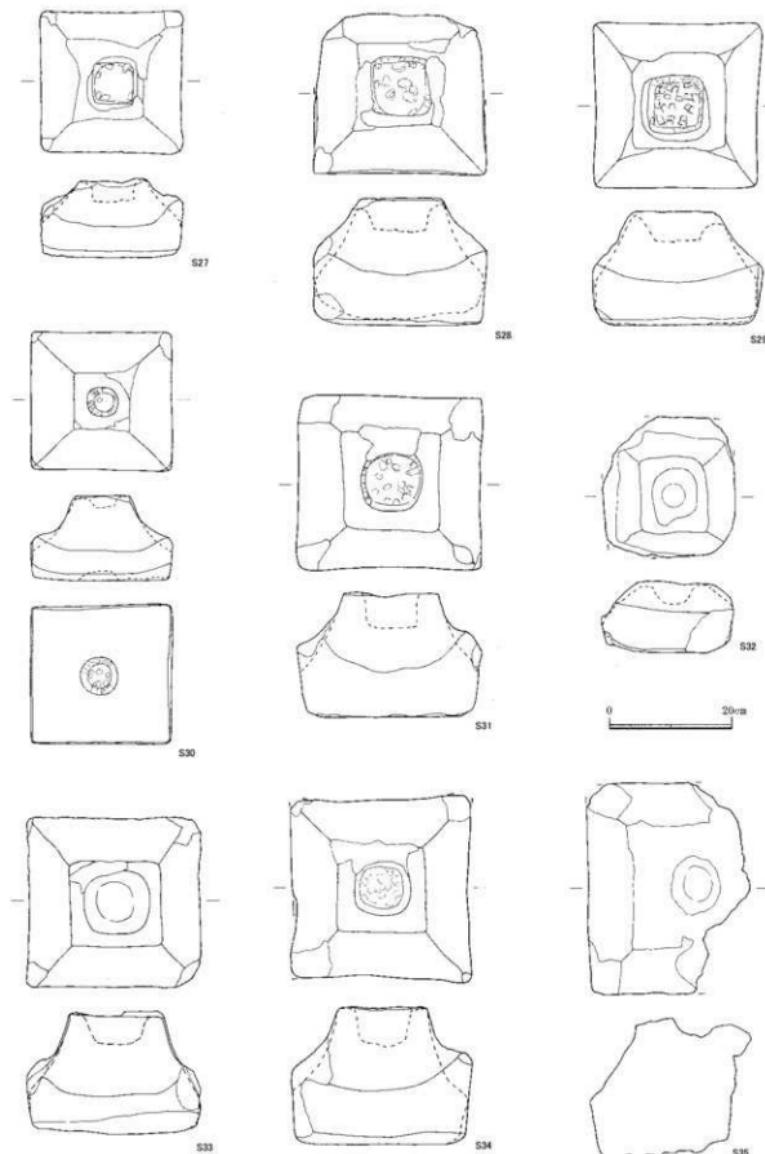
第5-48図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(2)



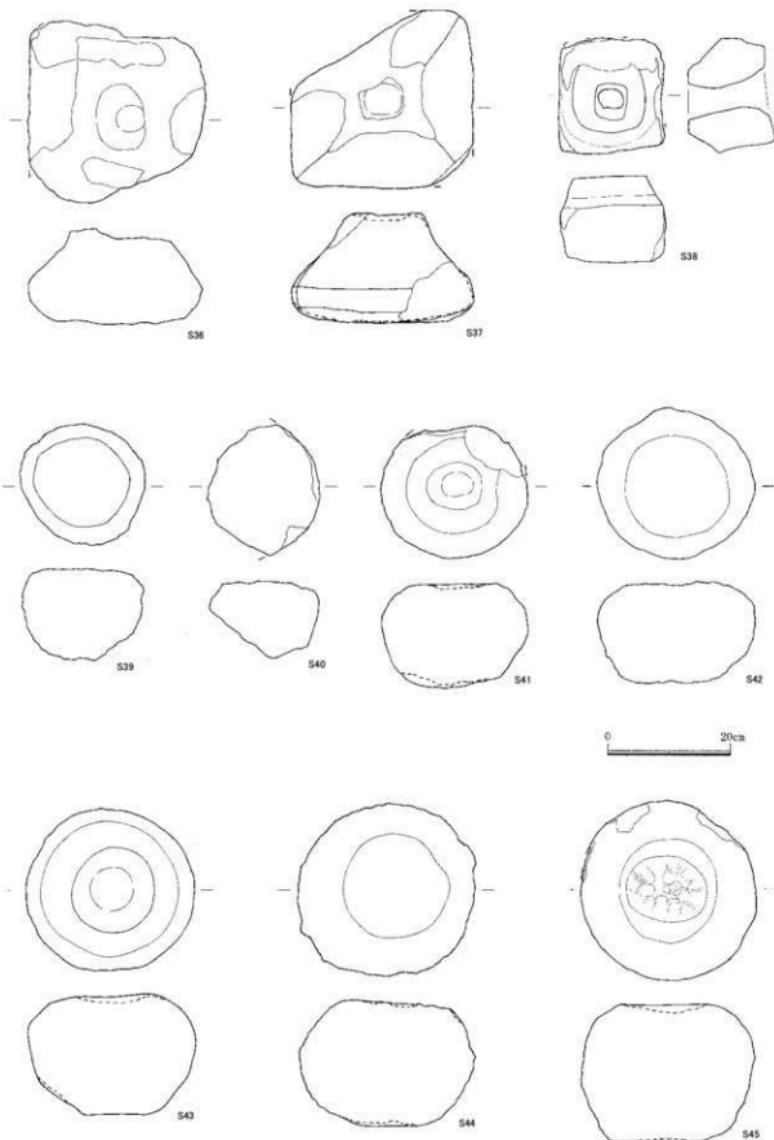
第5-49図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(3)



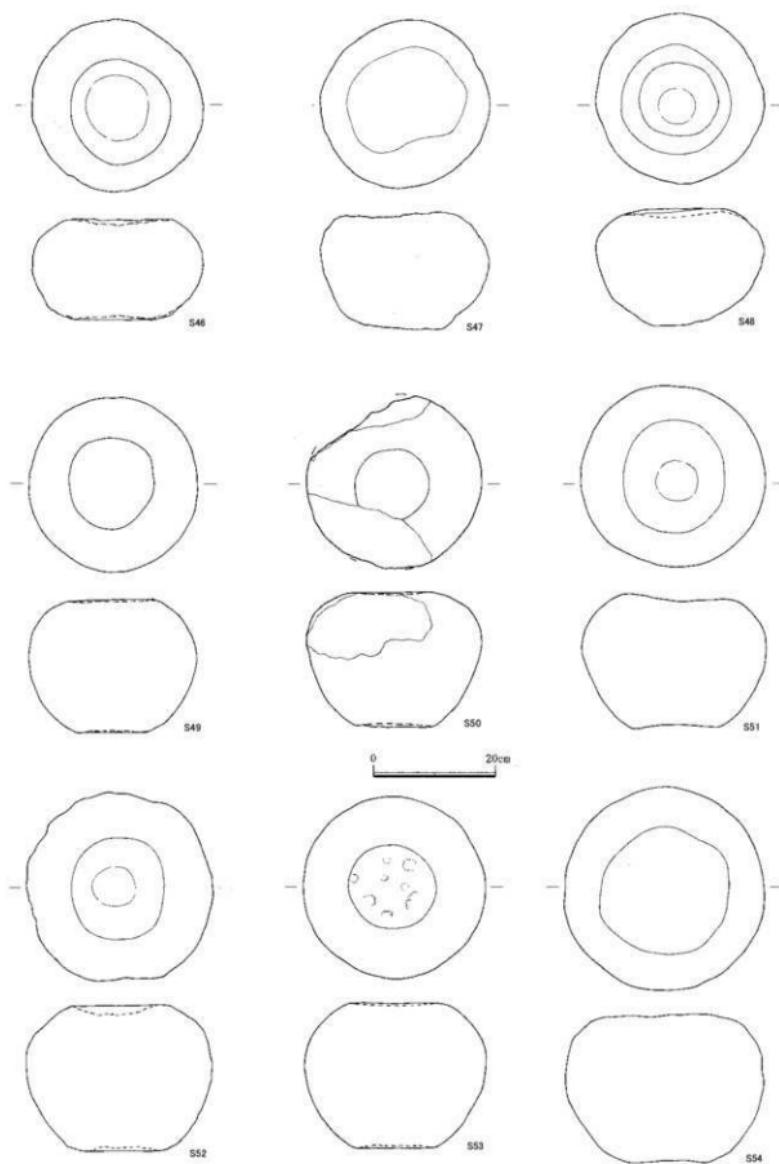
第5-50図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(4)



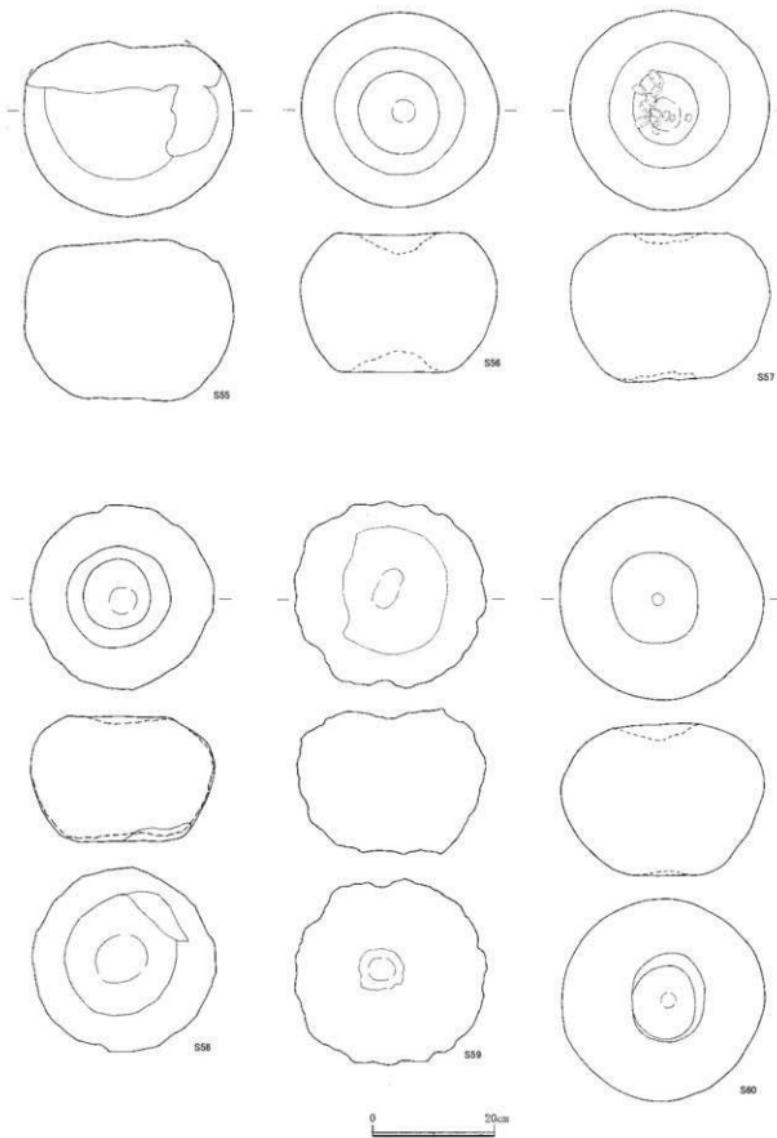
第5-51図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(5)



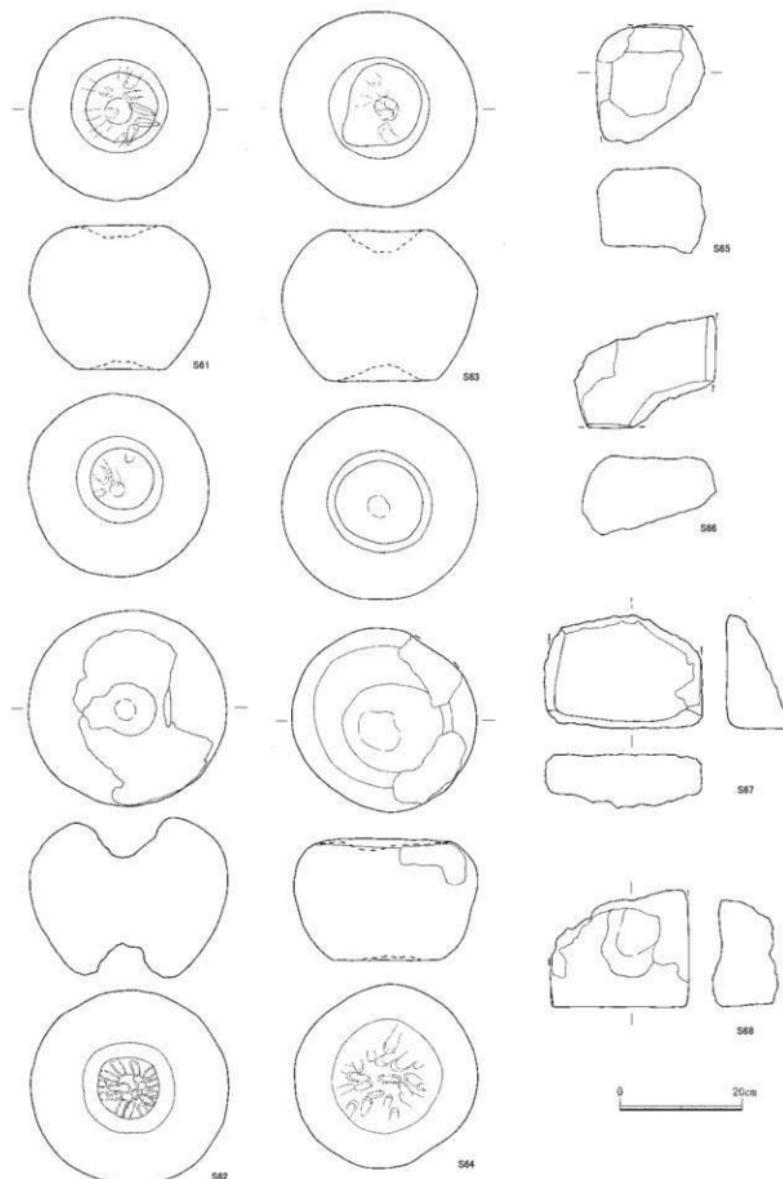
第5-52図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(6)



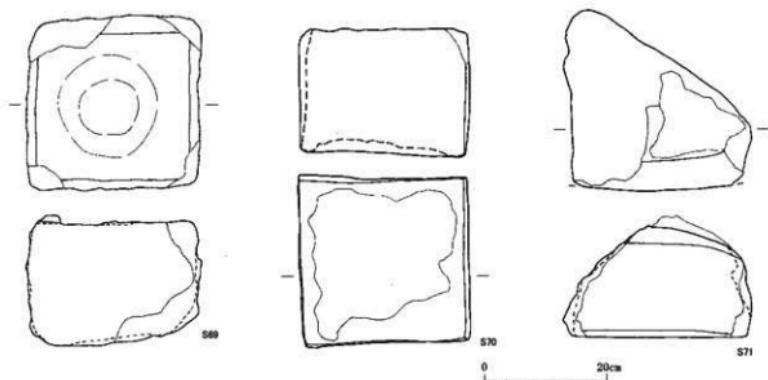
第5-53図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(7)



第5-54図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(8)



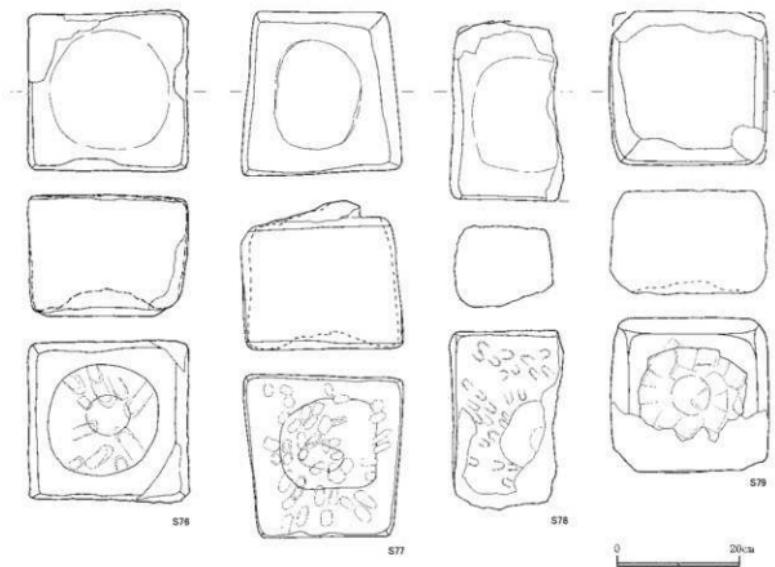
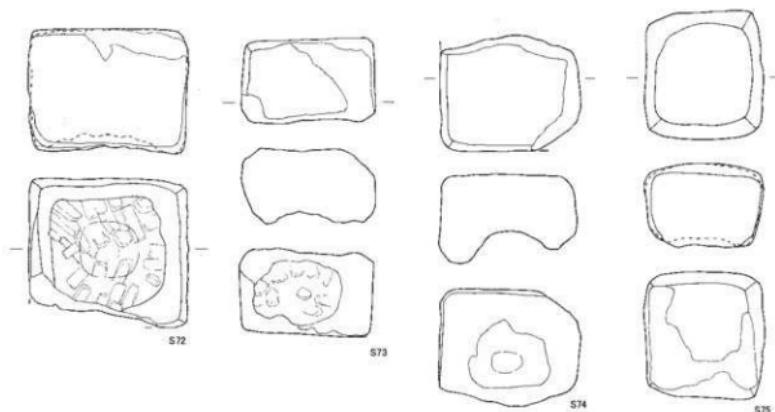
第5-55図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(9)



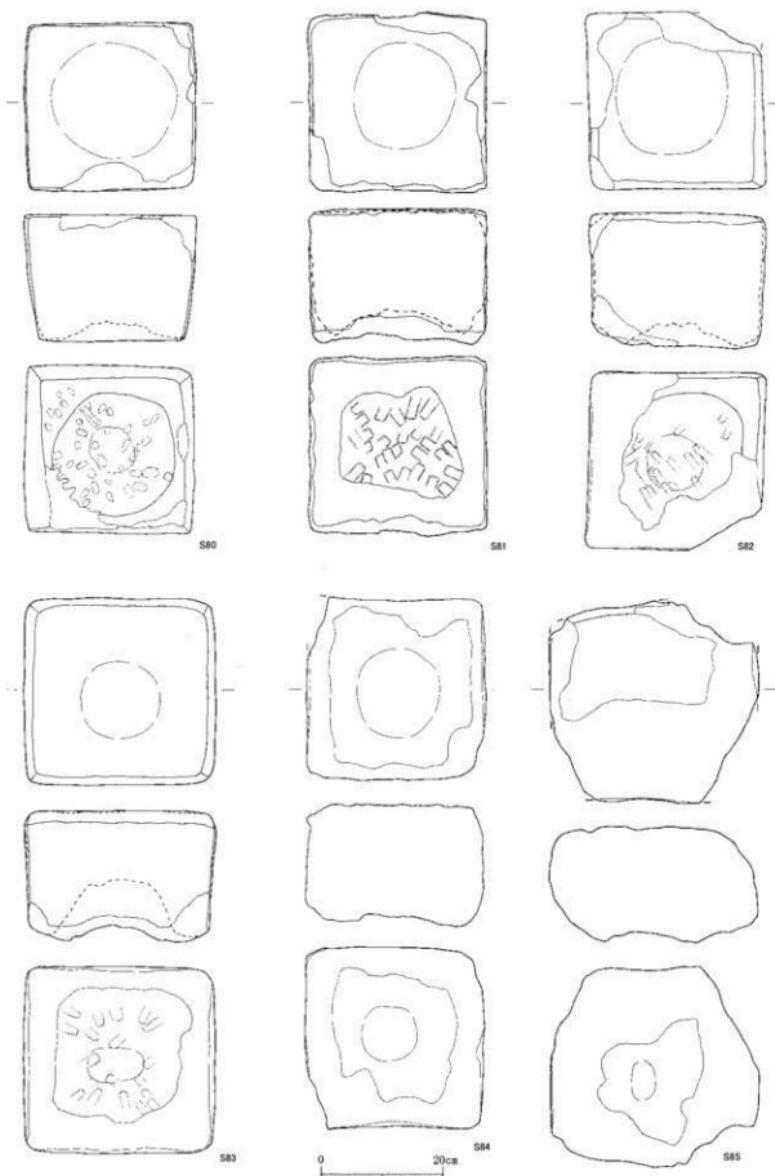
第5-56図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(10)

S 101～109は石臼の下臼である。S 101・105・106・108は芯棒孔が残存し、下面に加工痕が残る。S 102・103は芯棒孔が残存する。S 107は完形品であり、芯棒孔は方形で、下面には加工痕が残る。S 109は上面に8分割される溝が刻まれる。石材はS 101・104・105・106・107が豊島産凝灰岩、S 102・103・108は凝灰岩、S 109は花崗岩である。S 110・111は茶臼の下臼であり、中央に加工痕の残る芯棒孔があり、上面に8分割される溝が刻まれる。側面には斜め方向の加工痕がある。石材はS 110・111が砂岩である。S 112は凝灰岩製の基礎であり、直径54cm、高さ23cmを測り、中央に大きな孔があり加工痕が残る。S 113は豊島産凝灰岩産の加工石造物である。S 114は豊島産凝灰岩産の井戸枠である。S 115は凝灰岩製の手水鉢で、S 116は豊島産凝灰岩産の方形の手水鉢である。

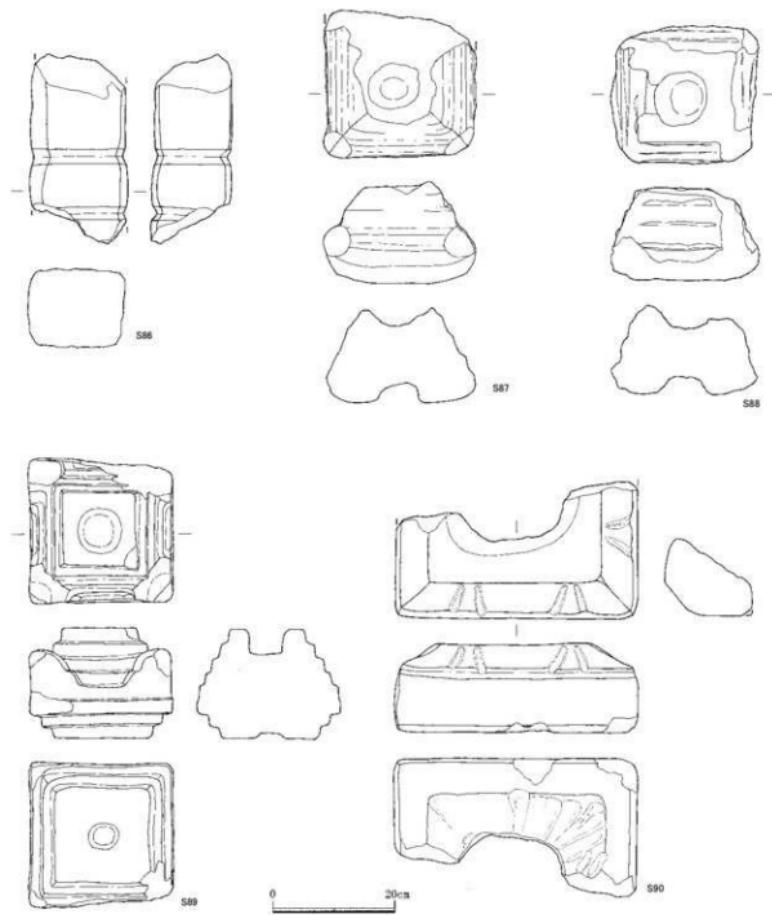
S 117～121は五輪塔空輪である。S 117は下面に僅かな突起を有し、S 118～120は下面に円形の大きな突起を有する。S 121は縦方向に帯状突起を4本有し、下面に短いが径の大きな突起がある。石材はS 117～119が凝灰岩、S 120・121が豊島産凝灰岩である。S 122～132は五輪塔空・風輪である。S 123・126・127・129は下面に僅かな突起を有し、S 129は空輪と風輪の境と下面に加工痕が残る。S 124はやや丸みのある下面で、S 125は下面が僅かに窪む。S 128は円形の大きな突起を有し、下面と突起に加工痕が残る。S 130～132は摩滅が著しいがやや規模の大きなものである。石材はS 122・123・131・132が凝灰岩、S 127・130が天霧系凝灰岩、S 124～126・128が豊島産凝灰岩、S 129が花崗岩である。S 133～136は五輪塔風輪である。S 133・134は上面に深い抉りがあり、S 135は高さが低く、上下面が僅かに抉れる。S 136は上面に大きな抉りがあり、下面に大きな突起がある。石材はS 133・134が凝灰岩、S 135は砂岩、S 136は豊島産凝灰岩である。S 137～169は五輪塔火輪である。S 138～142は上面に円形の大きな抉りがあり、やや小型の火輪である。S 143～147・149～152・155・158・160・161・162・163・164・165は上面に円形の大きな抉りがあり、大型の火輪である。S 153・



第5-57図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(11)



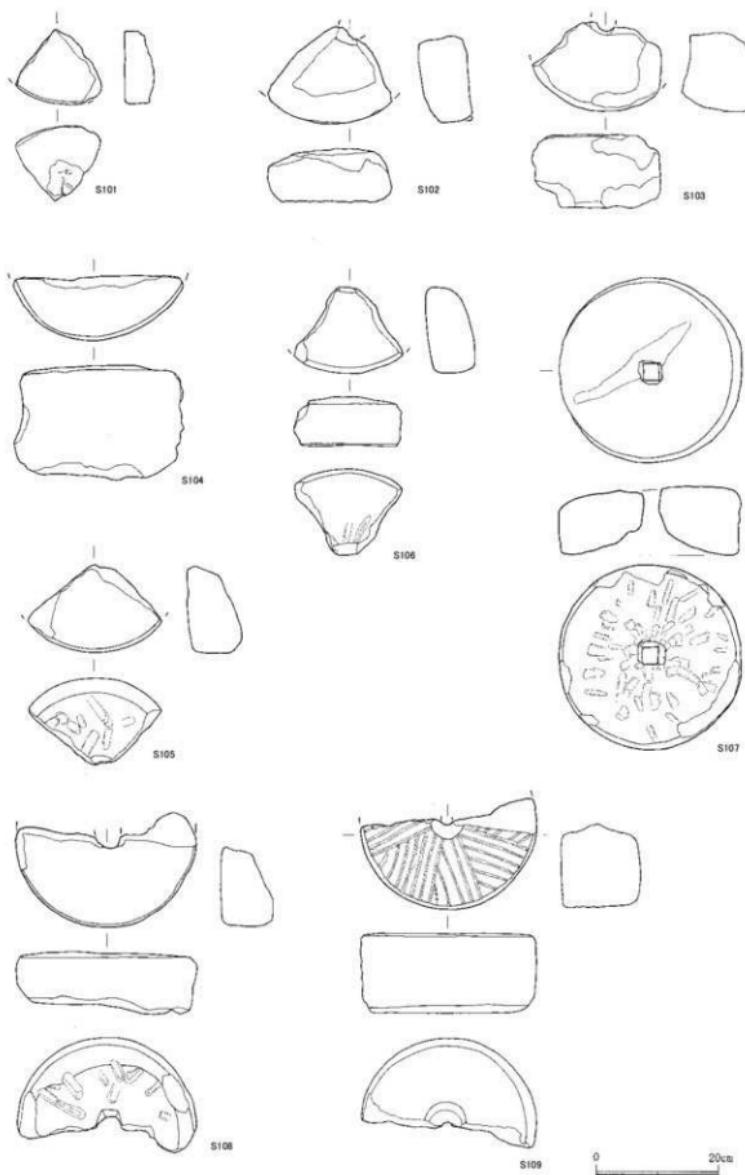
第5-58図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(12)



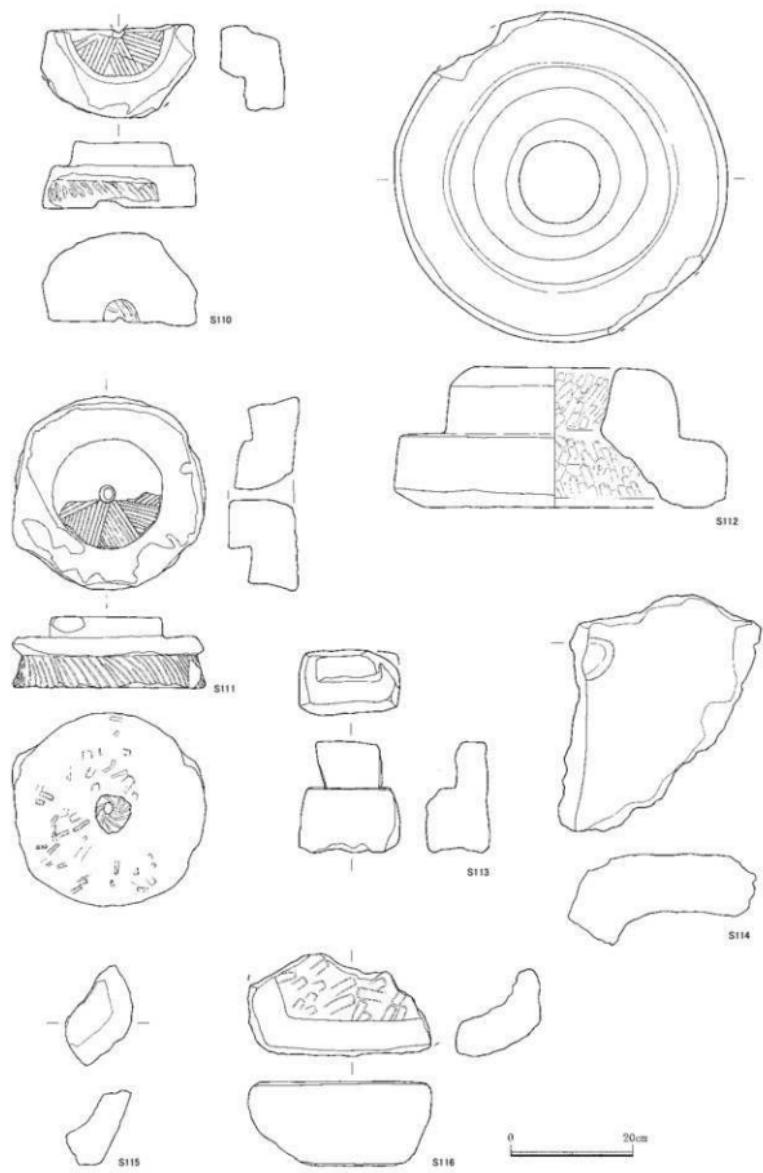
第5-59図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(13)



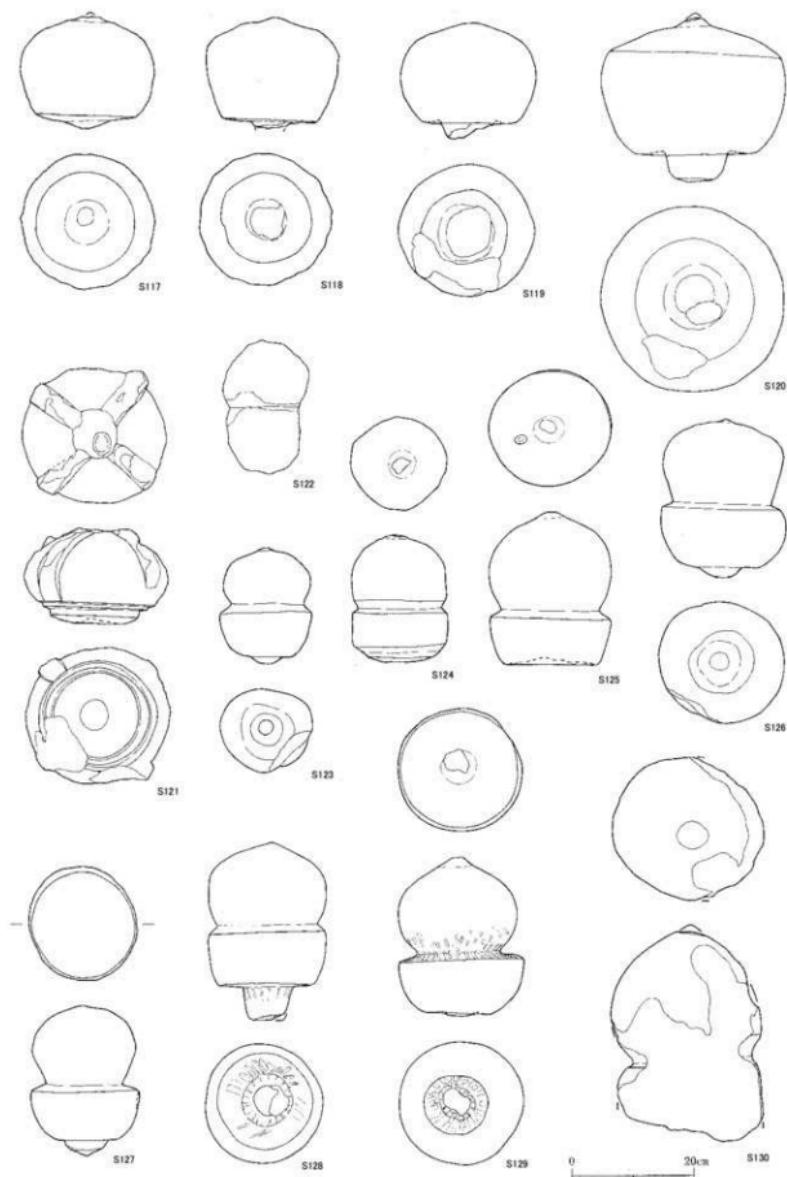
第5-60図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(14)



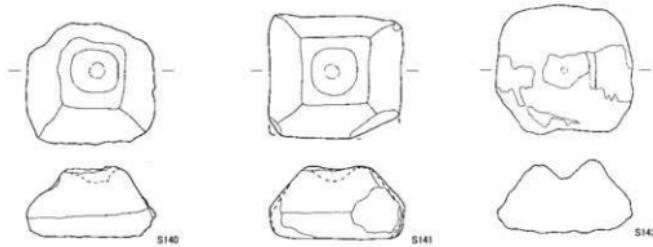
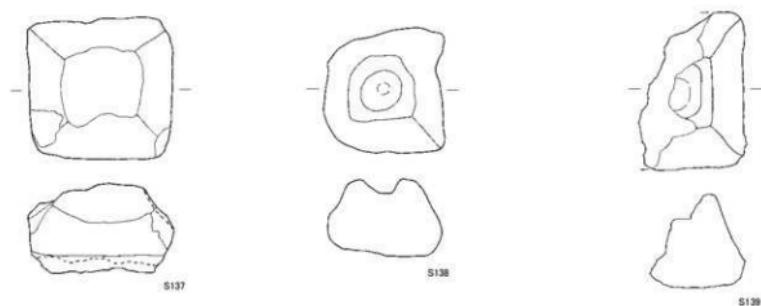
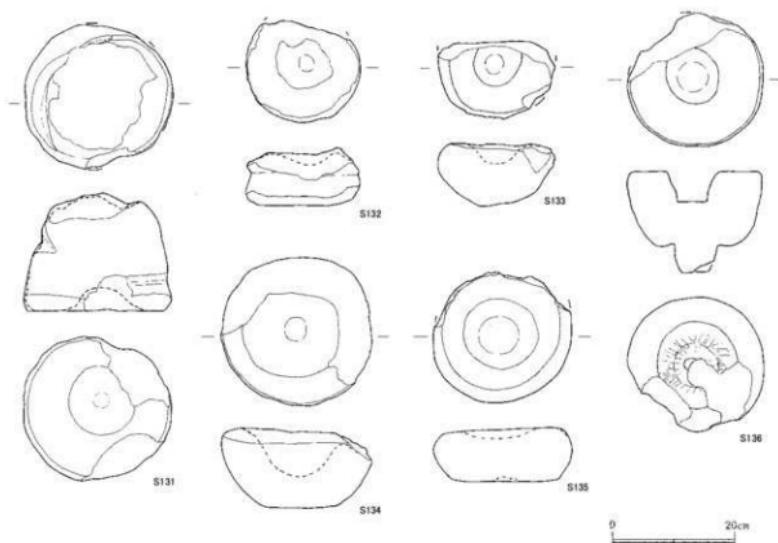
第5-61図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(15)



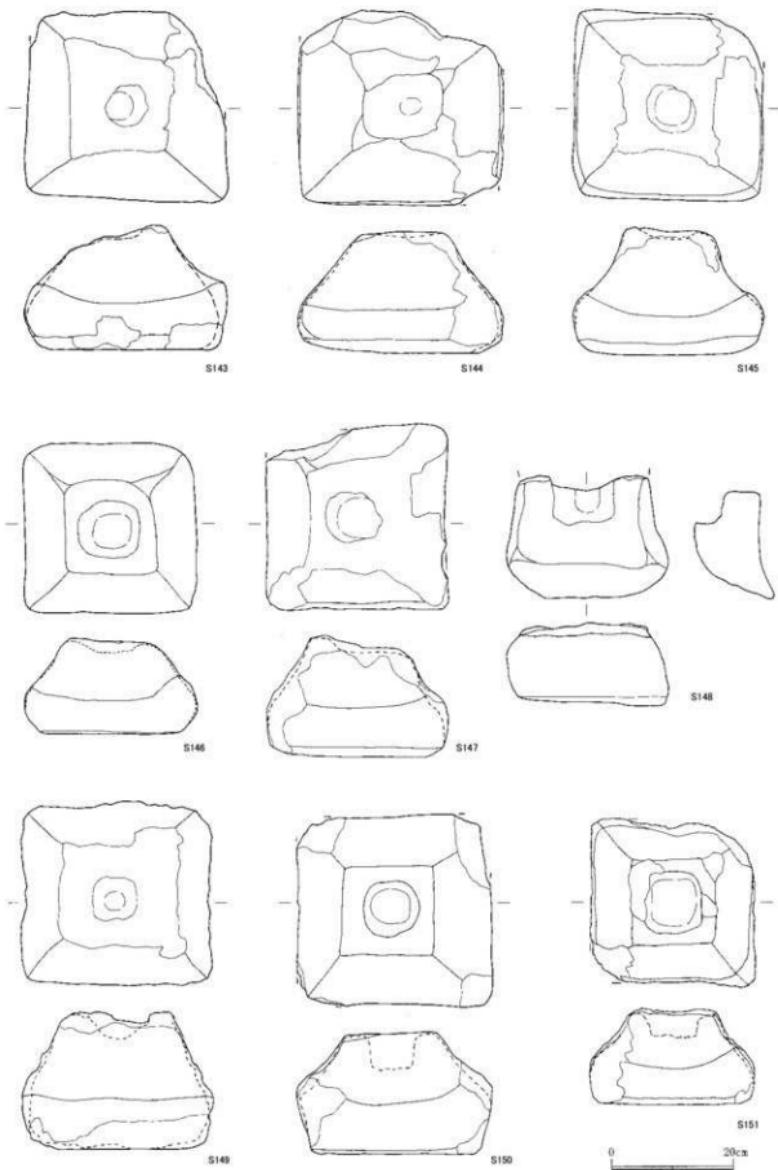
第5-62図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(16)



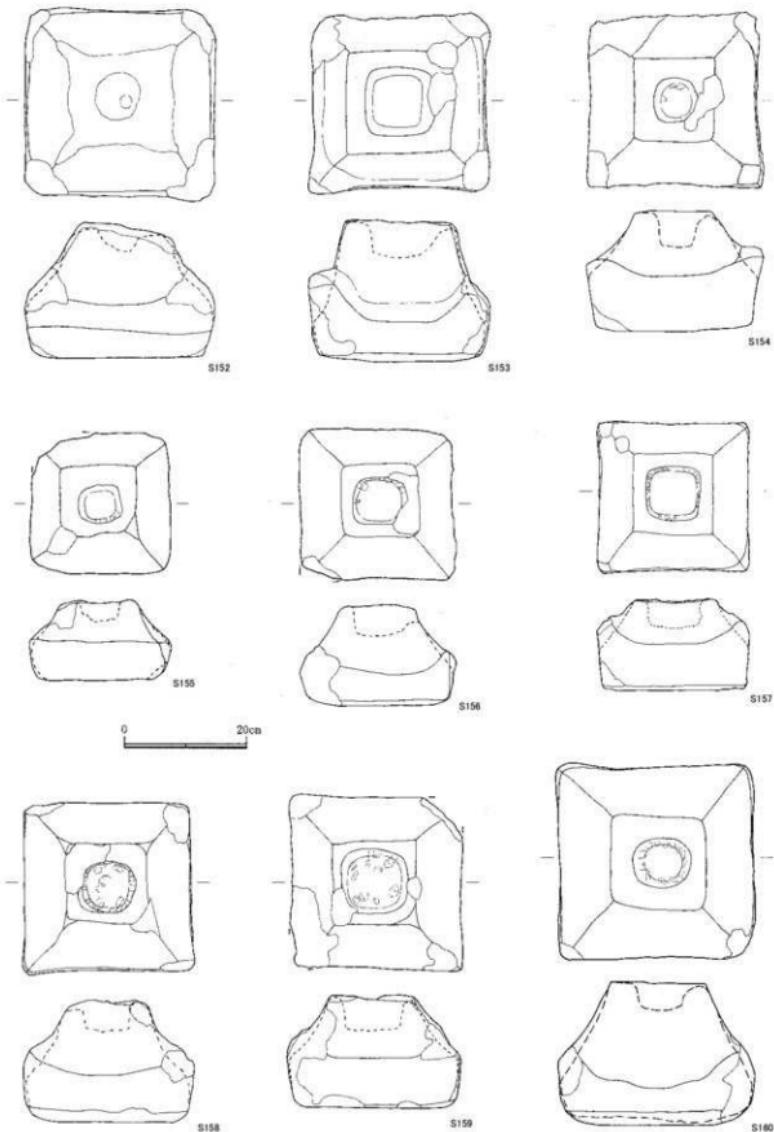
第5－63図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(17)



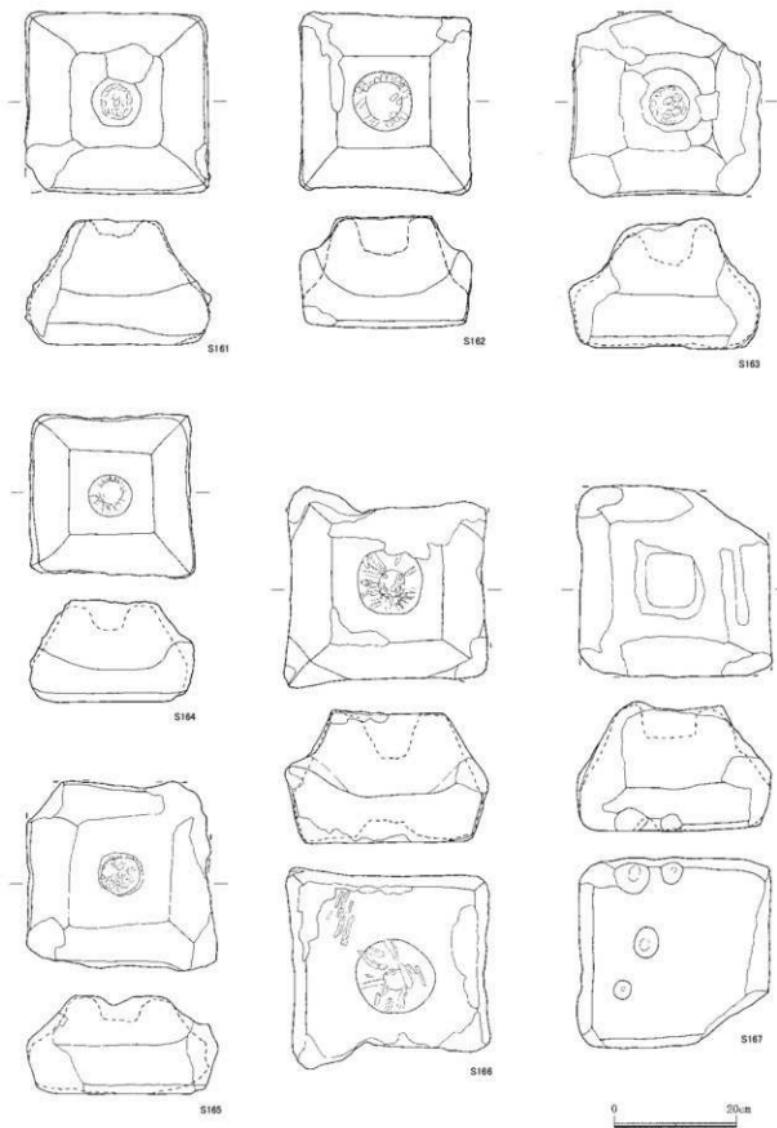
第5-64図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(18)



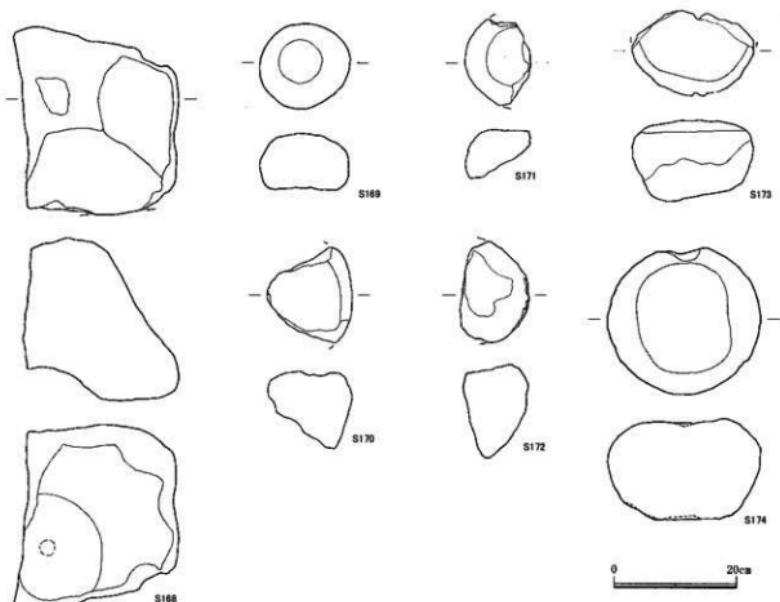
第5-65図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(19)



第5-66図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(20)

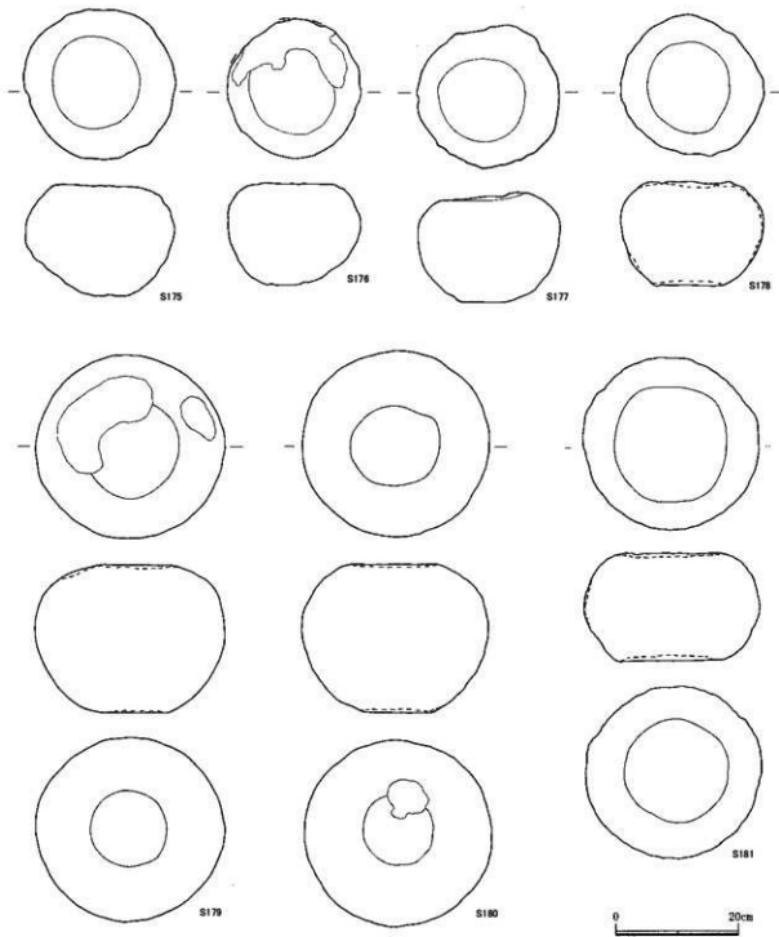


第5－67図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(21)



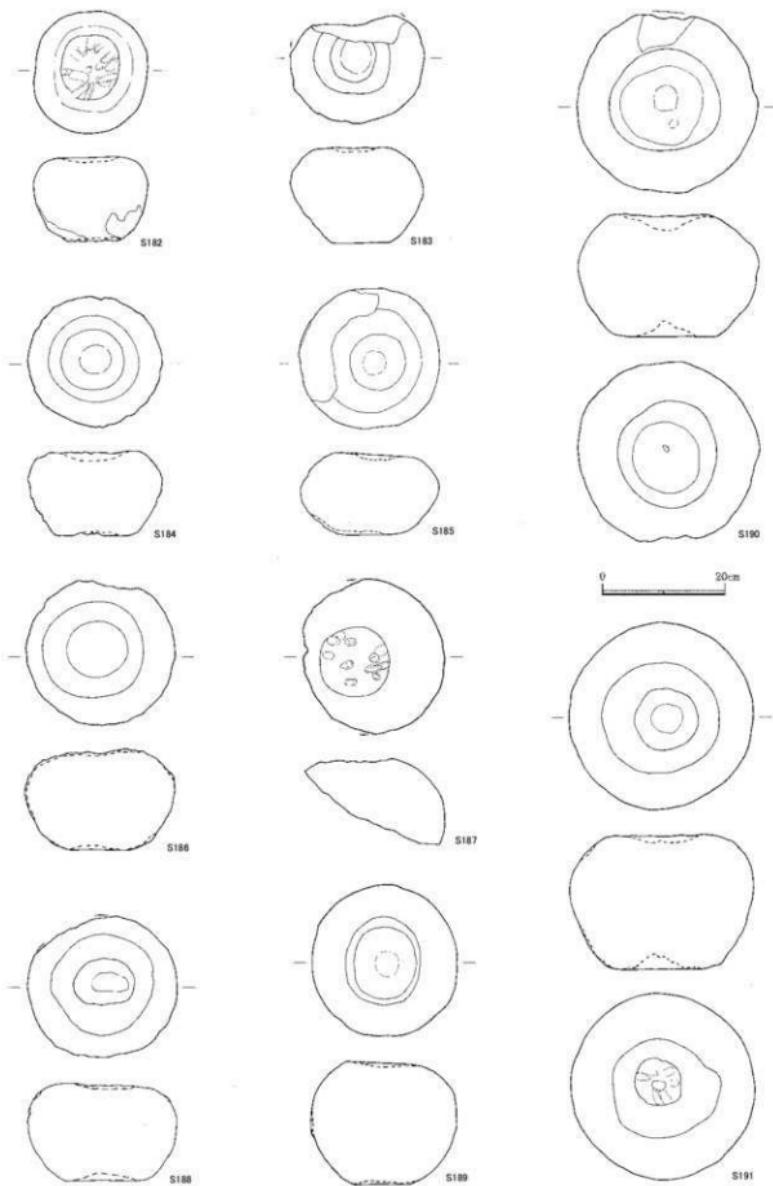
第5-68図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(22)

154は上面に方形の大きな抉りがあり、四隅が急激に湾曲する。S 156・157・159は上面に方形の大きな抉りがあり、大型の火輪である。S 166・168は上下面に円形の大きな抉りがあり、大型の火輪である。S 167は上面に円形の大きな抉りがあり、平坦な下面に小さな窪みがある。石材はS 137・139・147・150・159・162・163・165が豊島産凝灰岩、S 138・140～146・149・151～158・160・161・164・166・167が凝灰岩、S 168が天霧系凝灰岩、S 148が花崗岩である。S 169～207は五輪塔水輪である。S 169～173は小型の水輪である。S 174・178は中型の水輪であり、上下面が僅かに窪む。S 175～177は中型の水輪であり、上下面が平坦である。S 179・180・181・184・188・189・194・195・197～199・202は大型の水輪であり、上下面が僅かに窪む。S 182・183・185・186は中型の水輪であり、上面が僅かに窪む。S 190・203・204～207は大型の水輪であり、上下面が深く窪む。S 191・193は大型の水輪であり、上面が僅かに窪み、下面が深く窪む。S 196は大型の水輪であり、上面が深く窪み、下面が僅かに窪む。S 200は大型の水輪であり、上面が僅かに窪む。S 201は大型の水輪であり、上面が深く窪む。石材はS 169・173～177・179・180・182～186・188～190・192・194・195・197～199・202・203・207が凝灰岩、S 170・172・201が天霧系凝灰岩、S 200が火山系凝灰岩、S 178・181・191・193・196・204～206が豊島産凝灰岩、S 171・187が花崗岩である。S 208～244は五輪塔地輪である。S 208・209は小型の地輪であり、上下面が平坦である。S 210・211・213・214

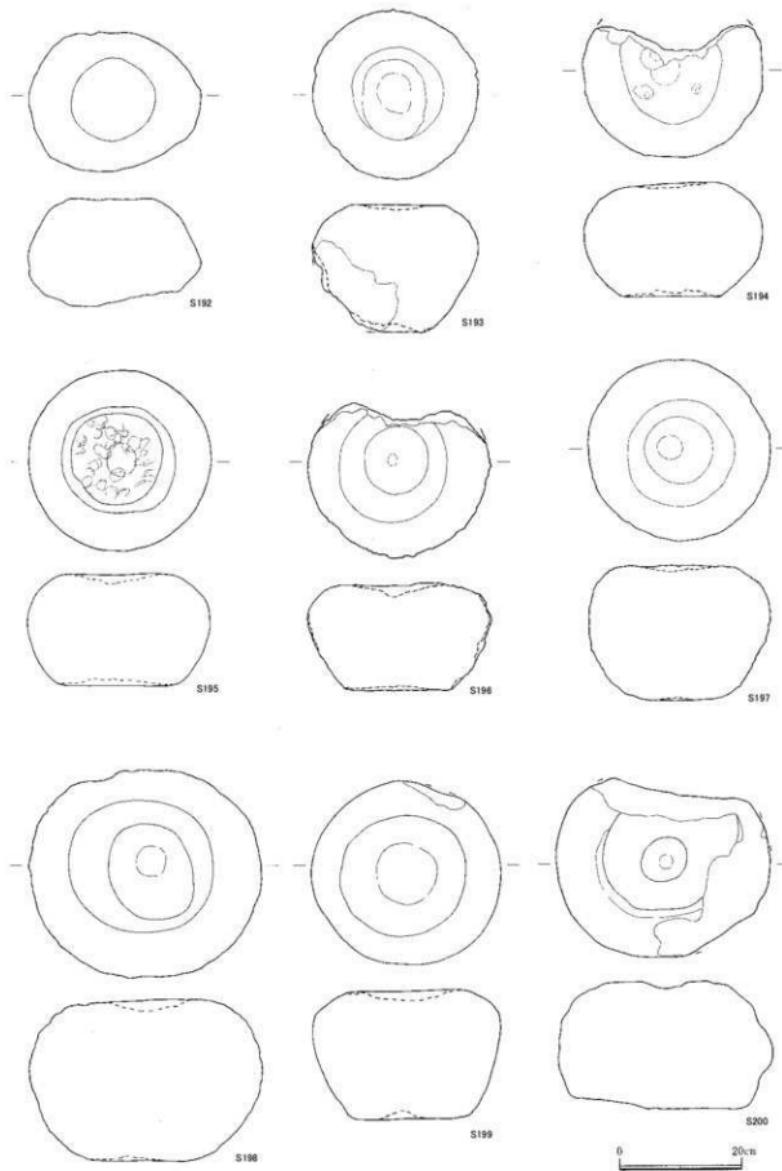


第5-69図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(23)

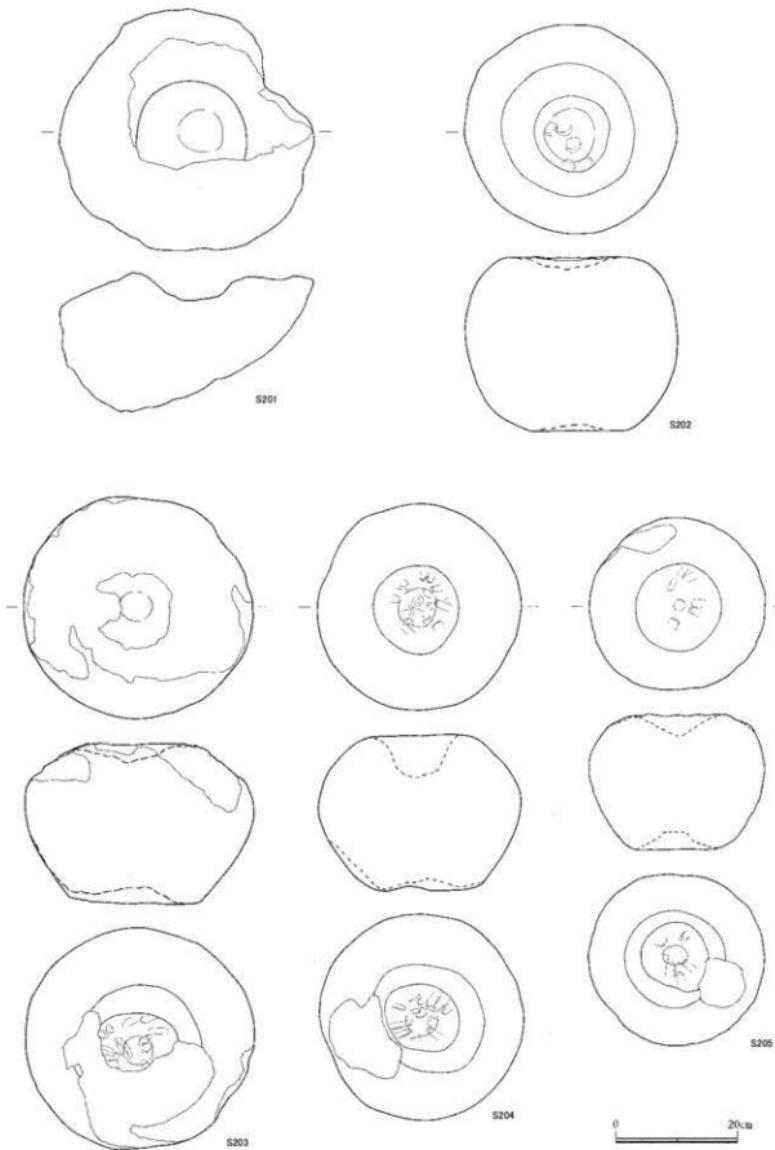
は中型の地輪であり、上下面が平坦である。S 212は中型の地輪であり、上面が深く窪む。S 215・216・219・220は大型の地輪であり、上下面が平坦である。S 217・221・226は大型の地輪であり、上面が平坦で下面が僅かに窪む。S 218は大型の地輪であり、上下面が僅かに窪む。S 223～225は中型の地輪であり、上面が平坦で下面が大きく窪む。S 227・228・229・231～235・238・239・240・241・243は大型の地輪であり、上面が平坦で下面が大きく窪む。S 230は大型の地輪であり、上面が平坦で下面が僅かに窪み、上面に水輪の痕跡が残る。S 236・237



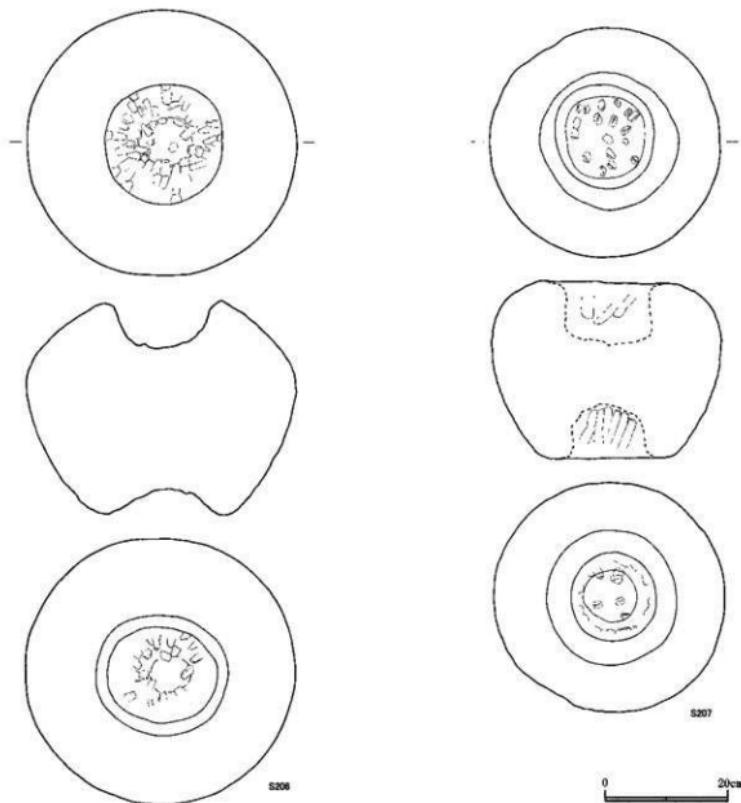
第5-70図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(24)



第5-71図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(25)

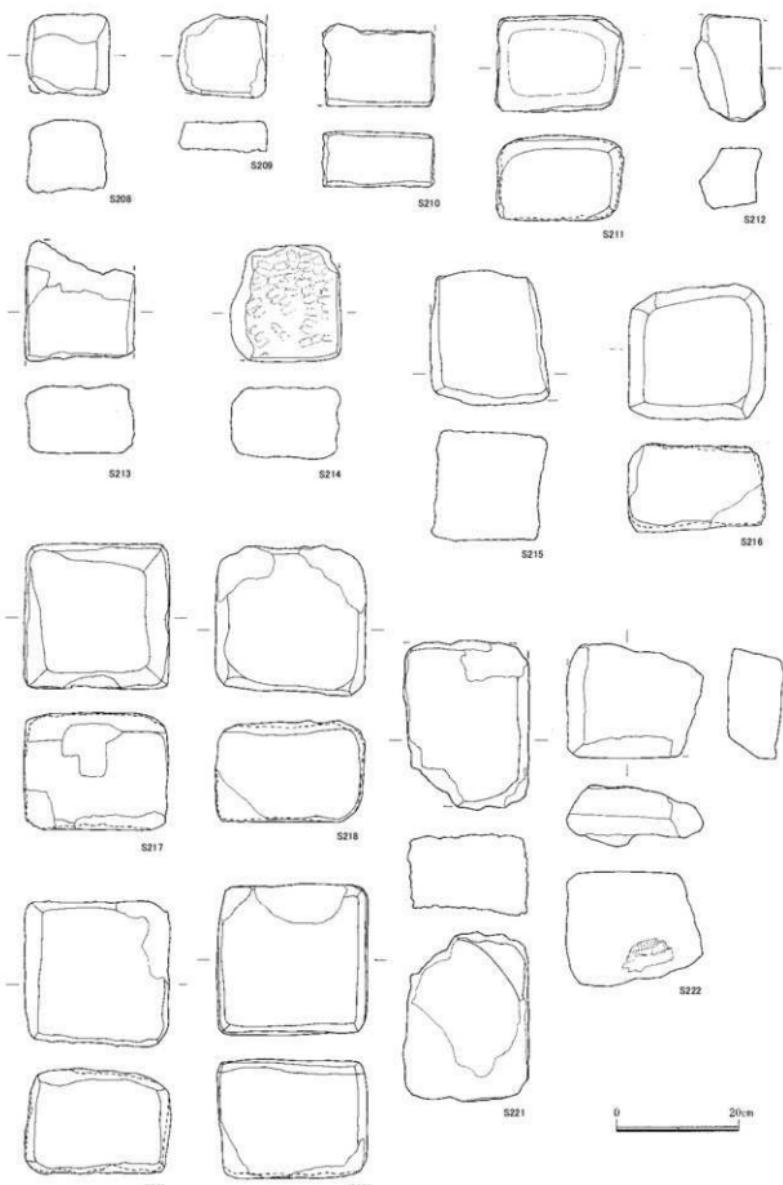


第5-72図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(26)

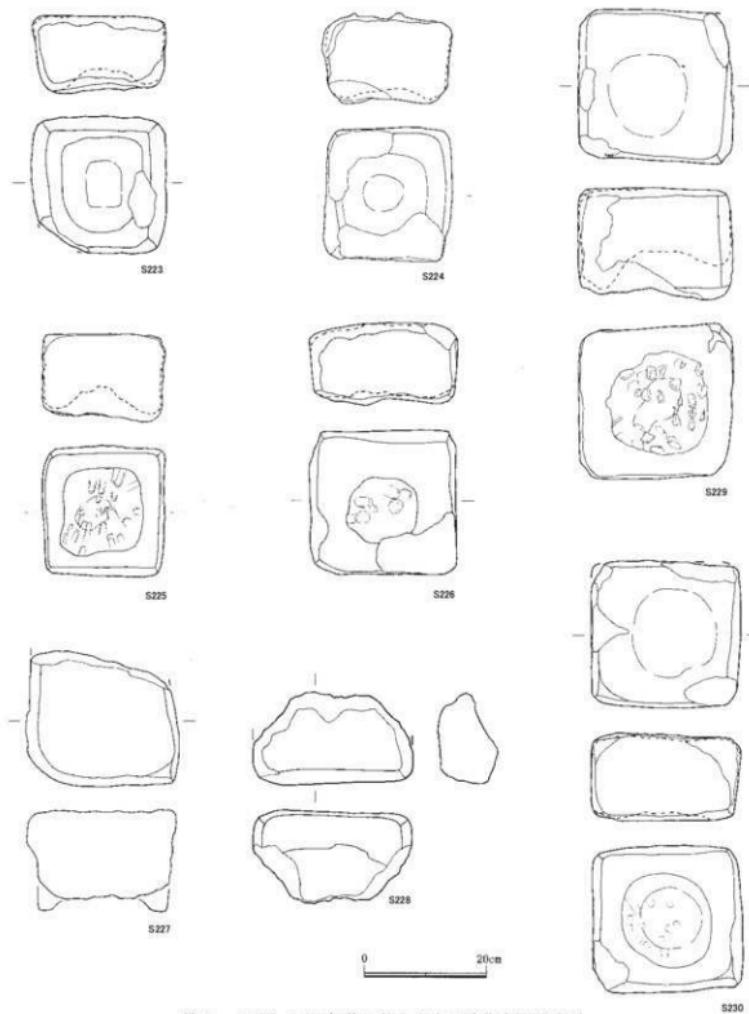


第5-73図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(27)

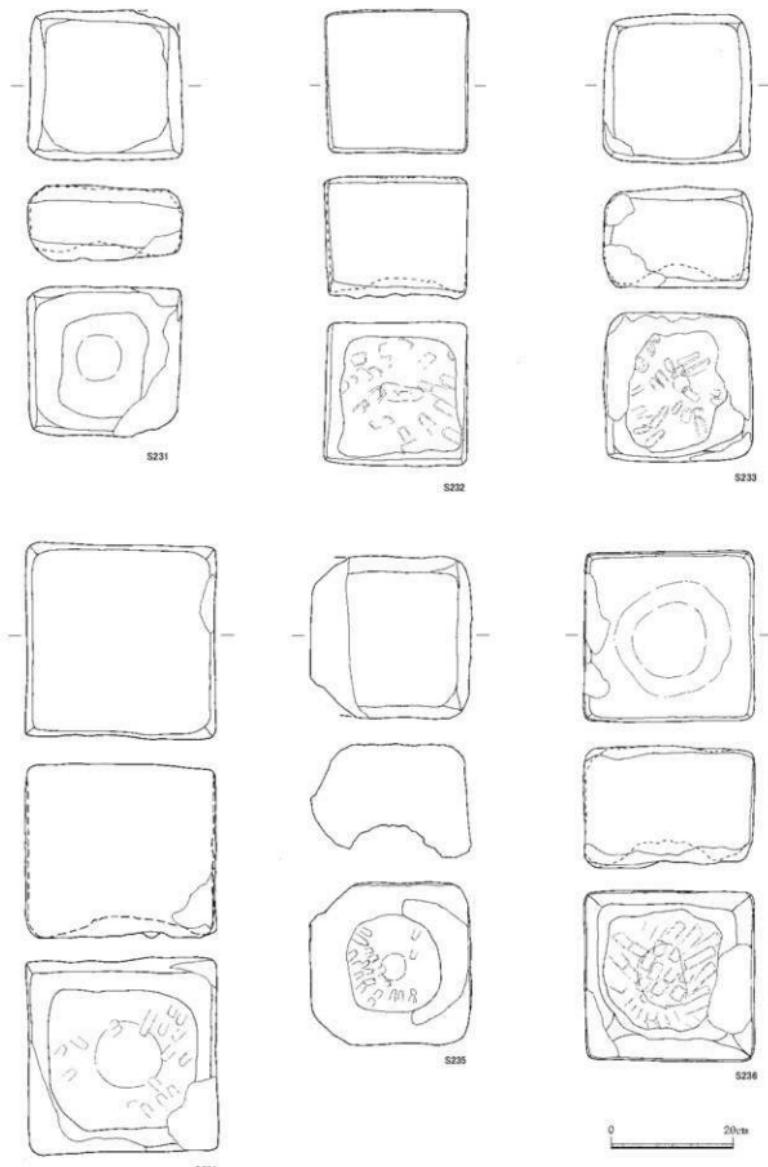
は大型の地輪であり、上面が平坦で下面が大きく窪み、上面に水輪の痕跡が残る。S 242・244は大型の地輪であり、上下面が大きく窪む。石材はS 209・214・217・219・220・223～228・230・231・233・234・236～238・240・242～244が凝灰岩、S 212・229・239が天霧系凝灰岩、S 222が火山系凝灰岩、S 208・210・211・213・216・218・221・232・235・241が豊島産凝灰岩、S 215が花崗岩である。S 245は五輪塔火・水輪であり、火輪の上部を欠損し、下面が僅かに窪む。火輪と水輪のそれぞれ4面に梵字が刻印される。石材は凝灰岩である。S 246は五輪塔火・水輪であり、火輪の上部を欠損し、下面が僅かに窪む。石材は凝灰岩である。S 247・248は五輪塔・水輪であり、水輪の上部を欠損し、下面が僅かに窪む。石材は豊島産凝灰岩である。S 249・250は五輪塔火輪・水・地である。石材はS 249が豊島産凝灰岩、S 250が凝灰岩である。S 251は宝篋印塔の塔身であり、上下面に円形の突起を有し、4方向の側面に梵字が刻印さ



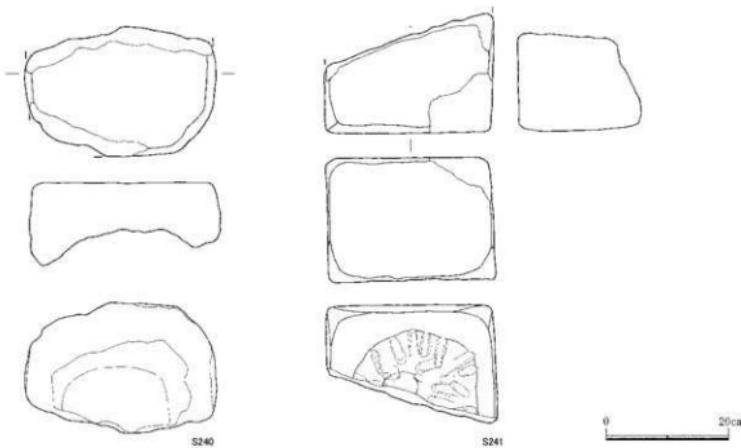
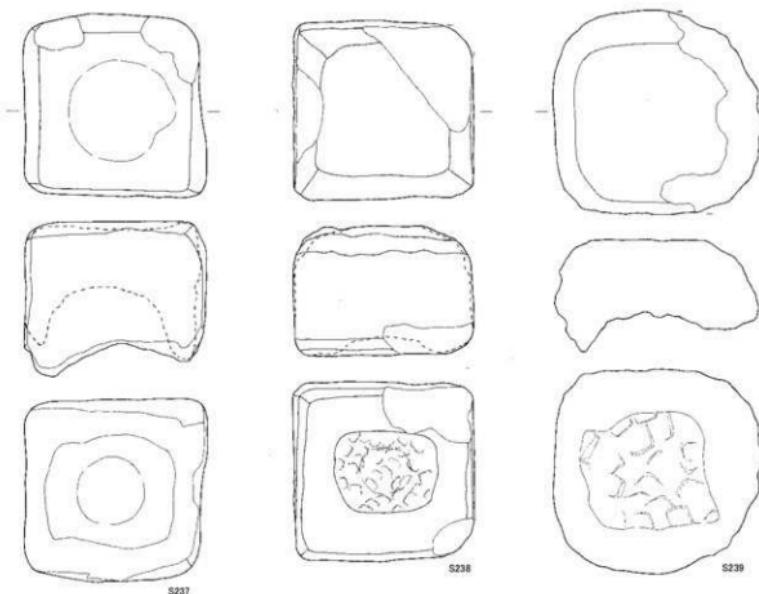
第5-74図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(28)



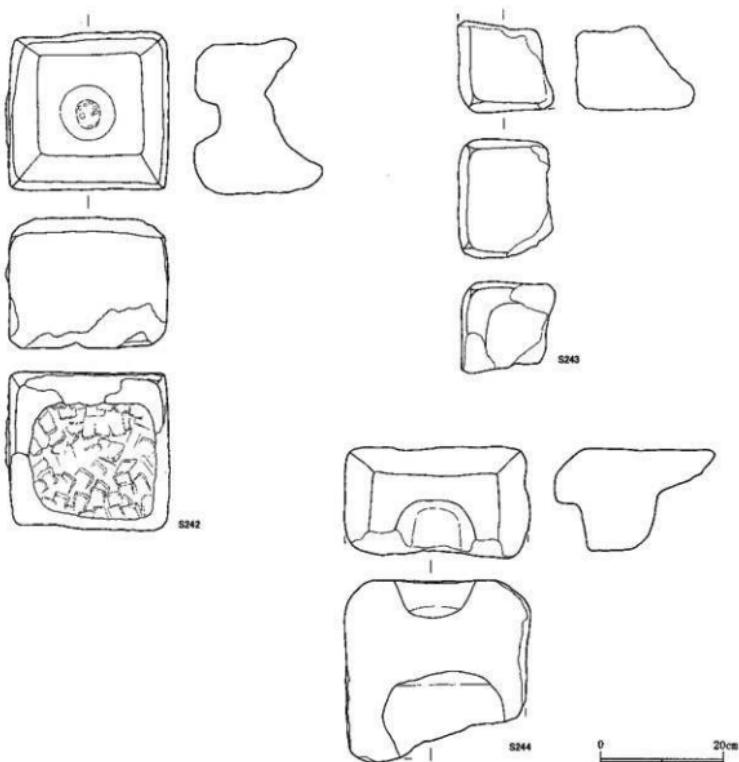
第5-75図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(29)



第5-76図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(30)

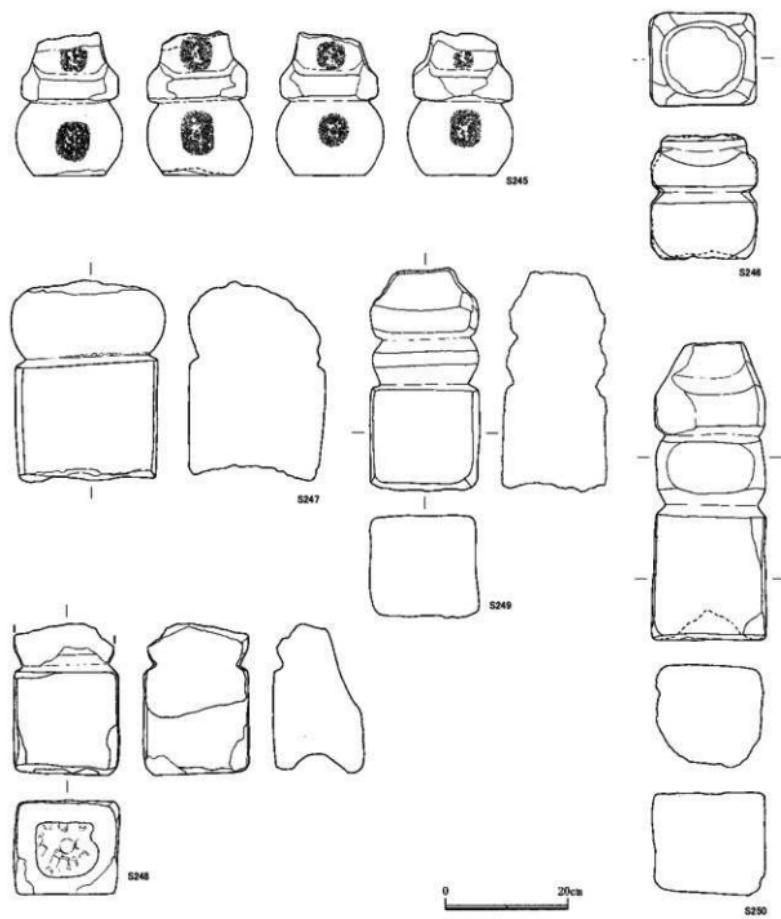


第5-77図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(31)



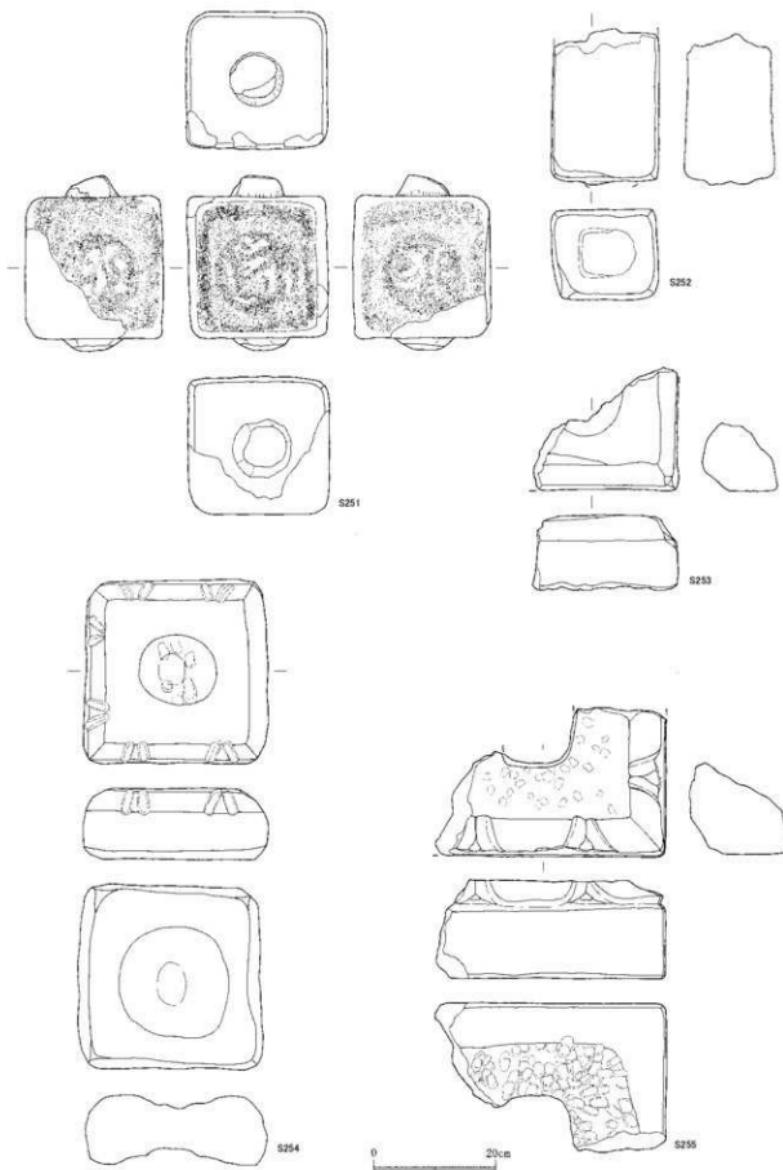
第5-78図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(32)

れるが、1面は遺存状態が悪い。石材は、凝灰岩である。S 252は宝篋印塔の塔身であり、上下部を欠損するが上下面に円形の突起を有すると思われる。石材は豊島産凝灰岩である。S 253～257は宝篋印塔の台石である。S 253は上下面が大きく窪む。S 254は上下面が大きく窪み、反花座は「ハ」字状の沈線がある。石材は豊島産凝灰岩である。S 255は上面が平坦で、下面に加工痕の残る大きな抉りがあり、中央部に大きな孔が開く。反花座は丁寧な作りである。石材は豊島産凝灰岩である。S 256は上下面が大きく窪み、側面には僅かな高さの段と円形の高まりがある。塔身とも考えられる。石材は凝灰岩である。S 257は上下面が大きく加工されて中央に大きな孔が開く。石材は花崗岩である。S 258は方形鉢であり、側面に垂直と横と斜め方向の加工が施される。底面には円形の低い脚が付く。石材は凝灰岩である。S 259は石幢あるいは無縫塔の基礎であり、六角形の平面を呈し、上面中央に円形の深い抉りがある。石材は豊島産凝灰岩である。S 260は凝灰岩製の墓標の屋根である。S 261は豊島産凝灰岩製の墓標である。S 262は仏像類の墓標であり、地蔵菩薩の右側に「□九年十月□」と刻まれ、左側の文字は解読できない。

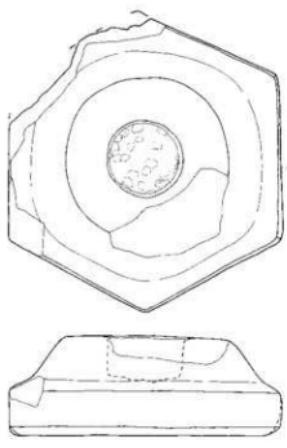
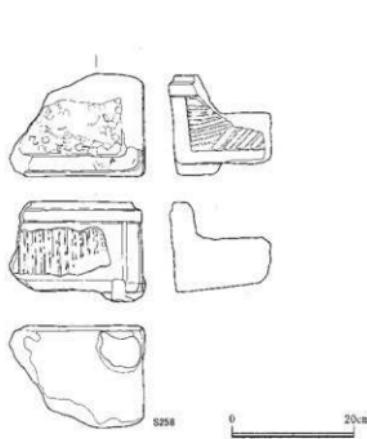
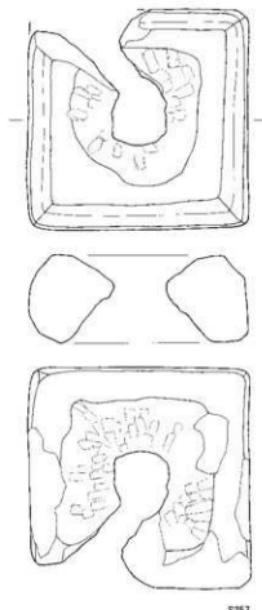
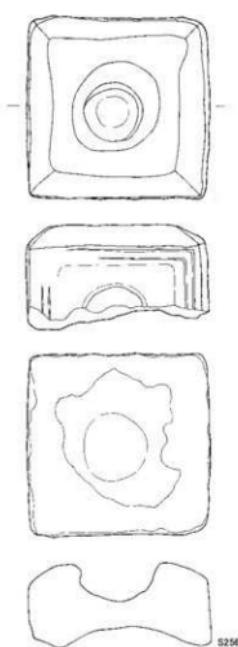


第5-79図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(33)

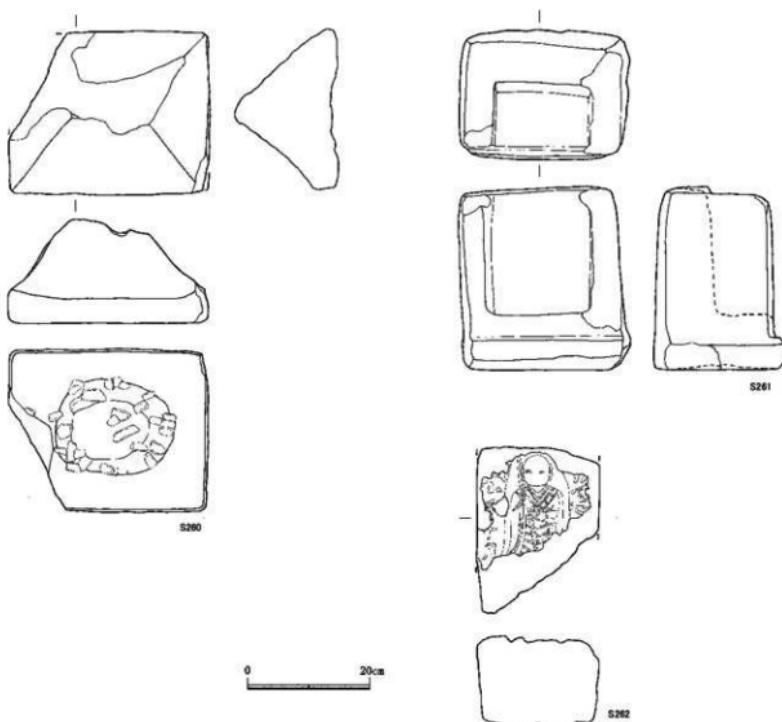
石材は天霧系凝灰岩である。S 263～285は石臼の上臼である。S 263・266・267・274・279は横打込穴が残存する。S 269・271・272・276・277・280～282は供給孔と芯棒受けと横打込穴が残存する。S 270は供給孔が残存する。S 273は供給孔と芯棒受けが残存する。S 275は供給孔と横打込穴が残存する。S 278は芯棒受けと横打込穴が残存する。S 283は供給孔と芯棒受けと横打込穴が残存し、上面と側面に細かな加工痕が見られる。下面には分割される溝とものくぼりがある。S 284は供給孔が残存し、下面には分割される溝がある。石材はS 263～274・278～280・282が豊島産凝灰岩、S 275・277・281が凝灰岩、S 276・284が花崗岩、S 283が砂岩



第5-80図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(34)



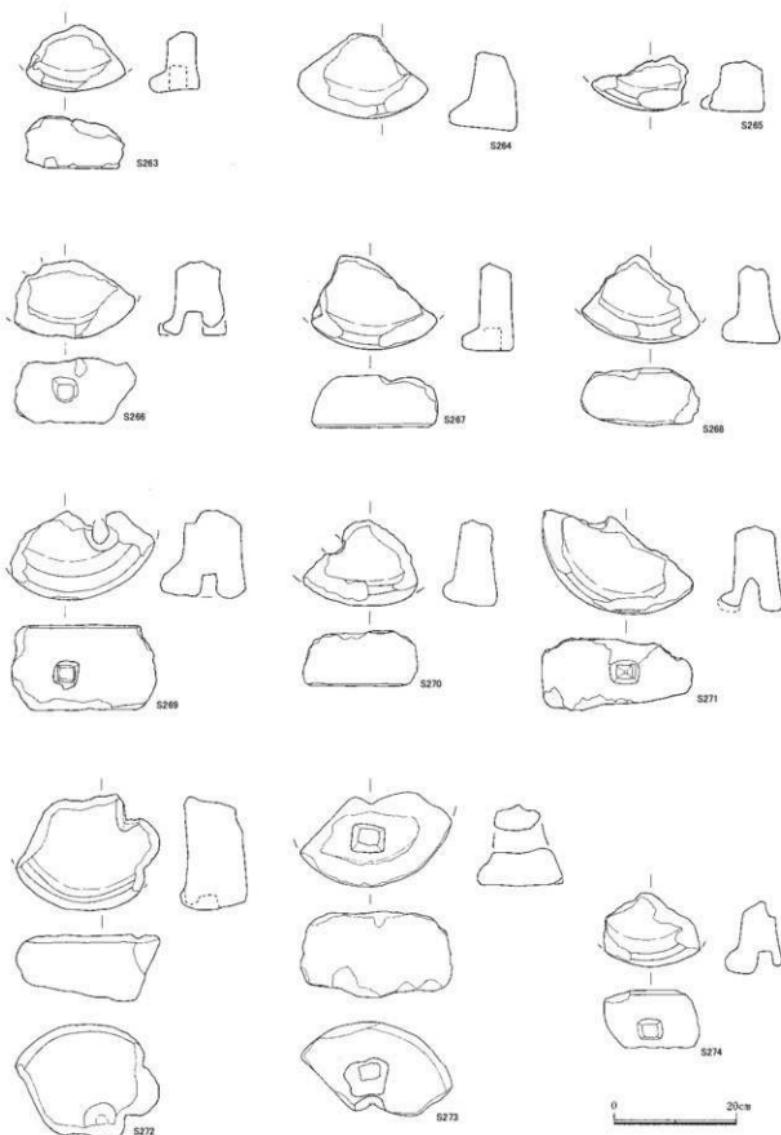
第5-81図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(35)



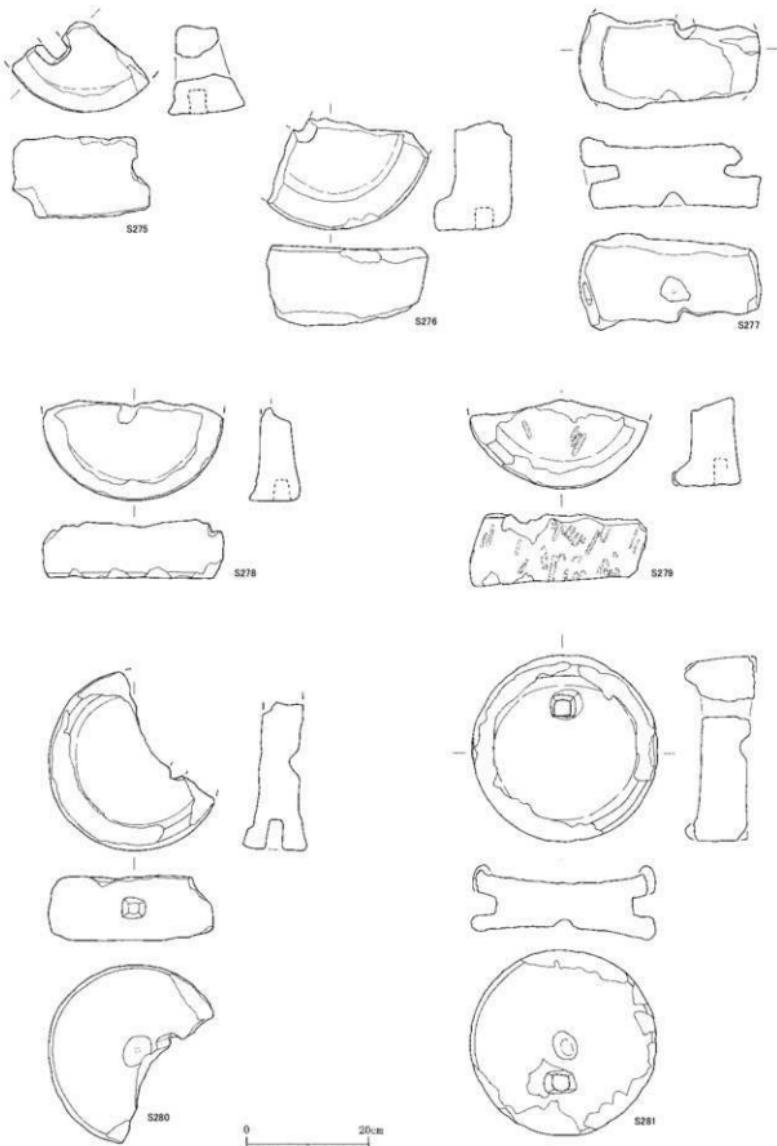
第5-82図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(36)

である。S 285～294は石臼の下臼である。S 285～287・291・292・293は芯棒孔が残存する。S 288は完形品であり、上面の芯棒孔は方形である。S 289・290は下面が大きく抉られる。S 294は芯棒孔が残存し、上面に分割される溝がある。石材はS 285～287・279・289～292が豊島産凝灰岩、S 288・293は凝灰岩、S 294は砂岩である。S 295は花崗岩製の茶臼の下臼であり、中央に芯棒孔がある。上面に分割される溝がある。S 296は性格不明の石造物で、平面形は方形であり、上面が円形に大きく抉られる。石材は花崗岩である。S 297は豊島産凝灰岩製の手水鉢である。S 298は凝灰岩製の円柱形をなす石造物である。S 299は上下面が平坦で側面が括れる鼓形の石造物であり、石材は豊島産凝灰岩である。S 300は方柱状の石造物であり、側面の1面に段を持つ。石材は凝灰岩である。S 301は上下面が平坦で側面に円形の抉りがある。石材は凝灰岩である。S 302・304・305は方柱状の石造物であり、加工痕が残る。石材は豊島産凝灰岩である。S 303は断面「L」字形の石造物であり、方形の加工痕が残る。石材は花崗岩である。

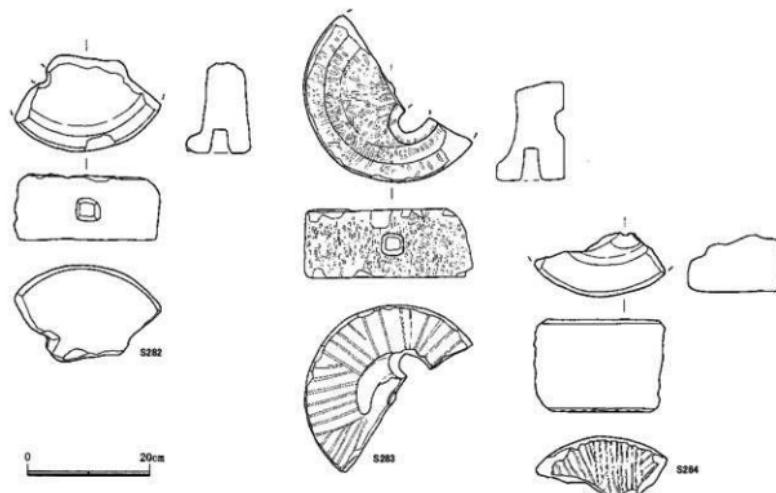
S 306～310は五輪塔空・風輪である。S 306は風輪の摩滅が著しい。S 307・310は下面に円形の突起がある。S 308・309は下面が平坦である。石材はS 306・310が凝灰岩、S 307が火



第5-83図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(37)

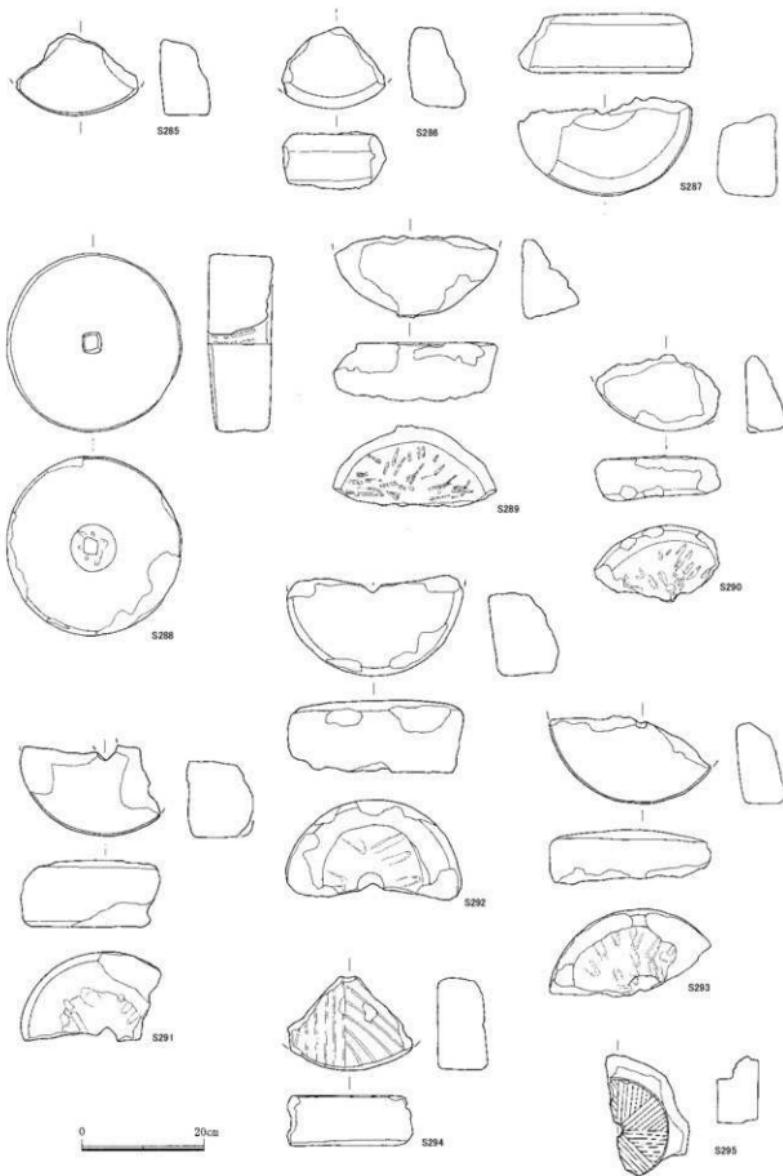


第5-84図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(38)

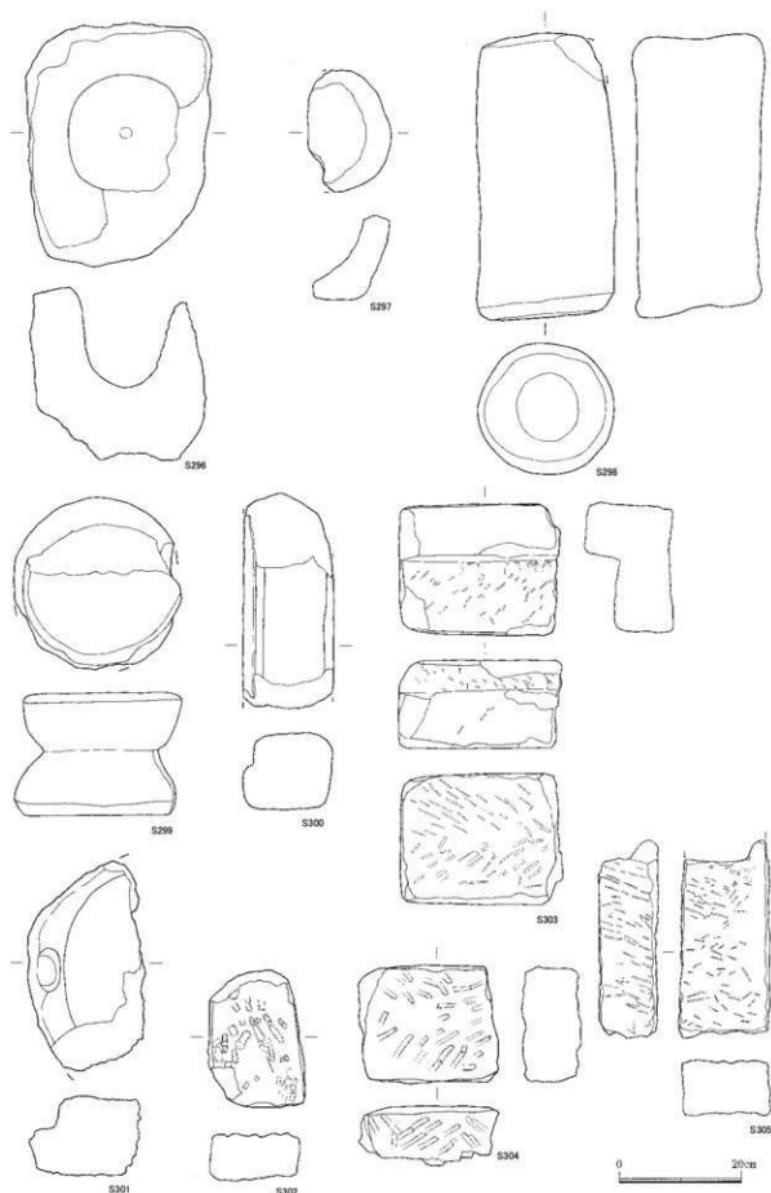


第5-85図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(39)

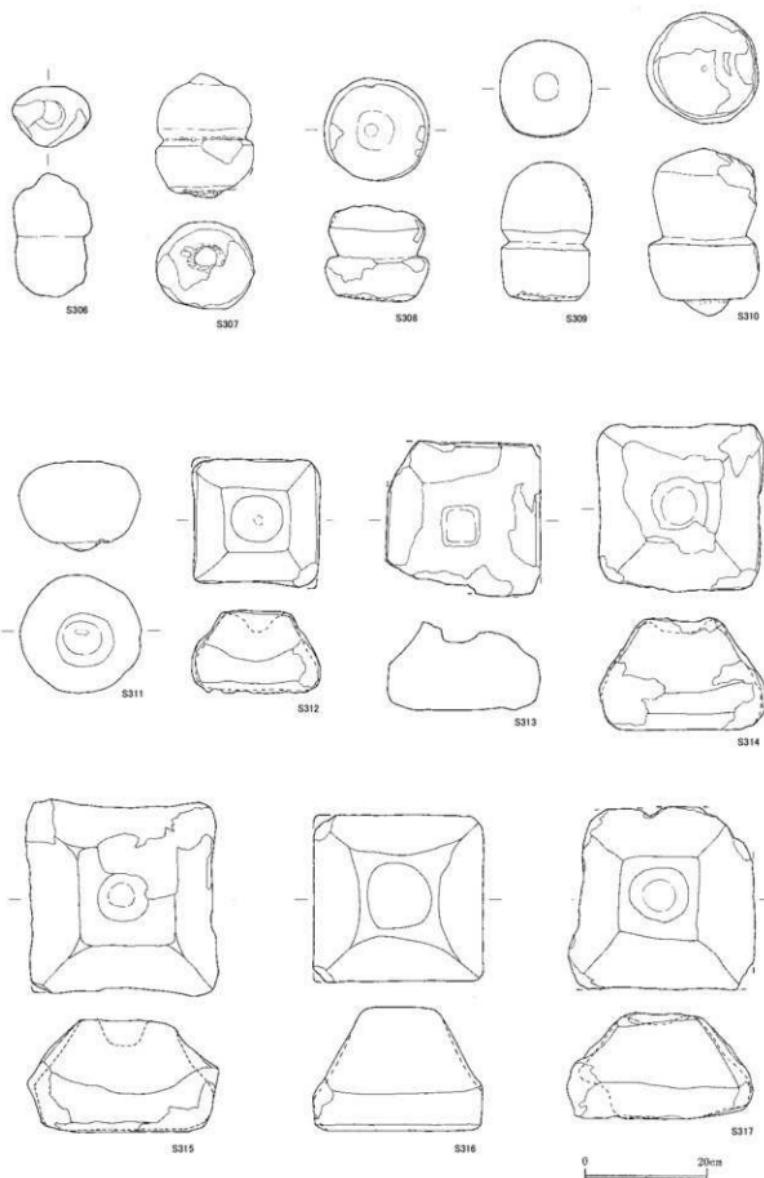
山系凝灰岩、S 308・309が天霧系凝灰岩である。S 311は天霧系凝灰岩製の五輪塔風輪で、下面に円形の低い突起がある。S 312～325は五輪塔火輪である。S 312～314・319・320は中型の火輪で上面に深い抉りがある。S 318は中型の火輪で、上部を欠損する。S 315・317・321～325は大規模の火輪で上面に深い抉りがある。S 316は大型の火輪で上下面が平坦である。石材はS 312～314・318～320・323～325が天霧系凝灰岩、S 315・317・321・322が凝灰岩、S 316が花崗岩である。S 326～345は五輪塔水輪である。S 326・329～334・336・339は中型の水輪であり、上下面が平坦である。S 327・338は中型の水輪であり、上下面が僅かに窪む。S 328は中型の水輪であり、上面が僅かに窪む。S 335・337は中型の水輪であり、下面が僅かに窪む。S 340は大型の水輪であり、上面が僅かに窪み、下面が大きく窪む。S 341は大型の水輪であり、上面が大きく窪み、下面が僅かに窪む。S 342は大型の水輪であり、上面が僅かに窪む。S 344は大型の水輪であり、上下面が僅かに窪む。S 345は大型の水輪であり、上下面が大きく窪む。石材はS 326・327・329・330・334・336・337・341～344が天霧系凝灰岩、S 328・331～333・335・338・339・345が凝灰岩、S 340が豊島産凝灰岩である。S 346～354は五輪塔地輪である。S 346・347は中型の地輪であり、上面が平坦で下面が凸凹である。S 348は中型の地輪であり、上面が平坦で下面が窪む。S 349・350・351は中型の地輪であり、上面が平坦で下面が大きく窪む。S 352～354は大型の地輪であり、上面が平坦で下面が大きく窪む。石材はS 346・348・349・351・353・354が天霧系凝灰岩、S 350・352が凝灰岩、S 347が花崗岩である。S 355・356は五輪塔火・水・地輪であるが上部を欠損しており空・風輪が続く可能性もある。石材はS 355が天霧系凝灰岩、S 356が凝灰岩である。S 357は直径49cmを測る巨大な五



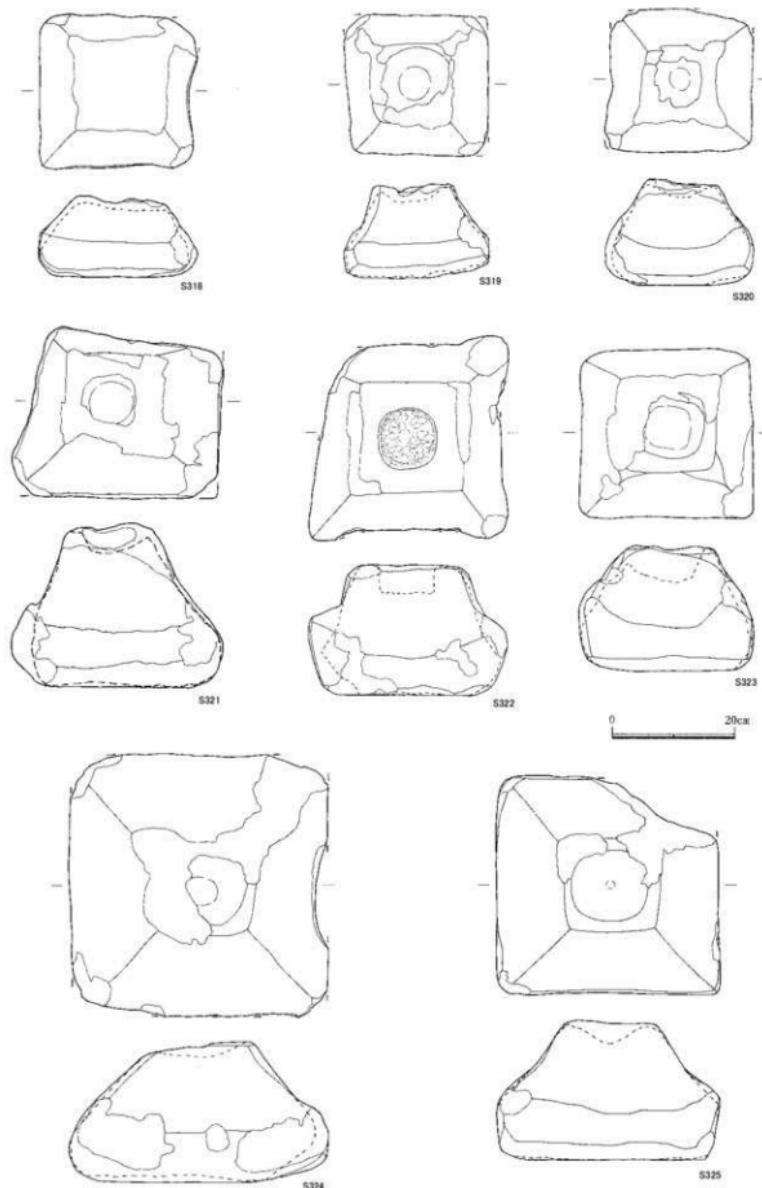
第5-86図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(40)



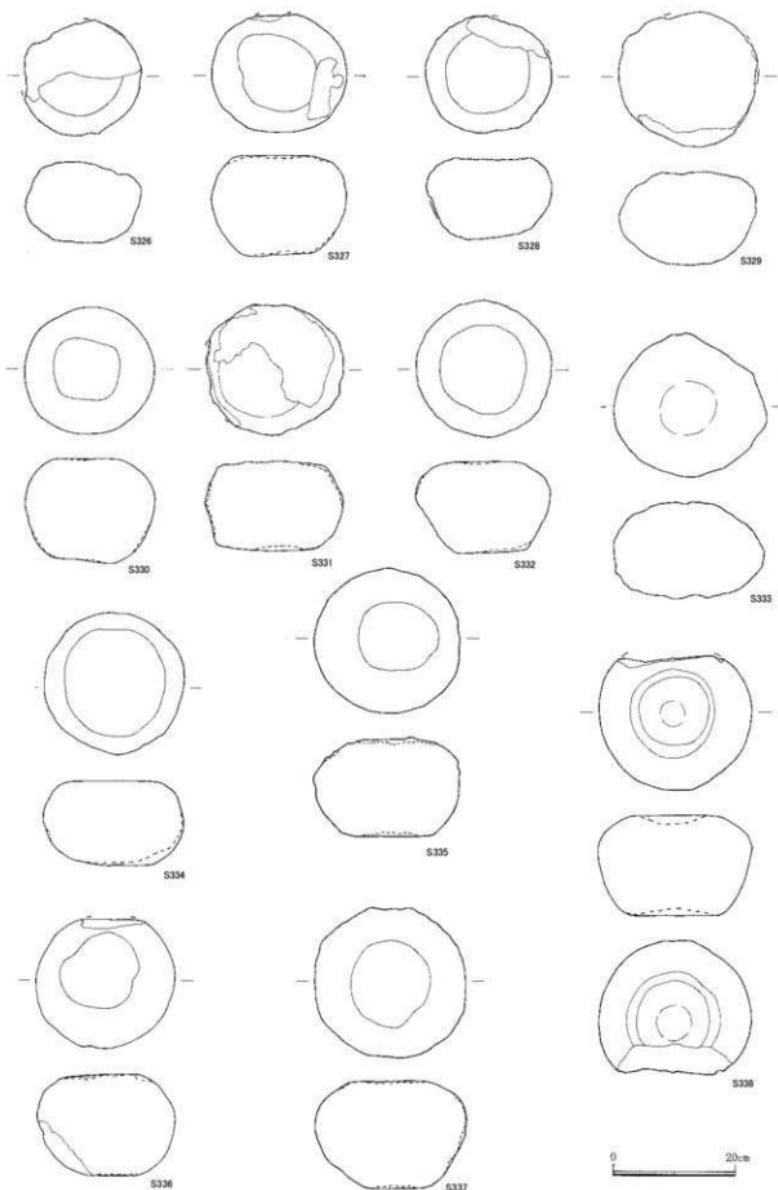
第5-87図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(41)



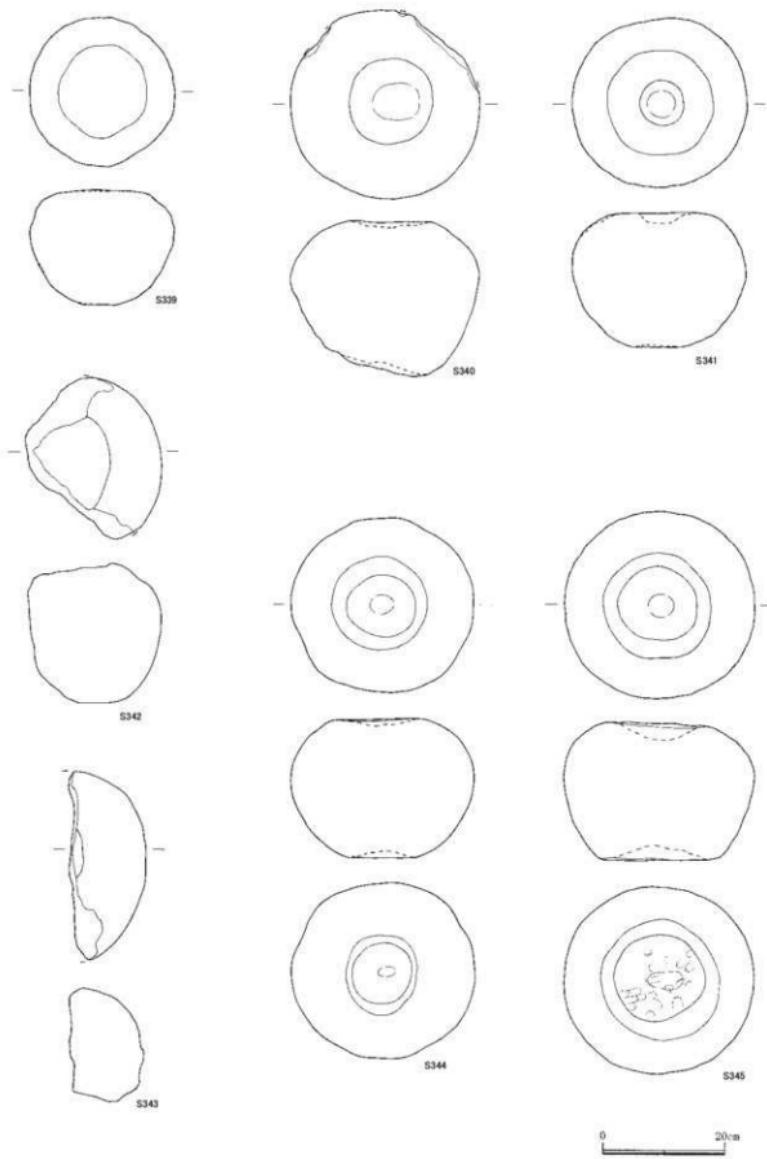
第5-88図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(42)



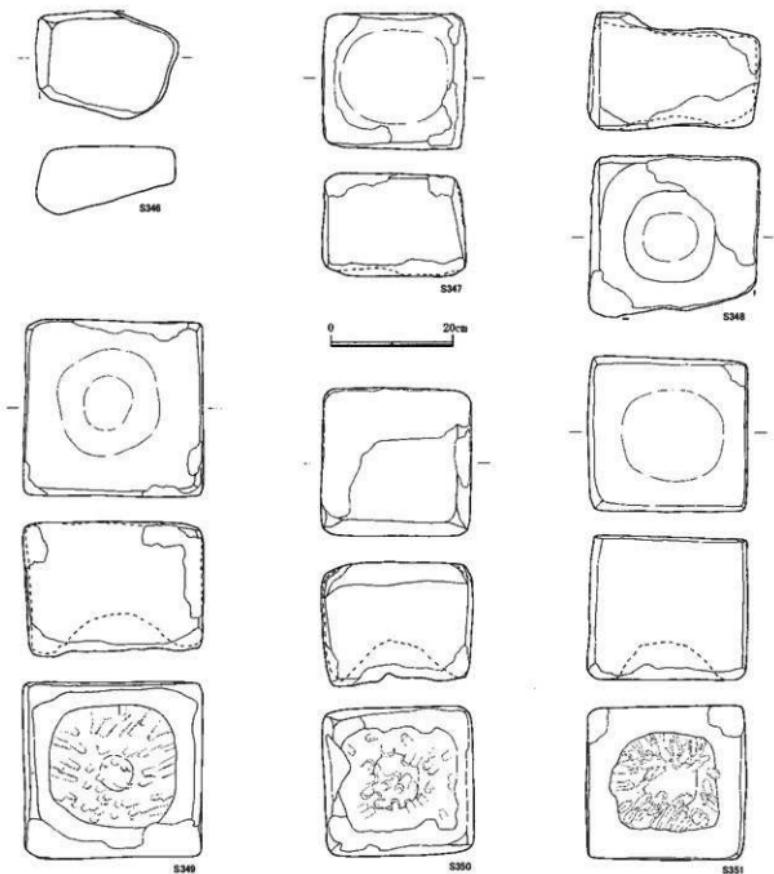
第5-89図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(43)



第5-90図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(44)



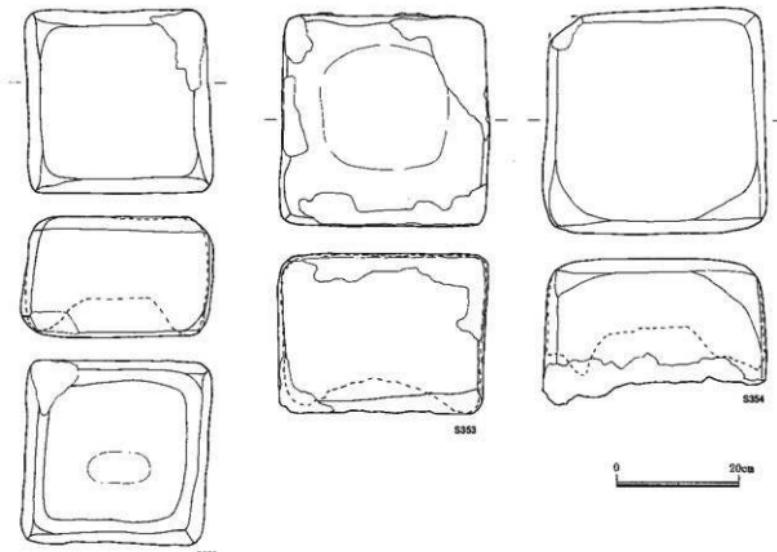
第5-91図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(45)



第5-92図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(46)

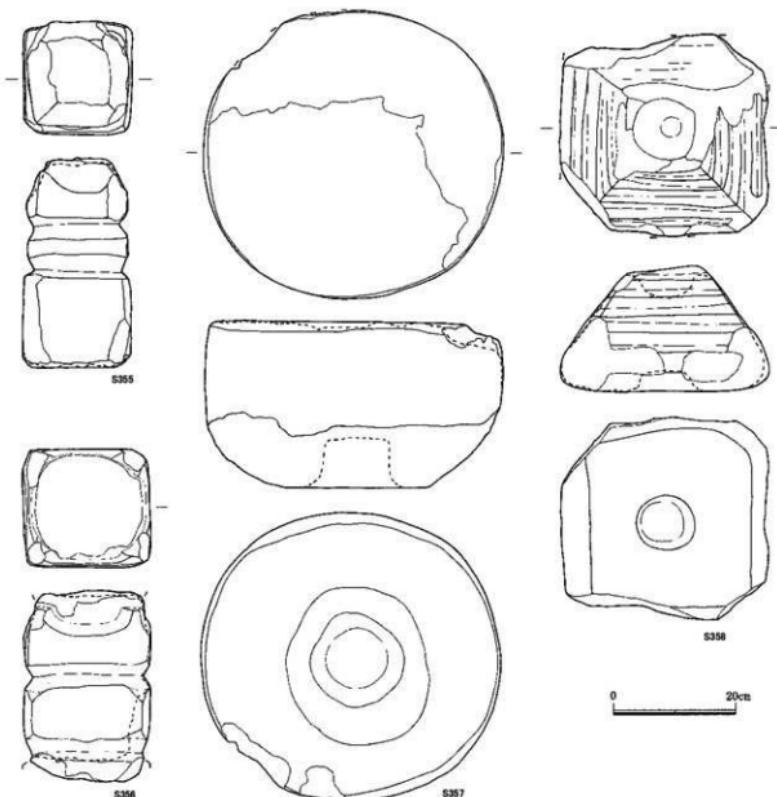
輪塔風輪であり、上面は平坦、下面は大きく円形の抉りがある。石材は天霧系凝灰岩である。S 358は宝篋印塔の笠であり、上下面が大きく窪む。段は摩滅が著しい。石材は凝灰岩である。S 359・360は石臼の上臼である。S 359は供給孔と芯棒受けと横打込穴が残存し、凝灰岩製である。S 360は供給孔と芯棒受けと横打込穴が残存し、下面に分割される溝とものくばりがあり、花崗岩製である。S 361は豊島産凝灰岩製の水鉢である。S 362は鼓形の石造物で加工痕が残る。石材は豊島産凝灰岩である。S 363は火山系凝灰岩製の宝塔の塔身であり、下部を欠損する。

S 364は天霧系凝灰岩製の五輪塔空・風輪で、下面是やや丸くなる。S 365～367は五輪塔風輪で、上面が大きく窪み、下面に円形の突起を有する。石材はS 365が凝灰岩、S 366・367が



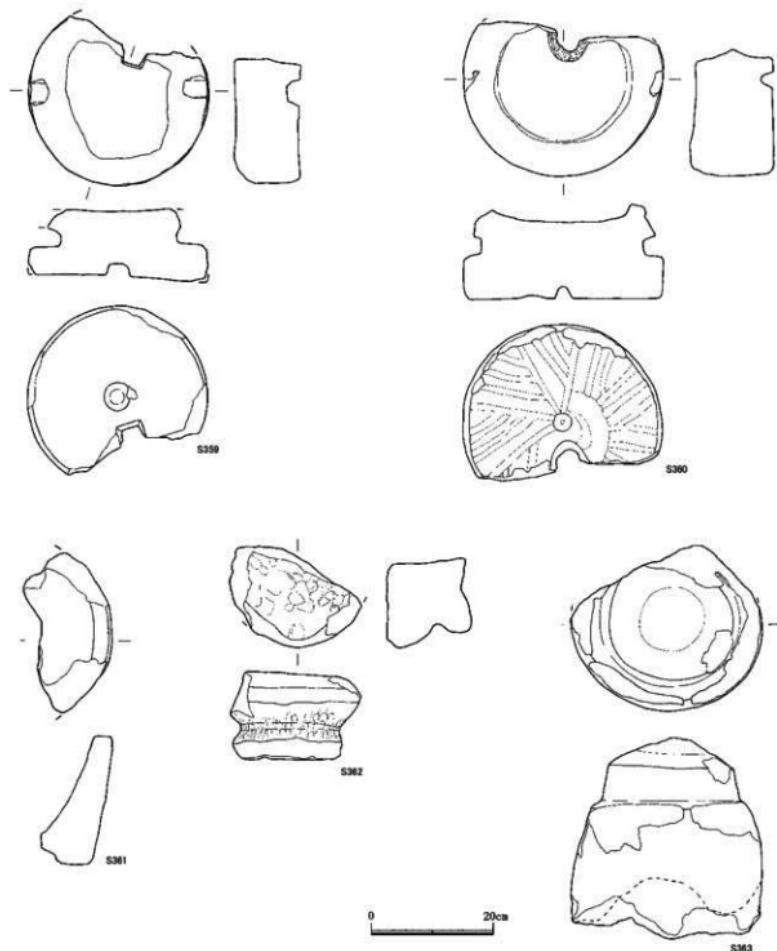
第5-93図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(47)

天霧系凝灰岩である。S 368～376は五輪塔火輪である。S 368～371は中型の火輪で、上面が円形ないし方形に窪み、下面が平坦である。S 372～374は大型の火輪で、上面が窪み、下面が平坦である。S 375は大型の火輪で、上下面が大きく窪む。S 376は大型の火輪で、上部を欠損し、下面が大きく窪む。石材はS 369～372・374が凝灰岩、S 373・376が火山系凝灰岩、S 375が天霧系凝灰岩、S 368が花崗岩である。S 377～388は五輪塔水輪である。S 377・385は小型の水輪で、上面が大きく窪み、下面が僅かに窪む。S 378・379・382は小型の水輪で、上面が平坦である。S 380は小型の水輪で、上部を欠損し、下面が僅かに窪む。S 381・384は小型の水輪で、上下面が平坦である。S 383は小型の水輪で、下部を欠損し、上面が僅かに窪む。S 386は大型の水輪で、上面が平坦である。S 387は大型の水輪で、上面が僅かに窪み、下面が平坦である。石材はS 377・378・380・382～385が凝灰岩、S 379・388が火山系凝灰岩、S 381・387が天霧系凝灰岩、S 386が花崗岩である。S 389～399は五輪塔地輪である。S 389・390・392・393・398は小型の地輪で、上下面が平坦である。S 391は小型の地輪で、上面が平坦で、下部を欠損する。S 394～396は中型の地輪で、上下面が平坦であり、上面に火輪の痕跡が残る。S 397は中型の地輪で、上下面が平坦であり、下面が僅かに窪む。S 399は大型の地輪で、上下面が平坦である。S 400は五輪塔水・地輪であり、下面が窪む。S 401は五輪塔水・火・地輪である。S 402は宝鏡印塔の台石で、上下面が大きく窪み、中央に穴がある。反花座は丁寧な作りである。石材はS 390・391・394・397・402が凝灰岩、S 393・396・398が天霧系凝灰岩、S 399が火山



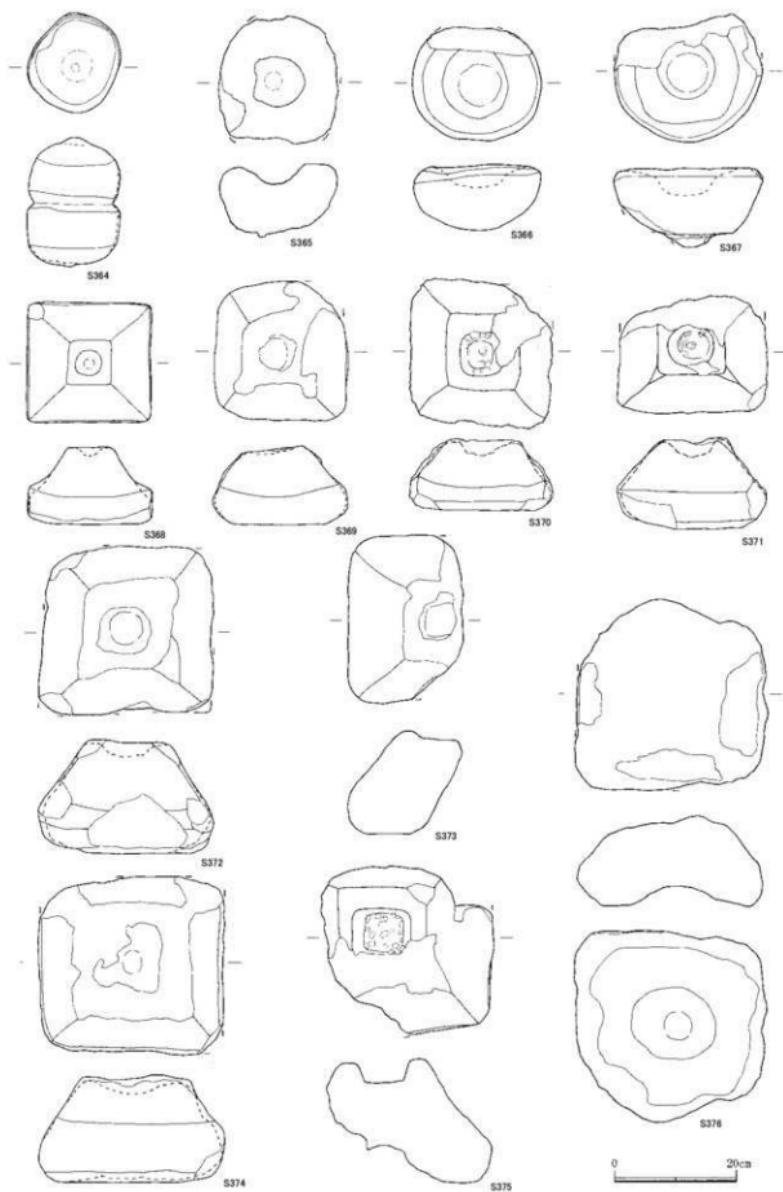
第5-94図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(48)

系凝灰岩, S 389・392・400・401 が豊島産凝灰岩, S 395 は花崗岩である。S 403～415 は石臼の上臼である。S 404 は供給孔が残存する。S 406・407 は横打込穴が残存する。S 408 は供給孔と芯棒受けと横打込穴が残存し, 下面に分割される溝がある。S 409 は供給孔と横打込穴が残存し, 下面に分割される溝とものくばりがある。S 410・411・414 は供給孔と芯棒受けと横打込穴が残存する。S 412 は芯棒受けと横打込穴が残存し, 下面に分割される溝がある。S 413 は芯棒受けと横打込穴が残存し, 下面に分割される溝とものくばりがある。S 415 は芯棒受けが残存する。S 416～421 は石臼の下臼である。S 416・417 は上面に分割される溝がある。S 418～421 は芯棒孔が残存する。石材は S 403・418 が豊島産凝灰岩, S 404・406・411・412・414・415・419 が凝灰岩, S 405・407・410・420・421 が天霧系凝灰岩, S 408・409・413・416・417 が花崗岩である。S 422 は花崗岩製の石造物で, 上面に深い抉りがあることと断面形から判断す

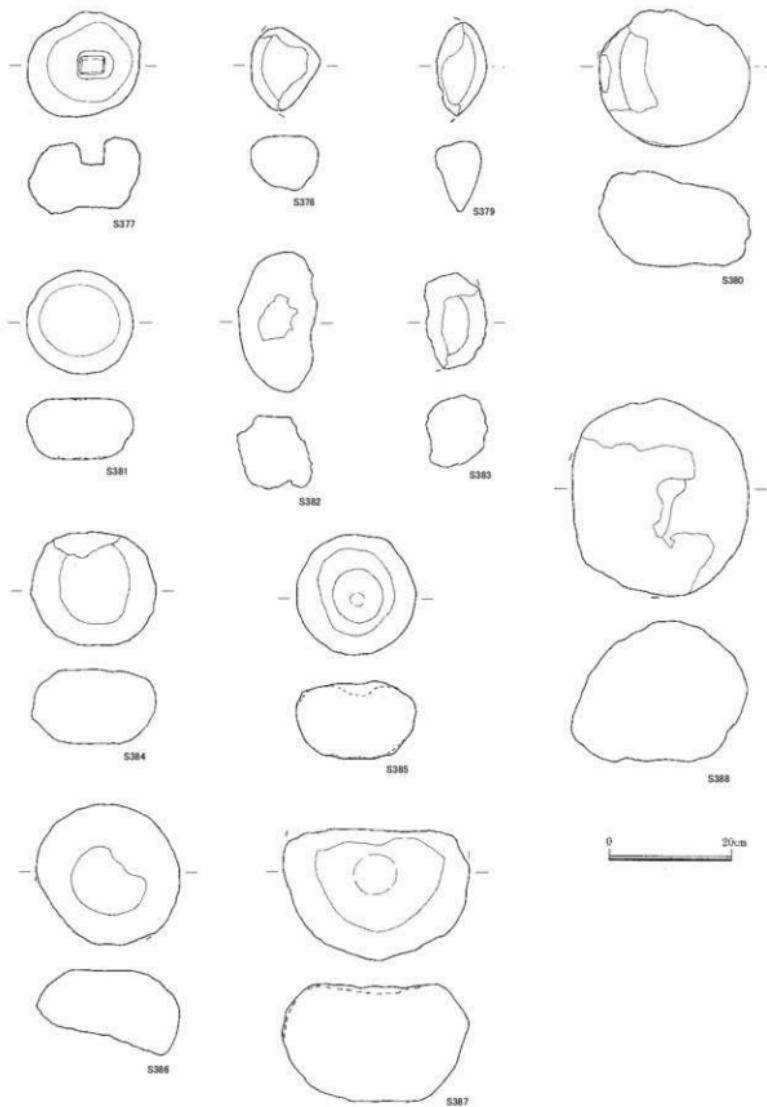


第5-95図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(49)

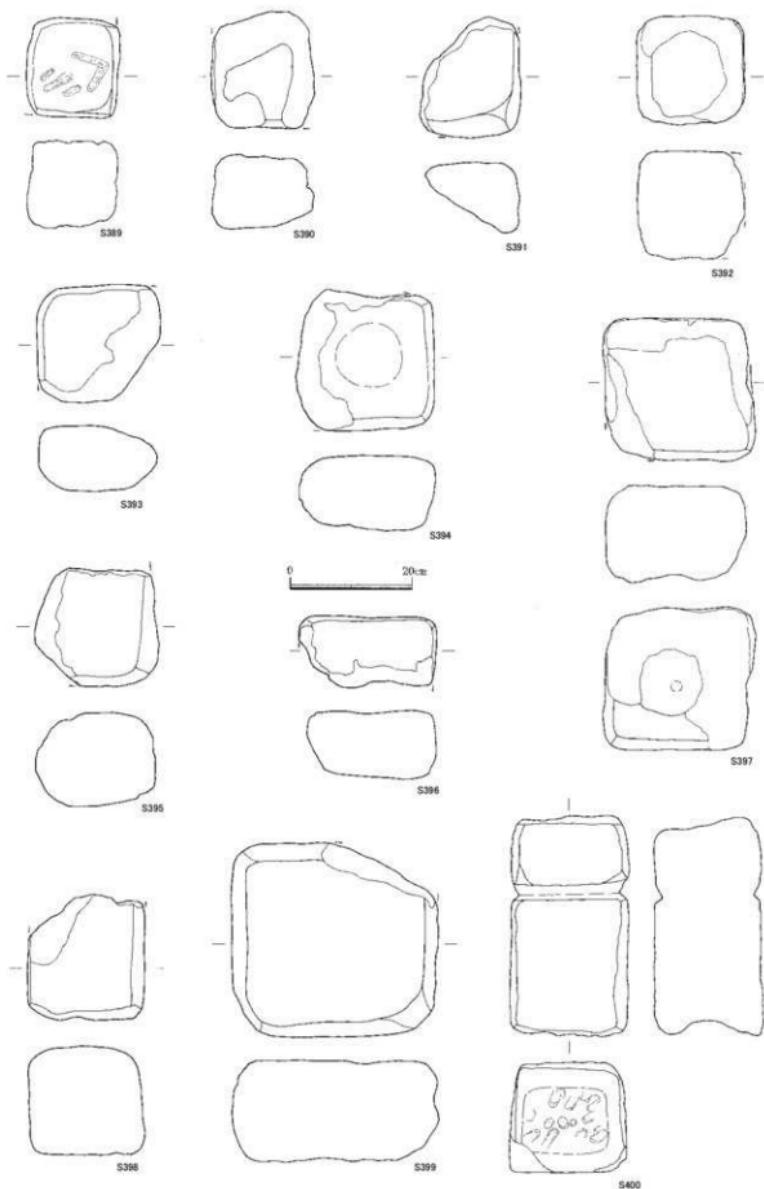
ると五輪塔風輪の可能性がある。S 423 は豊島産凝灰岩製の石造物で、一端を欠損し、上面には溝状の凹みがある。S 424 は砂岩製の円形を呈する石造物で、上面に細長く深い加工痕がある。S 425 は天霧系凝灰岩製の大きな石造物で、上面が大きく窪む。五輪塔風輪の可能性がある。S 426 は豊島産凝灰岩製の方柱形を呈する石造物で、一端を欠損する。端部近くに方形の深い抉りがあり、全面に細長い加工痕が残る。



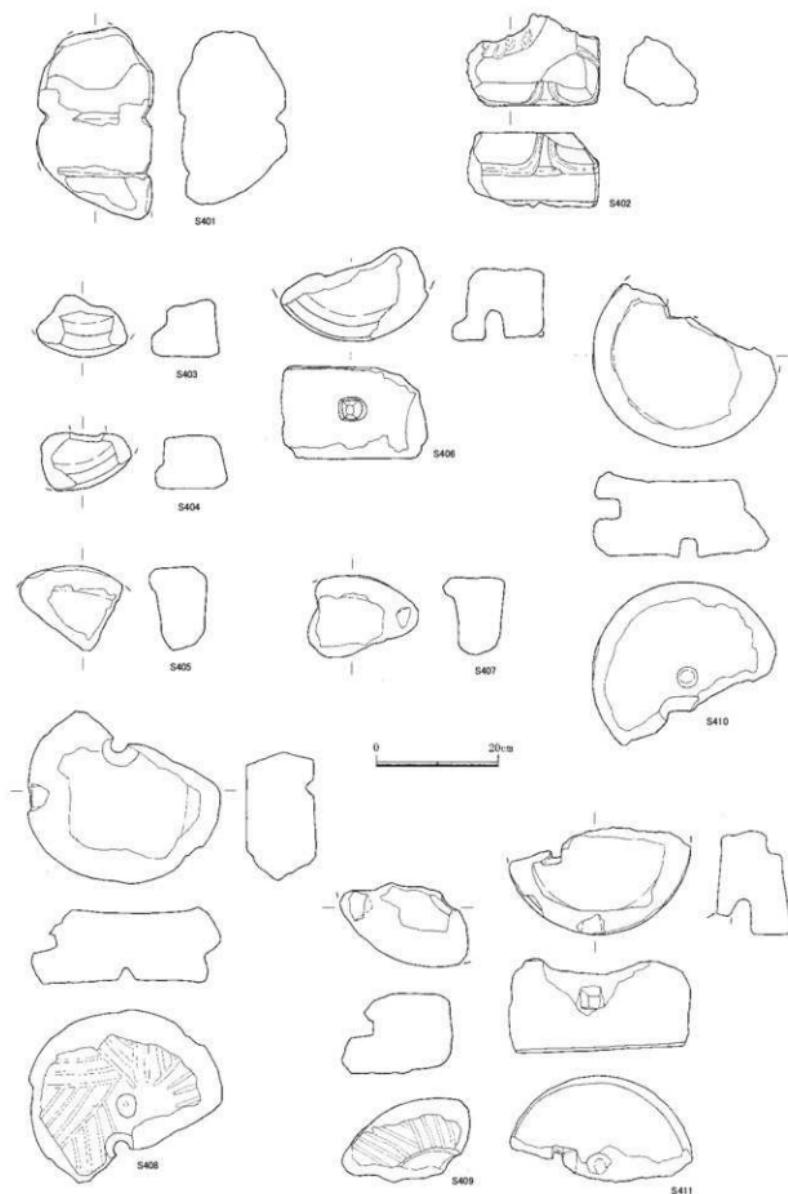
第5-96図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(50)



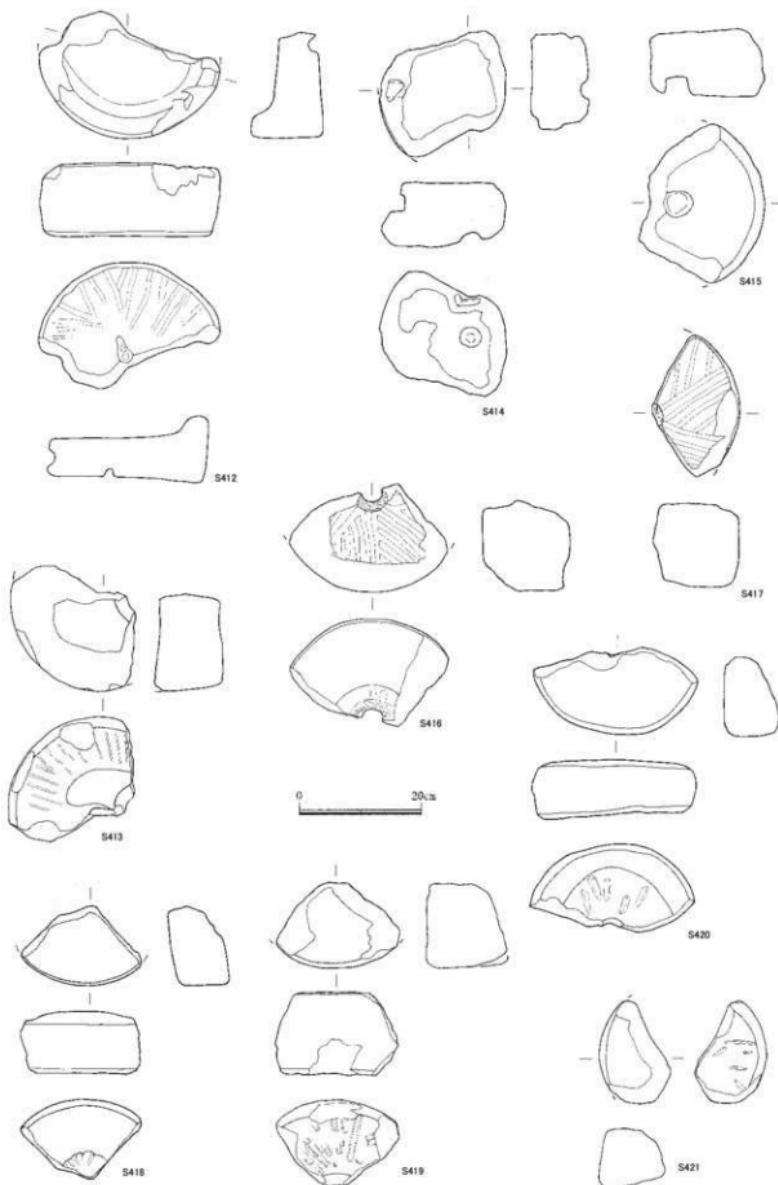
第5-97図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(51)



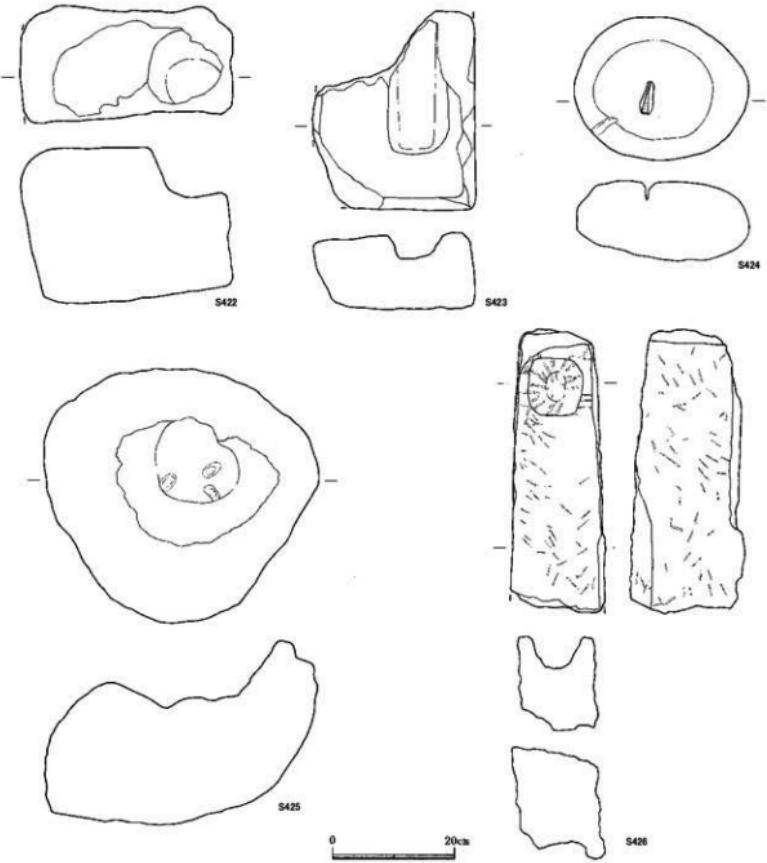
第5-98図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(52)



第5-99図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(53)



第5-100図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(54)



第5-101図 石垣解体に伴う出土石造物実測図(55)

## 石造物の小結

天守台・天守台前面・中川櫓台・虎口の石垣解体に伴う石造物の総数は426点であり、出土位置が判明している石造物の内、間詰め石であるS13・71・86の3点を除いた360点の石造物は、石垣の栗石中から出土した。また、出土位置が不明である63点の石造物は築石や間詰め石でないことは確実であり、栗石から出土したものと考えられる。その石造物を種類ごとに分類し、点数をグラフ化したのが第5-102図である。最も点数が多いのは308点の五輪塔であり、全体の約3/4を占める。次に多いのは石臼であり、茶臼を含めると76点である。以下は、宝篋印塔13点、層塔・墓標5点、その他24点である。出土する石造物の大部分は五輪塔、宝篋印塔、層塔、墓標であり、いわゆる墓地に関係するものである。文献の研究や周辺部の発掘調査の成果から、高松城築城に際して周辺に所在していた寺院や墓地の移転や整地を行ったと考えられており、今回の発掘調査において天守台の盛土からは人骨が出土し、栗石からは五輪塔等の石塔が多数出

し、墓地の撤去と整地が明らかとなった。また、石臼や井戸枠、用水路等の日々の生活に密着する石造物も栗石から同様に出土しており、高松城築城に際し寺院や墓地だけでなく中世の集落も撤去されたと考えられる。整地された寺院・墓地・集落の土砂は天守台の盛土に使用され、石塔や石臼等の石造物は石垣の栗石として転用されていた。

第5-102図は426点の石造物を石材別に分けた図である。最も大きな割合を占めるのは凝灰岩であり、全体の約90%の384点を数える。凝灰岩は産地により細かく分類すべきであるが、産地の比定が困難であることから本報告書では容易に判別できる産地のみ分類する。すなわち、豊島産凝灰岩、天露系凝灰岩、火山系凝灰岩の3者であり、その他は一括して凝灰岩とする。産地別の点数は、豊島産凝灰岩が112点、天露系凝灰岩が57点、火山系凝灰岩が12点である。次に多い石材は34点の花崗岩であり、産地の比定はできていない。香川の中世石造物の特徴は、石造物の99%が在地の凝灰岩製であることであり、齊一的な花崗岩製が広域に展開する瀬戸内海地域で特殊であると言われている。本調査においても凝灰岩が90%を占め、その割合がやや低くなっているが、天守台出土の石造物は香川の特徴を反映している。花崗岩が占める割合は全体の約7%である。凝灰岩の産地では、火山系凝灰岩が少ないのに対して豊島産凝灰岩が凝灰岩の30%と数量が多くなっている。このような凝灰岩の産地の栄衰から、豊島産凝灰岩の優勢により火山系凝灰岩の製作が終焉する17世紀より以前の様相を示すと考えられる。

石垣の面毎の石造物の出土数は、天守台のC面・D面・E面に集中しており、虎口のA面・B面は24点であり、天守台のG面では2点に過ぎない。第5-104~108図は出土位置が判明している石造物の出土位置を図化したものであり、石造物は網掛けしている築石や間詰め石の後側から出土している。これを見ると、石垣D面の2点とG面の1点を除き、石造物は石垣の下半部に集中していることが明確である。段数で言うと13段ないし14段目より下、標高では約5.00mより下から出土している。後述するように石垣の中段より下方の盛土から人骨が多量に出土している。天守台の石垣構築の初期段階では、高松城周辺に所在していたが高松城築城に際し整地された寺院・墓地・集落の土砂は天守台の盛土に使用され、石塔や石臼等の石造物は石垣の栗石として集中的に転用されたと考えられる。

最も出土数の多い五輪塔を部分別に分類したのが第5-103図である。火輪が75点、水輪が95点、地輪が84点の出土数であり、火輪と水輪と地輪はほぼ同じような点数であるのに対して、空輪と風輪の出土数は非常に少ないとわかる。空輪に空・風輪を含めても25点であり、火輪・水輪・地輪より少ない。一石五輪塔は12点である。一石五輪塔は畿内において15世紀後半から16世紀にかけて流行した石造物であり、香川では16世紀後半から生産が開始されたと考えられている。しかし、一石五輪塔が石垣の栗石として転用されていることは、高松城築城以前にこの周辺の墓地に一石五輪塔が造立されていたことを示しており、香川での生産開始時期がもう少し早まる可能性も考えられる。

石臼は茶臼を含めて76点出土している。その石材別に分類したのが第5-103図である。最も多い石材は凝灰岩であり、全体の79%を占める。産地別にすると、豊島産凝灰岩が36点、天露系凝灰岩が5点であり、豊島産凝灰岩が多い。次に多い石材は花崗岩11点、砂岩5点となる。茶臼の石材は砂岩2点と花崗岩1点である。

第5-1表 石造物法量観察表

報文 番号	法量	種別	器種	石材產地			
	長(高)(cm)	幅(横)(cm)	厚さ(奥)(cm)	重さ(kg)			
S1	(18.8)	(14.7)	(18.3)	(3.7)	五輪塔	水輪	凝灰岩
S2	15.1	20.2	20.6	6.2	五輪塔	水輪	凝灰岩
S3	(7.8)	(18.7)	(14.75)	(2.2)	五輪塔	水輪	凝灰岩
S4	12.3	20.05	(12.2)	(4.4)	不明		花崗岩
S5	(19.2)	(31.0)	(30.1)	(15.8)	五輪塔	地輪	凝灰岩
S6	(28.0)	17.8	17.6	(8.2)	五輪塔	空・風・火輪	中国型花崗岩
S7	14.8	21.9	21.8	5.1	五輪塔	風輪	豊島產凝灰岩
S8	(14.0)	(27.3)	(25.5)	(7.1)	五輪塔	火輪	凝灰岩
S9	(10.8)	(16.1)	(15.7)	(2.3)	五輪塔	水輪	凝灰岩
S10	(15.6)	36.0	(31.6)	(12.9)	五輪塔	火輪	火山系凝灰岩
S11	26.6	35.5	34.1	31.7	五輪塔	火輪	凝灰岩
S12	18.55	27.8	28.0	18.1	五輪塔	地輪	凝灰岩
S13	20.2	28.3	28.6	23.9	五輪塔	地輪	凝灰岩
S14	(18.0)	24.0	23.0	(12.9)	五輪塔	地輪	凝灰岩
S15	13.2	23.0	23.1	10.6	五輪塔	地輪	凝灰岩
S16	18.5	27.0	27.4	19.0	五輪塔	地輪	凝灰岩
S17	11.0	24.7	15.8	3.4	石臼	上臼	豊島產凝灰岩
S18	(34.3)	25.5	18.1	(17.4)	加工石材		凝灰岩
S19	27.4	29.3	28.7	19.0	五輪塔	空輪	凝灰岩
S20	26.9	17.1	16.7	6.0	五輪塔	空・風輪	凝灰岩
S21	18.5	15.0	14.3	4.1	五輪塔	空・風輪	豊島產凝灰岩
S22	(12.9)	(26.3)	(18.9)	(5.5)	五輪塔	風輪	豊島產凝灰岩
S23	14.2	25.2	26.3	8.7	五輪塔	火輪	豊島產凝灰岩
S24	15.6	25.6	25.1	(9.2)	五輪塔	火輪	凝灰岩
S25	(30.1)	47.9	46.5	(48.0)	五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩
S26	25.8	41.4	41.2	50.2	五輪塔	火輪	凝灰岩
S27	12.9	23.3	23.2	7.9	五輪塔	火輪	豊島產凝灰岩
S28	20.8	28.4	(26.1)	(14.3)	五輪塔	火輪	豊島產凝灰岩
S29	18.5	27.6	27.0	16.3	五輪塔	火輪	豊島產凝灰岩
S30	13.8	23.2	22.8	11.0	五輪塔	火輪	花崗岩
S31	20.3	29.6	28.9	19.4	五輪塔	火輪	凝灰岩
S32	11.6	21.8	23.0	5.9	五輪塔	火輪	凝灰岩
S33	20.2	28.5	28.0	17.6	五輪塔	火輪	凝灰岩
S34	22.5	(29.5)	(30.6)	(22.2)	五輪塔	火輪	豊島產凝灰岩
S35	(26.2)	34.6	(26.3)	(20.8)	五輪塔	火輪	豊島產凝灰岩
S36	(17.6)	(28.5)	(29.4)	(14.3)	五輪塔	火輪	凝灰岩
S37	(17.8)	30.0	29.1	(14.2)	五輪塔	火輪	凝灰岩
S38	14.0	17.1	18.9	4.7	五輪塔	火輪	凝灰岩
S39	14.7	19.1	24.0	5.9	五輪塔	水輪	凝灰岩
S40	(12.5)	(18.4)	(21.3)	(3.6)	五輪塔	水輪	火山系凝灰岩
S41	17.0	24.2	(21.6)	(8.2)	五輪塔	水輪	凝灰岩
S42	19.3	29.9	29.1	17.0	五輪塔	水輪	豊島產凝灰岩
S43	19.2	27.6	25.9	14.4	五輪塔	水輪	凝灰岩
S44	20.9	29.1	28.2	18.2	五輪塔	水輪	凝灰岩
S45	22.4	28.7	29.4	18.9	五輪塔	水輪	豊島產凝灰岩
S46	16.4	28.0	28.1	11.7	五輪塔	水輪	豊島產凝灰岩
S47	19.1	27.7	27.0	14.8	五輪塔	水輪	凝灰岩
S48	19.0	27.3	28.0	14.7	五輪塔	水輪	豊島產凝灰岩
S49	21.7	27.5	28.4	25.4	五輪塔	水輪	花崗岩
S50	22.0	28.7	28.2	22.9	五輪塔	水輪	花崗岩

報文 番号	法量	長(高) (cm)	幅(横) (cm)	厚さ(奥) (cm)	重さ (kg)	種別	器種	石材产地
S51	26.7	30.1	29.7	20.2	五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩	
S52	23.8	30.5	30.9	25.0	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S53	24.7	29.7	29.8	30.6	五輪塔	水輪	花崗岩	
S54	24.3	32.4	33.2	27.5	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S55	26.3	34.0	(28.2)	(28.8)	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S56	23.0	32.3	32.1	26.3	五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩	
S57	24.2	32.6	32.7	27.7	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S58	20.4	30.1	29.9	19.6	五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩	
S59	(23.7)	(31.2)	(30.4)	(23.6)	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S60	24.7	33.0	33.0	27.2	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S61	23.6	29.5	30.0	—	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S62	16.1	32.5	31.8	27.3	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S63	24.5	32.0	31.8	27.3	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S64	19.8	28.0	29.9	19.1	五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩	
S65	(14.0)	(18.9)	(17.6)	(4.9)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S66	(13.0)	(18.5)	(23.5)	(4.0)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S67	(10.3)	(26.3)	(18.45)	(4.7)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S68	10.6	(19.0)	22.7	(4.2)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S69	20.3	28.0	28.3	24.4	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S70	21.0	28.0	28.1	23.2	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S71	18.2	(30.6)	(29.6)	(22.4)	五輪塔	地輪	花崗岩	
S72	20.5	26.0	24.5	(17.9)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S73	(12.2)	21.8	(13.7)	(4.8)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S74	(14.5)	(22.9)	(19.0)	(7.1)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S75	16.0	19.4	20.5	7.2	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S76	19.9	26.3	26.45	19.1	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S77	(24.3)	26.4	26.4	(21.7)	五輪塔	地輪	花崗岩	
S78	13.9	29.4	(18.5)	(9.8)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S79	17.0	25.7	25.5	(17.1)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S80	20.8	28.1	27.7	30.4	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S81	22.0	29.2	29.4	(28.0)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S82	22.2	28.8	29.1	(25.5)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S83	(21.5)	31.3	30.7	(29.9)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S84	20.0	29.3	29.9	(26.5)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S85	(18.9)	34.0	32.9	—	五輪塔	地輪	火山系凝灰岩	
S86	12.9	28.1	16.0	7.1	五輪塔	火・水・地輪	豊島産凝灰岩	
S87	16.35	24.9	(24.1)	(9.7)	宝篋印塔	笠	凝灰岩	
S88	15.2	23.2	22.5	8.4	宝篋印塔	笠	凝灰岩	
S89	18.0	23.4	23.4	16.1	宝篋印塔	笠	花崗岩	
S90	14.6	39.8	(22.5)	(11.2)	宝篋印塔	台石	凝灰岩	
S91	7.1	17.7	12.7	1.3	石臼	上臼	凝灰岩	
S92	23.3	10.2	8.7	1.9	石臼	上臼	豊島産凝灰岩	
S93	8.9	(18.2)	(11.6)	(1.3)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩	
S94	10.6	(16.2)	(14.0)	(2.6)	石臼	上臼	砂岩	
S95	13.2	(25.1)	(13.2)	(3.5)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩	
S96	8.0	(27.8)	(14.3)	(3.8)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩	
S97	8.6	(22.3)	(14.4)	(4.2)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩	
S98	15.7	(30.0)	(15.0)	(10.3)	石臼	上臼	花崗岩	
S99	(13.6)	(29.3)	(16.8)	(6.1)	石臼	上臼	凝灰岩	
S100	13.4	29.6	29.7	9.5	石臼	上臼	豊島産凝灰岩	

報文番号	法量	長(高)(cm)	幅(横)(cm)	厚さ(奥)(cm)	重さ(kg)	種別	器種	石材产地
S101	5.5	13.9	12.2	0.7	石臼	下臼	豊島産凝灰岩	
S102	(8.7)	(19.6)	(16.3)	(2.4)		石臼	下臼	凝灰岩
S103	12.0	20.8	12.9	3.7		石臼	下臼	凝灰岩
S104	(18.7)	(27.5)	(10.6)	(5.7)		石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S105	8.5	21.6	14.1	2.4		石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S106	7.9	(17.5)	(14.0)	(1.8)		石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S107	11.3	29.7	30.2	11.7		石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S108	10.2	(29.4)	(18.7)	(4.6)		石臼	下臼	凝灰岩
S109	13.0	28.7	(18.0)	(9.8)		石臼	下臼	花崗岩
S110	(10.8)	(25.1)	(15.1)	(5.1)		茶臼	下臼	砂岩
S111	12.5	(31.6)	(31.6)	(14.8)		茶臼	下臼	砂岩
S112	23.0	54.3	53.9	47.6		石造物	基礎	凝灰岩
S113	18.2	16.6	10.7	2.9		加工石造物		豊島産凝灰岩
S114	(38.9)	(26.5)	12.9	(12.1)		井戸枠		豊島産凝灰岩
S115	(12.0)	(11.0)	(16.25)	(1.0)		手水鉢		凝灰岩
S116	13.9	(26.0)	(16.8)	(5.0)		方形水鉢		豊島産凝灰岩
S117	(18.3)	22.1	22.1	9.0		五輪塔	空輪	凝灰岩
S118	(18.1)	22.1	21.5	(8.0)		五輪塔	空輪	凝灰岩
S119	(19.0)	21.9	22.0	(8.2)		五輪塔	空輪	凝灰岩
S120	26.8	29.9	30.3	21.1		五輪塔	空輪	豊島産凝灰岩
S121	15.5	23.6	22.0	6.4		五輪塔	空輪	豊島産凝灰岩
S122	(21.6)	(15.4)	(13.4)	(3.8)		五輪塔	空・風輪	凝灰岩
S123	19.0	15.1	13.5	3.6		五輪塔	空・風輪	凝灰岩
S124	(20.7)	15.7	15.3	4.3		五輪塔	空・風輪	豊島産凝灰岩
S125	24.9	19.7	19.0	9.5		五輪塔	空・風輪	豊島産凝灰岩
S126	25.8	20.1	19.9	9.0		五輪塔	空・風輪	豊島産凝灰岩
S127	24.5	17.5	18.5	6.9		五輪塔	空・風輪	天霧系凝灰岩
S128	29.0	19.2	19.5	10.2		五輪塔	空・風輪	豊島産凝灰岩
S129	26.0	20.2	20.1	14.2		五輪塔	空・風輪	花崗岩
S130	34.2	24.9	(23.4)	(11.8)		五輪塔	空・風輪	天霧系凝灰岩
S131	(19.2)	24.0	23.6	(9.2)		五輪塔	空・風輪	凝灰岩
S132	9.6	18.5	16.6			五輪塔	空・風輪	凝灰岩
S133	10.2	19.3	(12.7)	(2.2)		五輪塔	風輪	凝灰岩
S134	13.1	(24.6)	(24.0)	(6.5)		五輪塔	風輪	凝灰岩
S135	8.85	22.7	(20.8)	(6.3)		五輪塔	風輪	砂岩
S136	16.9	22.2	22.0	(6.2)		五輪塔	風輪	豊島産凝灰岩
S137	(14.8)	23.4	23.0	(7.7)		五輪塔	火輪	豊島産凝灰岩
S138	12.6	19.9	20.5	4.1		五輪塔	火輪	凝灰岩
S139	15.5	(25.8)	(17.5)	(6.1)		五輪塔	火輪	豊島産凝灰岩
S140	11.5	(21.3)	(19.7)	(4.7)		五輪塔	火輪	凝灰岩
S141	11.7	22.0	20.5	6.2		五輪塔	火輪	凝灰岩
S142	12.0	22.6	(21.3)	(5.9)		五輪塔	火輪	凝灰岩
S143	(20.3)	33.2	31.5	(22.1)		五輪塔	火輪	凝灰岩
S144	19.8	33.5	(31.8)	(22.0)		五輪塔	火輪	凝灰岩
S145	(20.9)	30.6	31.4	(20.5)		五輪塔	火輪	凝灰岩
S146	15.7	28.3	27.8	14.8		五輪塔	火輪	凝灰岩
S147	(19.8)	29.5	30.5	(19.1)		五輪塔	火輪	豊島産凝灰岩
S148	13.5	26.5	19.9			五輪塔	火輪	花崗岩
S149	(22.4)	31.4	30.2	(22.7)		五輪塔	火輪	凝灰岩
S150	18.8	31.8	31.7	20.0		五輪塔	火輪	豊島産凝灰岩

報文番号	法量	長(高)(cm)	幅(横)(cm)	厚さ(奥)(cm)	重さ(kg)	種別	器種	石材产地
S151	15.7	27.0	27.3	11.9	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S152	(22.2)	26.2	31.6	(24.0)	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S153	23.0	29.7	29.6	21.1	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S154	19.7	28.9	28.7	15.8	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S155	13.0	23.1	22.9		五輪塔	火輪	凝灰岩	
S156	16.5	25.5	24.8	11.1	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S157	14.9	24.8	25.7	11.0	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S158	19.8	26.9	28.2	16.1	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S159	18.4	28.6	28.9	17.3	五輪塔	火輪	豊島産凝灰岩	
S160	23.5	32.0	32.3	26.0	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S161	25.0	30.3	29.9	21.0	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S162	18.3	28.1	29.9	17.4	五輪塔	火輪	豊島産凝灰岩	
S163	27.3	31.4	29.8	17.0	五輪塔	火輪	豊島産凝灰岩	
S164	16.6	26.8	26.9	14.4	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S165	(16.0)	31.2	30.6	(14.4)	五輪塔	火輪	豊島産凝灰岩	
S166	21.6	(33.2)	(32.8)	(27.0)	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S167	(21.1)	31.7	31.2	(20.8)	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S168	(26.8)	(27.0)	(30.8)	(16.9)	五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩	
S169	10.3	14.4	14.0	2.1	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S170	(12.5)	(14.0)	(15.6)	(1.8)	五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩	
S171	(8.0)	(14.1)	(10.8)	(1.3)	五輪塔	水輪	花崗岩	
S172	(15.3)	(10.8)	(16.5)	(1.8)	五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩	
S173	13.3	19.9	13.0	3.3	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S174	16.9	24.9	24.0	9.9	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S175	18.1	24.9	24.4	11.1	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S176	16.9	21.9	22.9	8.3	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S177	17.8	23.4	23.4	9.2	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S178	16.2	22.2	23.0	9.9	五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩	
S179	24.2	31.0	30.0	23.3	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S180	24.1	30.5	30.6	24.3	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S181	17.6	28.7	28.2	13.7	五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩	
S182	14.2	18.6	20.1	4.6	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S183	15.6	21.8	(16.0)	(6.4)	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S184	13.7	19.0	21.3	7.0	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S185	11.4	23.0	23.0	(7.7)	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S186	16.5	24.3	23.4		五輪塔	水輪	凝灰岩	
S187	(14.5)	(23.1)	(25.4)	(8.4)	五輪塔	水輪	花崗岩	
S188	15.9	24.4	(22.9)	(9.4)	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S189	20.0	23.7	24.7	13.0	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S190	19.9	29.4	28.7	18.9	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S191	22.1	30.0	30.4	23.2	五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩	
S192	(17.9)	(28.2)	(22.9)	(8.0)	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S193	20.9	27.2	28.0	(15.2)	五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩	
S194	18.6	29.5	(17.5)	(9.7)	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S195	18.3	29.9	29.6	16.6	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S196	17.5	(25.5)	30.0	(15.1)	五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩	
S197	22.0	29.8	29.8	21.9	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S198	26.5	38.3	34.5	39.0	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S199	21.0	31.0	30.0	17.4	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S200	(22.0)	34.8	(29.2)	(20.4)	五輪塔	水輪	火山系凝灰岩	

報文番号	法量	長(高)(cm)	幅(横)(cm)	厚さ(奥)(cm)	重さ(kg)	種別	器種	石材产地
S201	(22.6)	(41.4)	(40.2)	(24.3)		五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩
S202	28.2	34.6	34.2	37.5		五輪塔	水輪	凝灰岩
S203	(26.1)	37.3	36.2	33.0		五輪塔	水輪	凝灰岩
S204	25.5	33.6	33.3	27.6		五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩
S205	22.0	28.6	28.0	19.0		五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩
S206	35.0	44.0	43.5	63.0		五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩
S207	29.1	37.5	37.6	41.3		五輪塔	水輪	凝灰岩
S208	12.2	13.1	14.1			五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩
S209	(5.1)	(14.8)	(13.7)	(1.2)		五輪塔	地輪	凝灰岩
S210	9.0	(18.4)	(13.5)			五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩
S211	13.9	20.9	15.7	6.1		五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩
S212	(10.0)	(10.9)	(17.0)	(2.4)		五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩
S213	11.3	17.9	(19.7)	(4.3)		五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩
S214	12.0	(18.0)	(19.2)	(4.2)		五輪塔	地輪	凝灰岩
S215	18.0	(19.6)	(22.2)	(13.8)		五輪塔	地輪	花崗岩
S216	14.5	23.4	22.1	9.6		五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩
S217	19.0	23.9	23.6	14.1		五輪塔	地輪	凝灰岩
S218	15.2	24.5	23.8	14.3		五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩
S219	17.3	24.0	23.9	13.8		五輪塔	地輪	凝灰岩
S220	19.5	24.4	25.2	17.2		五輪塔	地輪	凝灰岩
S221	13.3	19.7	27.8	(7.3)		五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩
S222	9.5	(22.3)	(18.6)	(3.5)		五輪塔	地輪	火山系凝灰岩
S223	12.6	21.3	22.2	8.2		五輪塔	地輪	凝灰岩
S224	14.7	21.3	21.7	9.6		五輪塔	地輪	凝灰岩
S225	14.4	20.1	21.5	8.4		五輪塔	地輪	凝灰岩
S226	14.0	24.0	23.0	9.9		五輪塔	地輪	凝灰岩
S227	(16.4)	25.2	(22.6)	(11.0)		五輪塔	地輪	凝灰岩
S228	11.2	26.15	(15.25)	(3.5)		五輪塔	地輪	凝灰岩
S229	18.2	25.3	25.3	(14.0)		五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩
S230	14.4	24.2	24.0	12.5		五輪等	地輪	凝灰岩
S231	12.2	24.3	24.6	9.9		五輪塔	地輪	凝灰岩
S232	20.0	23.5	23.7	17.3		五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩
S233	16.5	24.1	24.3	14.1		五輪塔	地輪	凝灰岩
S234	28.3	31.3	32.2	32.1		五輪塔	地輪	凝灰岩
S235	18.6	26.3	26.7	(15.9)		五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩
S236	20.0	27.9	27.8	22.9		五輪塔	地輪	凝灰岩
S237	(25.3)	30.5	30.1	(24.2)		五輪塔	地輪	凝灰岩
S238	21.1	29.3	29.5	27.4		五輪塔	地輪	凝灰岩
S239	(18.2)	(34.0)	(33.5)	(17.7)		五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩
S240	(15.9)	31.2	(21.2)	(8.8)		五輪塔	地輪	凝灰岩
S241	20.3	27.5	(19.1)	(12.2)		五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩
S242	21.4	26.1	25.6	(18.7)		五輪塔	地輪	凝灰岩
S243	19.3	(15.5)	(15.0)	(5.0)		五輪塔	地輪	凝灰岩
S244	29.7	30.4	(18.2)	(15.5)		五輪塔	地輪	凝灰岩
S245	(23.2)	17.3	17.6	(10.1)		五輪塔	火・水輪	凝灰岩
S246	20.2	27.3	15.1	7.5		五輪塔	火・水輪	凝灰岩
S247	(32.5)	22.3	21.0	(21.5)		五輪塔	水・地輪	豊島産凝灰岩
S248	(24.8)	17.3	14.7	(7.6)		五輪塔	水・地輪	豊島産凝灰岩
S249	36.5	18.0	16.8	13.2		五輪塔	火・水・地輪	豊島産凝灰岩
S250	(49.0)	18.5	16.8	(21.8)		五輪塔	火・水・地輪	凝灰岩

報文番号	法量	種別	器種	石材产地			
	長（高） (cm)	幅（横） (cm)	厚さ（奥） (cm)	重さ (kg)			
S251	28.5	23.1	22.5	17.3	宝篋印塔	塔身	凝灰岩
S252	(25.5)	14.8	17.5	9.0	宝篋印塔	塔身	豊島産凝灰岩
S253	8.25	(23.75)	(20.1)	(4.2)	宝篋印塔	台石	
S254	12.6	30.25	30.2	14.1	宝篋印塔	台石	豊島産凝灰岩
S255	16.0	(37.6)	(24.3)	(13.7)	宝篋印塔	台石	豊島産凝灰岩
S256	(17.1)	30.0	29.9	(16.7)	宝篋印塔	台石 塔身	凝灰岩
S257	14.6	36.3	36.5	18.5	宝篋印塔	台石	花崗岩
S258	16.2	(22.1)	(16.5)	(4.6)		方形鉢	凝灰岩
S259	16.4	44.8	48.0	33.5		基礎	豊島産凝灰岩
S260	16.8	32.8	26.6	11.7		墓標	屋根
S261	30.0	28.1	21.1	17.2		墓	豊島産凝灰岩
S262	(27.2)	20.0	14.6	(6.4)		墓標	天霧系凝灰岩
S263	8.4	(16.0)	(10.5)	(1.1)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S264	11.1	21.2	13.7	1.9	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S265	(8.8)	(15.7)	(8.9)	(0.9)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S266	10.5	(19.8)	(12.1)	(2.0)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S267	8.5	20.5	13.3	2.1	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S268	9.4	(19.2)	(14.3)	(1.9)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S269	(13.9)	(23.7)	(14.3)	(4.6)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S270	9.0	(18.6)	(13.9)	(1.9)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S271	11.7	(24.5)	(16.9)	(3.6)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S272	10.9	(23.5)	(18.3)	(3.8)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S273	(13.9)	(24.7)	(14.1)	(3.7)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S274	9.4	15.5	11.7	1.4	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S275	13.2	(22.3)	(14.7)	(3.1)	石臼	上臼	凝灰岩
S276	(13.0)	(26.5)	(18.7)	(8.1)	石臼	上臼	花崗岩
S277	(29.5)	(15.8)	(11.5)	(5.7)	石臼	上臼	凝灰岩
S278	(9.6)	(29.3)	(15.3)	(4.1)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S279	11.9	(28.9)	(14.5)		石臼	上臼	凝灰岩
S280	10.6	(26.9)	(29.1)	(5.9)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S281	11.2	20.2	20.3	10.1	石臼	上臼	凝灰岩
S282	10.8	(23.8)	(15.6)	(3.3)	石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S283	11.2	27.5	(15.0)	(7.9)	石臼	上臼	砂岩
S284	14.9	(21.3)	(11.4)	(4.4)	石臼	上臼	花崗岩
S285	7.5	(19.8)	(13.4)	(1.9)	石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S286	9.3	(16.6)	(13.4)	(1.7)	石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S287	9.6	(28.4)	(15.9)	(5.0)	石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S288	10.6	29.1	28.5	11.8	石臼	下臼	凝灰岩
S289	9.5	(26.5)	(13.2)	(2.5)	石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S290	7.4	(20.2)	(12.5)	(1.6)	石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S291	10.9	(22.9)	(14.9)	(3.8)	石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S292	11.7	(28.7)	(14.2)	(5.7)	石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S293	8.8	(16.2)	(14.3)	(2.9)	石臼	下臼	凝灰岩
S294	8.2	(20.4)	(15.4)	(4.0)	石臼	下臼	砂岩
S295	7.0	20.3	12.0	2.4	茶臼	下臼	花崗岩
S296	28.0	30.3	39.8	48.5	加工石材		花崗岩
S297	(12.8)	(19.9)	(13.8)	(2.0)		手水鉢	豊島産凝灰岩
S298	47.0	21.5	22.4	25.5	加工石材		凝灰岩
S299	20.0	27.3	26.9	14.4	加工石材		豊島産凝灰岩
S300	12.6	(35.2)	14.8	(8.2)	加工石材		凝灰岩

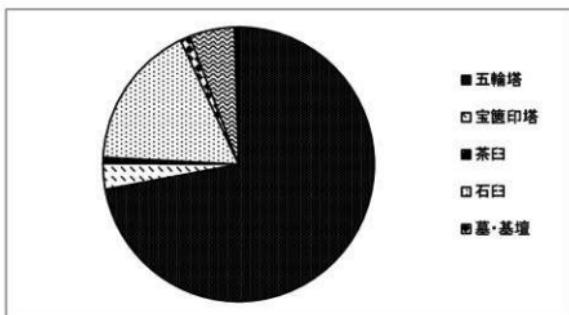
報文番号	法量	長(高)(cm)	幅(横)(cm)	厚さ(奥)(cm)	重さ(kg)	種別	器種	石材产地
S301	13.0	(19.1)	(34.3)	(7.0)		加工石材		凝灰岩
S302	22.3	15.6	7.7	2.9		加工石材		豊島産凝灰岩
S303	14.3	26.5	21.3			加工石材		花崗岩
S304	9.8	(23.0)	19.4	(5.2)		加工石材		豊島産凝灰岩
S305	(32.3)	15.0	9.7	(5.8)		加工石材		豊島産凝灰岩
S306	(20.1)	(12.9)	(9.8)	(2.4)		五輪塔	空・風輪	凝灰岩
S307	20.2	16.0	(14.4)	(3.1)		五輪塔	空・風輪	火山系凝灰岩
S308	15.7	17.1	16.7	4.4		五輪塔	空・風輪	天霧系凝灰岩
S309	22.6	15.0	15.8	5.8		五輪塔	空・風輪	天霧系凝灰岩
S310	27.5	17.8	18.4	8.5		五輪塔	空・風輪	凝灰岩
S311	14.7	19.7	19.3	4.4		五輪塔	風輪	天霧系凝灰岩
S312	13.5	20.5	21.0	7.0		五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩
S313	(14.3)	25.0	25.0	(8.7)		五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩
S314	18.2	27.4	27.1	(15.1)		五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩
S315	18.2	31.4	32.4	20.3		五輪塔	火輪	凝灰岩
S316	20.2	27.8	27.4	23.7		五輪塔	火輪	花崗岩
S317	17.3	30.5	29.8	14.8		五輪塔	火輪	凝灰岩
S318	(13.3)	25.7	25.4	(9.5)		五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩
S319	15.3	23.5	23.0	(8.9)		五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩
S320	17.3	24.2	23.4	(10.5)		五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩
S321	26.7	(33.7)	(26.5)	(23.1)		五輪塔	火輪	凝灰岩
S322	21.4	32.6	33.2	(20.5)		五輪塔	火輪	凝灰岩
S323	20.4	28.2	27.8	18.8		五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩
S324	22.9	42.4	42.7	(43.5)		五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩
S325	22.9	36.3	35.6	(31.8)		五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩
S326	13.2	(19.4)	(18.7)	(4.5)		五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩
S327	16.3	22.2	(19.2)	7.8		五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩
S328	13.5	20.5	19.1	5.9		五輪塔	水輪	凝灰岩
S329	(15.3)	(22.3)	(21.7)	(7.0)		五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩
S330	17.4	21.0	21.2	8.3		五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩
S331	14.5	(22.5)	21.4	(7.2)		五輪塔	水輪	凝灰岩
S332	15.0	22.2	22.2	7.6		五輪塔	水輪	凝灰岩
S333	15.7	25.1	23.4	8.5		五輪塔	水輪	凝灰岩
S334	13.7	22.7	23.0	7.7		五輪塔	風輪	天霧系凝灰岩
S335	16.2	23.8	23.6	10.1		五輪塔	水輪	凝灰岩
S336	16.5	22.6	(21.1)	(7.8)		五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩
S337	17.6	24.7	24.6	11.0		五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩
S338	16.3	25.0	(22.35)	(9.8)		五輪塔	水輪	凝灰岩
S339	18.7	23.7	24.5	10.2		五輪塔	水輪	凝灰岩
S340	25.5	31.0	30.8	(23.4)		五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩
S341	22.0	28.6	27.6	18.9		五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩
S342	22.7	(21.8)	(26.4)	(11.8)		五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩
S343	(18.8)	(12.5)	(30.6)	(7.0)		五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩
S344	22.7	30.0	28.6	20.9		五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩
S345	22.6	31.2	30.5	23.6		五輪塔	水輪	凝灰岩
S346	(12.1)	(23.2)	(17.7)	(4.4)		五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩
S347	16.7	23.5	22.2	17.7		五輪塔	地輪	花崗岩
S348	19.2	27.3	(26.4)	(17.0)		五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩
S349	22.0	29.5	29.9	24.9		五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩
S350	20.2	24.5	24.3	(16.4)		五輪塔	地輪	凝灰岩

報文番号	法量	長(高)(cm)	幅(横)(cm)	厚さ(奥)(cm)	重さ(kg)	種別	器種	石材産地
S351	23.5	26.2	25.5	23.6	五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩	
S352	19.7	31.4	30.1	25.9	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S353	26.0	34.0	34.2	51.5	五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩	
S354	(23.9)	36.7	37.0	(33.8)	五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩	
S355	34.2	18.8	19.4	14.7	五輪塔	火・水・地輪	天霧系凝灰岩	
S356	(31.4)	20.8	19.3	(15.1)	五輪塔	火・水・地輪	凝灰岩	
S357	27.3	49.3	47.0	56.4	五輪塔	風輪	天霧系凝灰岩	
S358	20.5	34.0	33.2	(21.8)	宝篋印塔	笠	凝灰岩	
S359	11.8	29.4	(23.5)		石臼	上臼	凝灰岩	
S360	(15.5)	32.7	(25.4)	(20.2)	石臼	上臼	花崗岩	
S361	21.0	(26.1)	(14.7)	(4.0)		水鉢	豊島産凝灰岩	
S362	14.4	(21.5)	(14.5)	(4.0)	不明		豊島産凝灰岩	
S363	(33.0)	31.2	(25.7)	(16.9)	宝塔	塔身	火山系凝灰岩	
S364	21.1	15.1	16.2	5.2	五輪塔	空・風輪	天霧系凝灰岩	
S365	(12.0)	(19.5)	(20.9)	(4.0)	五輪塔	風輪	凝灰岩	
S366	10.7	20.8	(18.3)	(3.9)	五輪塔	風輪	天霧系凝灰岩	
S367	12.8	24.2	(18.9)	(5.4)	五輪塔	風輪	天霧系凝灰岩	
S368	12.5	20.2	19.5	7.7	五輪塔	火輪	花崗岩	
S369	(12.9)	21.6	22.8	(7.3)	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S370	11.7	23.4	24.3	7.0	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S371	15.0	24.1	(19.1)	(7.9)	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S372	(18.5)	28.5	(27.5)	(15.6)	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S373	(17.0)	(18.9)	(27.5)	(8.4)	五輪塔	火輪	火山系凝灰岩	
S374	(17.2)	30.1	28.4	(17.7)	五輪塔	火輪	凝灰岩	
S375	(20.2)	(27.1)	(27.5)	(7.8)	五輪塔	火輪	天霧系凝灰岩	
S376	(14.8)	(31.4)	(31.1)	(10.9)	五輪塔	火輪	火山系凝灰岩	
S377	12.8	18.3	17.2	4.1	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S378	9.0	(13.6)	(11.3)	(1.2)	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S379	(11.5)	(8.2)	(15.4)	(1.1)	五輪塔	風輪	火山系凝灰岩	
S380	(15.6)	24.6	(22.3)	(9.6)	五輪塔	風輪	凝灰岩	
S381	9.9	17.3	16.8	3.3	五輪塔	風輪	天霧系凝灰岩	
S382	(12.1)	(13.1)	(22.9)	(3.5)	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S383	11.7	(10.1)	(15.4)	(1.8)	五輪塔	風輪	凝灰岩	
S384	12.2	20.4	(18.4)	5.5	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S385	12.7	19.6	19.7	5.0	五輪塔	水輪	凝灰岩	
S386	(14.0)	23.5	23.0	(8.0)	五輪塔	水輪	花崗岩	
S387	(19.2)	(30.2)	(21.15)	(11.6)	五輪塔	水輪	天霧系凝灰岩	
S388	(23.0)	(28.7)	(32.6)	(16.1)	五輪塔	水輪	火山系凝灰岩	
S389	14.4	(15.3)	(16.5)	(4.9)	五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩	
S390	12.2	(16.8)	(19.0)	(4.5)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S391	11.6	(15.4)	(19.6)	(3.5)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S392	17.6	17.4	17.9	(6.2)	五輪塔	地輪	豊島産凝灰岩	
S393	10.7	(20.4)	(19.3)	(5.2)	五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩	
S394	12.3	(22.8)	(22.9)	(7.5)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S395	15.4	(20.3)	(19.3)	(6.2)	五輪塔	地輪	花崗岩	
S396	11.2	22.6	(11.9)	(3.0)	五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩	
S397	16.4	24.9	23.5	(12.7)	五輪塔	地輪	凝灰岩	
S398	(20.5)	19.2	17.8	(8.0)	五輪塔	地輪	天霧系凝灰岩	
S399	16.5	33.8	31.7	20.0	五輪塔	地輪	火山系凝灰岩	
S400	35.6	18.2	19.2	17.1	五輪塔	水・地輪	豊島産凝灰岩	

報文番号	法量	長 ( 高 ) (cm)	幅 ( 横 ) (cm)	厚さ ( 奥 ) (cm)	重 さ (kg)	種別	器種	石材産地
S401	(31.3)	(18.9)	(17.7)	(10.7)		五輪塔	火・水・地輪	豊島産凝灰岩
S402	12.2	20.8	(15.1)			宝篋印塔	台石	凝灰岩
S403	11.0	(15.0)	(9.3)	(1.4)		石臼	上臼	豊島産凝灰岩
S404	11.6	(14.5)	(9.4)	(1.8)		石臼	上臼	凝灰岩
S405	(10.0)	(13.8)	(10.8)	(1.8)		石臼	上臼	天霧系凝灰岩
S406	15.1	(24.2)	(17.8)	(4.8)		石臼	上臼	凝灰岩
S407	(10.4)	(13.3)	(17.6)	(2.0)		石臼	上臼	天霧系凝灰岩
S408	(12.1)	(31.3)	(26.8)	(14.7)		石臼	上臼	花崗岩
S409	13.1	(21.2)	(12.9)	(7.5)		石臼	上臼	花崗岩
S410	(13.9)	(26.5)	(26.7)	(10.6)		石臼	上臼	天霧系凝灰岩
S411	(15.3)	(19.6)	(16.7)	(7.2)		石臼	上臼	凝灰岩
S412	11.9	(29.6)	(17.3)	(7.8)		石臼	上臼	凝灰岩
S413	(11.4)	(20.5)	(16.0)	(6.5)		石臼	上臼	花崗岩
S414	(12.6)	(20.3)	(15.8)	(4.7)		石臼	上臼	凝灰岩
S415		(18.6)	11.1	(5.8)		石臼	下臼	凝灰岩
S416	14.8	(17.1)	(25.8)	(9.0)		石臼	下臼	花崗岩
S417	13.5	(14.2)	(23.4)	(6.0)		石臼	下臼	花崗岩
S418	10.2	(19.6)	(12.9)	(2.4)		石臼	下臼	豊島産凝灰岩
S419	13.5	(20.1)	(14.0)	(3.9)		石臼	下臼	凝灰岩
S420	10.0	26.7	(14.1)	(3.6)		石臼	下臼	天霧系凝灰岩
S421	10.2	(10.8)	(16.8)	(1.8)		石臼	下臼	天霧系凝灰岩
S422	21.3	34.9	(19.1)	(27.0)		五輪塔	風輪	花崗岩
S423	26.5	(32.4)	12.5	(10.1)		不明		豊島産凝灰岩
S424	13.1	28.3	23.2	11.1		円形状石造物		砂岩
S425	(30.8)	(44.8)	(41.3)	(34.2)		加工石材		天霧系凝灰岩
S426	(46.4)	15.5	18.2	(14.8)		柱状		豊島産凝灰岩
S431	(22.9)	(12.3)	(12.0)	(3.1)		五輪塔	空・風・火輪	凝灰岩
S432	(12.2)	(18.0)	(15.4)	(3.4)		五輪塔	空・風輪	凝灰岩
S433	18.3	22.0	23.3	10.0		五輪塔	水輪	凝灰岩
S434	35.8	19.5	19.5	20.1		五輪塔	水・地輪	豊島産凝灰岩
S435	14.0	26.3	25.9	(11.8)		五輪塔	地輪	凝灰岩
S436	24.0	29.2	29.0	19.0		五輪塔	水輪	豊島産凝灰岩
S437	24.2	(38.0)	(37.2)	(28.1)		宝篋印塔	笠	凝灰岩
S438	(14.8)	29.3	(33.7)	(10.4)		水路		豊島産凝灰岩
S439	(14.0)	29.1	(24.5)	(9.2)		水路		豊島産凝灰岩

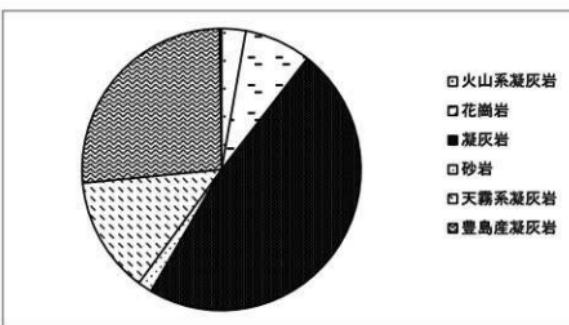
## 天守台の石造物種類

五輪塔	宝篋印塔	茶臼	石臼	墓・基壇	その他	
308	13	3	73	5	24	426



## 天守台 石造物の石材

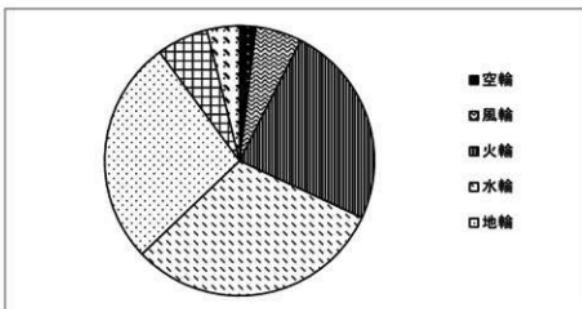
火山系凝灰岩	花崗岩	凝灰岩	砂岩	天霧系凝灰岩	豊島産凝灰岩	
12	34	204	7	57	112	426



第5－102図 天守台出土の石造物（1）

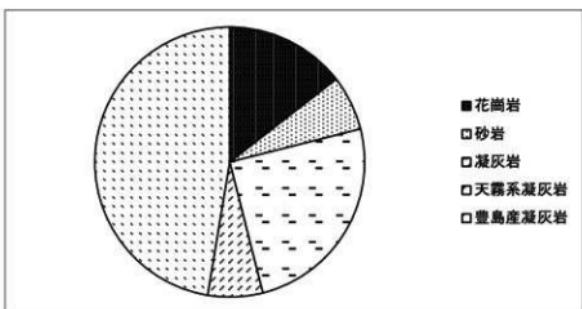
## 五輪塔部分

空輪	風輪	火輪	水輪	地輪	空・風輪	一石五輪塔	
6	17	75	95	83	19	12	307

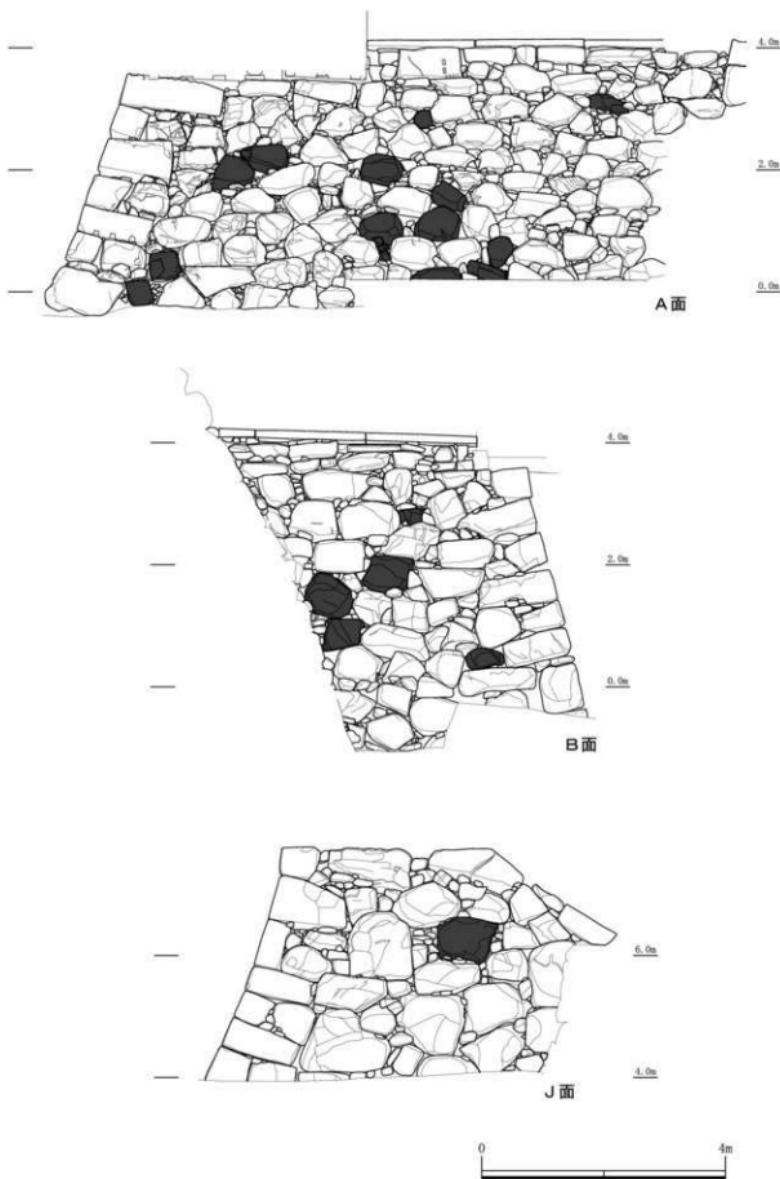


## 石臼の石材別

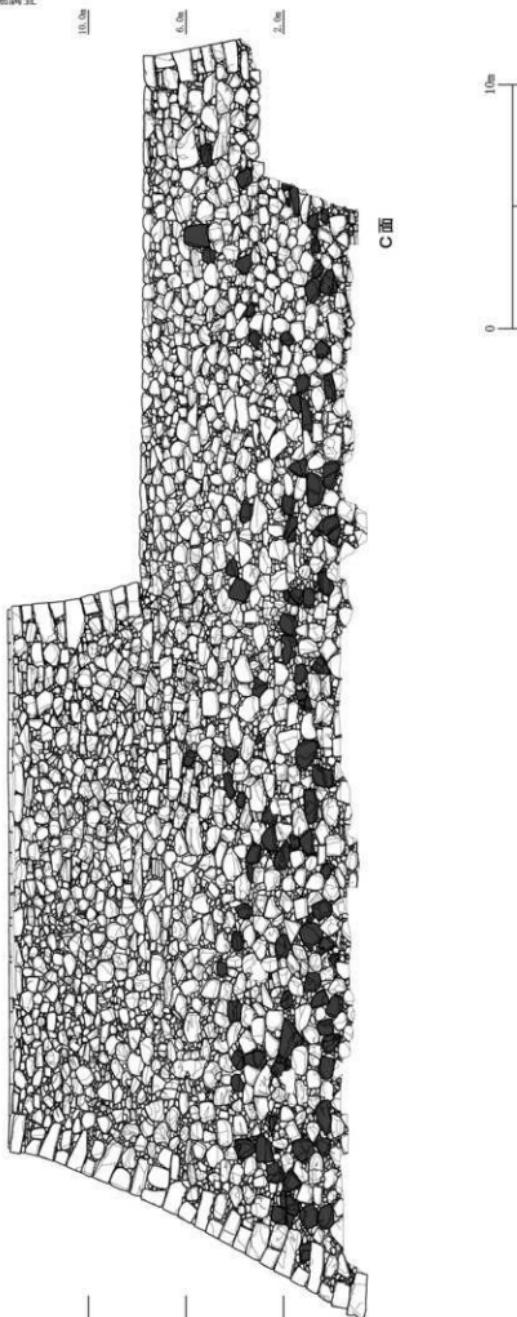
花崗岩	砂岩	凝灰岩	天霧系凝灰岩	豊島産凝灰岩	
11	5	19	5	36	76



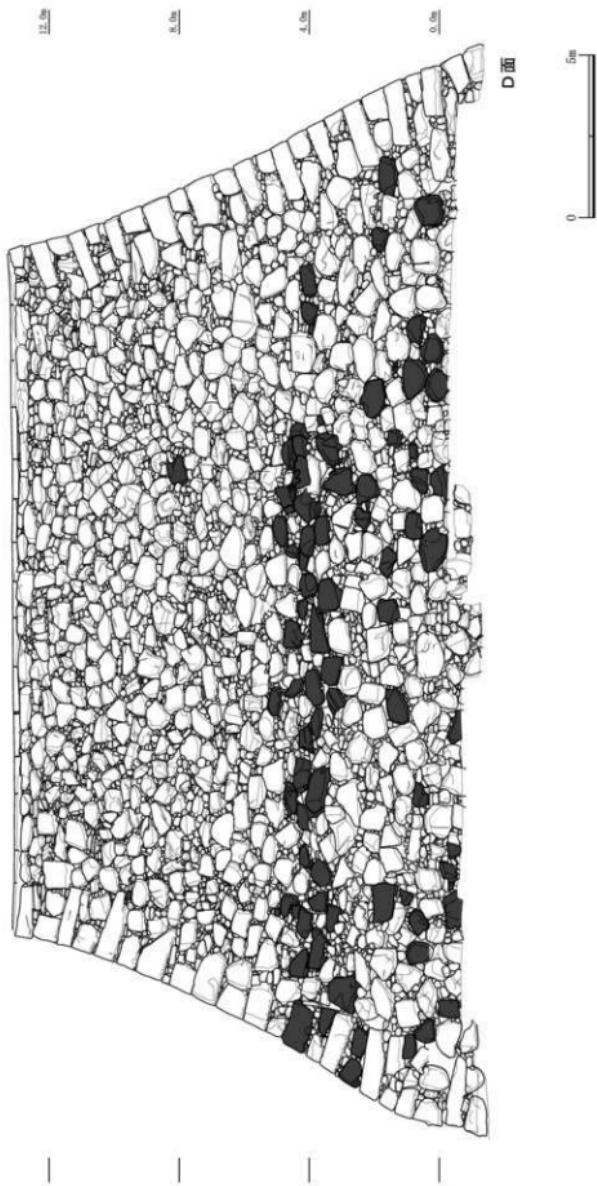
第5-103図 天守台出土の石造物(2)



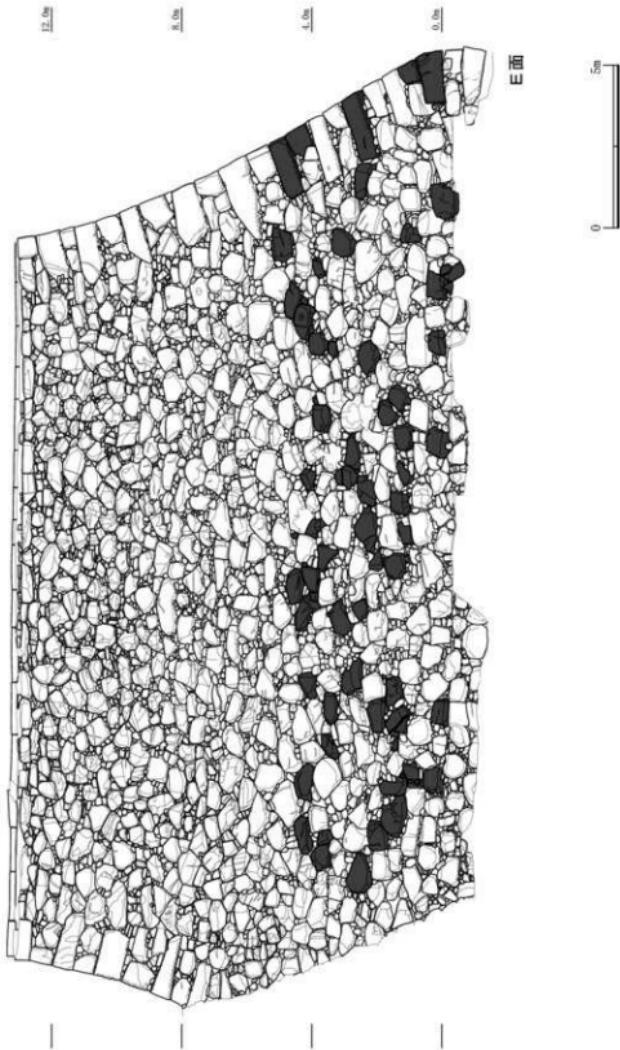
第5-104図 石造物出土位置図A面・B面・J面 (1/80)



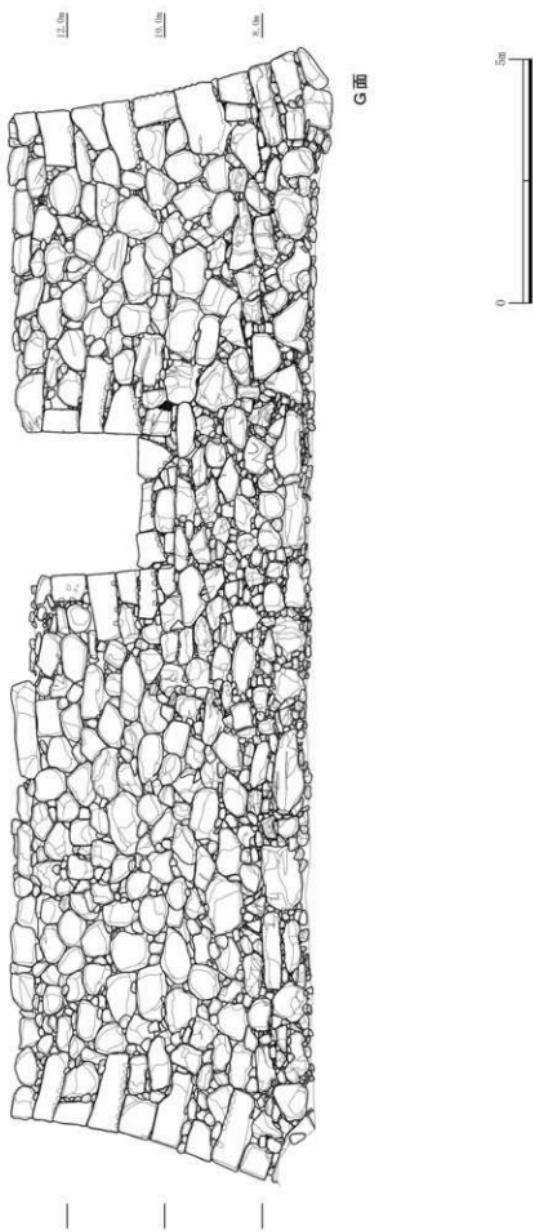
第5-105図 石造物出土位置図C面(1/200)



第5—106図 石造物出土位置図D面 (1/150)



第5—107図 石造物出土位置図E面(1/150)



第5—108図 石造物出土位置図 G面 (1/100)